
偏才～ヘンサイ～

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偏才〜ヘンサイ〜

【Nコード】

N0223E

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

「超能力」とまではいかないが、どこか非凡な才能を持った者たち。極々一部にだけ限れば天才的な素質——それが偏才。なんのとりえもない平凡な少年・直人が数々の偏才者達と出会っていく物語。

第一話・積里 直人

『もしもし。あのお……ここ、相談室で合ってますか？』

その中年女性は、受話器の向こうにいる人物におずおずと話しかけた。

『はい。悩み相談室です』

答えたのは、若い男の声だった。しかし、その声からは若々しさが感じられず、代わりに”渋み”にも似た重さがあった。

『あの……悩みがあって電話したんですけど……その……悩みの内容って、どんな内容でもいいんですか？』

『ええ。どのような悩みでも結構です』

『お金は無料、とチラシに書いてありましたけど……』

『その通りです。あくまでもボランティアですので、相談料などは一切必要ありません』

しばらくためらった後、女性は決心して己が悩みを打ち明けた。

『実は……』

「うん、わかってるよ。それじゃあバイバイ」

買ったばかりの携帯電話を閉じて、つもり積里 直人はふっと息をついた。高校に入学すると同時に一人暮らしを始めたおかげで、毎日のように母親から電話がかかってくる。

「ナオー、電話終わったかあ？」

一緒に帰る約束をしていた友人が声をかけてくる。母親との会話を友達に聞かれたくない、という思春期特有の想いを汲んで少し離れたところで待機していたのだ。

「終わったよー。待たせてゴメンね」

直人は急いで友人のもとへ走る。平均より少し背が低く、しゃれっ気のない短髪や大きな丸い目のせいで中学生のような外見だ。（実際につい先月までは中学生だったのだが、同年代と比べると幼く見える）

「おばさん、なんだって？」

「ちゃんとゴミ出しに行ってるかとか、カップ麺ばかり食べてないかとか……いつもと同じことをしつつこく言われた」

「ハハハ。そりゃあ当然だろ、親として」

小学校からの直人の親友である栄さかえ 和仁は笑いながら髪をかきあ

げる。こちらは背が高くスラッとしており、中学時代はバスケット部のエースとして活躍していた。

「かず君は、高校でもバスケットやるの？」

「もちろんだろ。それで推薦取ったんだから。……ナオ、お前もバスケット入るか？」

「む、ムリだよっ！」

「ハハハ。冗談だよ。高校からいきなり始めてどうにかなるもんじやねえからな」

直人は比較的運動が苦手なタイプであった。

「バスケットって難しいんだよねえ……。色んな事やらなきゃなんないんだもん」

「そうそう。一応ポジションによって役割はあるけどよ、ボールを奪う、相手のガードをすりぬける、狙ったところにパスを出す……。色んな技術の才能が必要だからな」

「才能、かあ……」

僕の才能って、なんだろう？ 直人はそう考えながら歩いた。が、ほんの数歩でその思考は中断された。ある人物の姿を捉えたからだ。

二人よりいくらか前を歩いている、同級生の女子。中学から同じクラスだったので名前は知っている。平崎^{ひらさき}結子^{ゆいこ}だ。中学2年まではソフト部のエースピッチャーとして活躍していたが、秋大会を期

になぜか突然退部していた。それまでは短くしていた髪も、今は背中
中の半分を覆うほどに伸びている。

（一人で帰ってるのかな？ なにか探し物してるみたいだけど……）

「……オ、ナオ、聞いてるか？」

「え、あっゴメン、聞いてなかった……」

和仁に声をかけられ、直人は結子から視線を外した。

「オレ、今日バイトあるからこっちの道行くな。そんじゃまた明日」

「あ、うん。バイバイ」

和仁が角の向こうに消えるのを見送り、直人は視線を戻した。

「……あれ？」

いつの間にか、結子はいなくなっていた。道は直線で、右は河原、
左は人の身長ほどの高さがある石垣になっている。

「どこ行っただろう……？ まさか、この石垣を登って上に行った
ってことはないよね」

しばらくキョロキョロとあたりを見回すが、どこにも気配はない。
やがて、後ろの方から他の生徒達がやってきたため探索を打ち切っ
て再び歩きだした。

「あ、しまった」

アパートのすぐ近くまで帰って来たとき、直人は誰にともなくつぶやいた。

「図書館の場所、確認しなきゃならないんだった」

直人は、いわゆる”本の虫”というやつである。ヒマさえあれば本を開き、時間の許す限り読み続ける。そのため無料で本が読める図書館は生活の上で欠かせない存在だった。しばらく考えた後、直人はアパートへは帰らず来た道を戻り始めた。図書館へ向かうコースだ。

「えっと……こっち、だよね」

簡易版の地図を見ながら図書館を目指す。直人は方向音痴ではないが、ここ数年で急激に都市発展してきたこの町は道路や建物が複雑に入り組んでおり、結局道のりにして20分の所を38分かけてようやく目的の建物を発見できた。

「やっと見つけたあ。ちょっと中のぞいてみようかな」

と、目的地へ一步踏み出した時――。

「ワンッ！」

「うわっ!?!」

犬だ。茶色い毛の、獰猛な顔つきをした大型犬が建物の陰から現れた。

「グルルル……」

犬は直人を見据え、低く唸り声をあげる。下手に近付くと飛びかかってきそうだ。

「な、なんだよ。なにもしないからサ。大人しくしててよお……」

視線を犬に固定し、出来るだけ静かに足をあげて前進する。

一步、二歩……。三歩目で、犬が動いた。

「ガルルルッ！」

「うわっうわああ！」

ガツシリとした4つ足がアスファルトを蹴り、牙をむいて直人を襲った。

第二話・町立図書館の秘密部屋

痛みは、一瞬遅れてやってきた。犬にかまれたのではない。とつさに犬をかわした反動で転び、右ひじをすりむいたのだ。

「ぐるるる……」

「ちよっ、ちよっと待ってよッ！」

直人はひじをかばいながら立ち上がって声をかけるが、犬はお構いなしに第二撃の動作に入る。

「うわっあああ……」

パニックに陥りかけた直人の耳に、鋭い声が飛び込んできた。

「伏せてっ！」

「えっ？」

わけもわからず倒れるようにしゃがみ込む。その直後、何かが背後から飛んできた。それは直人の頭上をかすめるように通り抜け、すぐ目の前にまで迫っていた犬の口内に飛び込んだ。

「ギャウッ！」

驚いた犬はそれを吐き捨て、一目散に逃げ出した。この間、わずか1，2秒。

「野球の……ボール？」

「大丈夫ですか？」

そのボールで犬を撃退したらしい人物の声がする。その聞き覚えのある声に反応して直人は振り返った。

「ひ、平崎さん!？」

「えっ? あっ、積里君? 同じ中学の……」

平崎結子は、直人と特に親しかったわけではない。何度か会話をすることはあったが、体育会系の結子と読書家の直人とは共通の話題も少なく、「ただのクラスメート」としてしか認識していなかった。結子の方は。

しかし、直人はもう少し特別な存在として結子を捉えていた。自分にはない軽快さと運動神経、そして笑顔のよく似合うこの少女に、直人は片思いをしていた。

「あのデカ犬、最近よく見かけるのよねー。やたらと人を襲う凶暴な奴だから今度会ったらとっ捕まえてやろ」

「あ、あっあっありがとう……平崎さん」

礼を言う直人の顔は耳の先まで真っ赤になっている。それはそうだろう。片思いをしていた少女にこんなカッコ悪い姿を見られ、しかも助けられたのだから。

「積里君って、この辺に住んでたっけ？」

「おととい引っ越してきたんだ」

「一人暮らし？」

「う、うん」

直人の脳内で、相反する二つの考えが渦巻いた。

（うっわあゝハズかしい……。早く帰りたい。けど、久しぶりに平崎さんと話もしてみたいような……）

「あっ積里くん、ひじから血が出てるわよ」

結論を出す前に結子が怪我に気付いた。

「だ、大丈夫だよ、こんなの」

「ダメダメ。すぐそこに手当でできるところあるから、ついてきて」

直人は一瞬、結子の家に連れて行ってもらえるのかと思ったが、結子は図書館の中へ入って行った。

「この中で手当するから。早く」

「こ、ここで？」

確かに救急箱の一つぐらいは置いてあるだろうが、それを無関係者が勝手に使ってもよいのだろうか。そう思いながらも、直人は黙って結子に続いた。

図書館は比較的新しく、きれいに整えられた内装だった。学校帰りの学生の姿も見られる一般書庫室を素通りし、二人は奥の扉を開いて廊下に出た。

「ここって、一般の人が勝手に入っているの？」

声を抑えて尋ねると、結子はあっさりと答えた。

「よくないのよ。私は関係者だからいいの」

「関係者？」

「着いたよ」

廊下の突き当りにある、一際大きな鉄製の扉。その向こうから、誰かの話し声が漏れ聞こえてくる。

「あ、そうだ。積里君って何組？」

「二組だけど」

「それじゃ、知ってるかもね」

そう言いながら結子は扉を開く。重々しい音と共に室内の光が廊下にあふれだし、中の様子が見えた。

「おかえり、結子。見つかったか？」

「そん坊主は誰ね？」

中にいた人物は二人。直人と同じ制服を着た男子が六人掛けの閲覧席に座っている。その周りには2メートル以上もの高さの本棚が立っているが、そこに並んでいる本はいずれも古びた原書ばかりだった。

「少し似たようなやつなら見かけたけどね、性格が全然違った。この人は二組の積里 直人君。中学ン時の同級生」

結子は直人を部屋に迎え、中から扉を閉める。

「は、はじめまして」

直人は結子が自分のフルネームを覚えてくれたことに感激しながらあいさつをする。しかし、すぐに違和感を覚えた。

（はじめまして、じゃない……？）

おかえり、と言っていた茶髪の男子に見覚えがあった。どこかで見た顔だ。

「一年の二組と言ったら、ジョーと同じクラスやねえけ？」

もう一人の男が口を開いた。この男の制服についている学年章は三年生のものだった。

「ジョー、知ってる？」

（ジョー……？）

直人は記憶を探って思い出した。まだ会話したことはないが、確かに同じクラスにいた生徒だ。

「ああ、そう言えばクラスにいたような」

そう言ったのは直人ではなく、ジョーと呼ばれた男の方だった。

「オレは立国^{たてくに} 丈二^{じょうじ}。ジョーって呼ばれてる。よろしくな」

「よろし……く？」

「おりゃあ九断^{くだん} 光助^{こうすけ}。こん中じゃあ一番年かさやけど、タメ口でいいかいね」

光助と名乗った男は言葉に訛りがあるせいか、相当老けた印象を受ける。もっとも、顔つきだけを見れば中々の好男児なのだが。

「ちょっと、違うわよ。積里君はただ怪我の手当てに連れてきただけ」

結子の言葉で、二人はようやく直人の傷に気がついたようだ。

「なんだ、そうか。新メンバーかと思った」

「救急箱ならそこん棚の上にあっぞ」

（新メンバーって、何の？）

直人は、この奇妙な集団に得体の知れぬ不安と好奇心を持たずにいられなかった。

第三話・その名は偏才

（それにしても、なんなんだろう。この人たちの関係は……）

「ん、なんか言った？」

「ううん。なにも」

直人はひじの手当てをしてもらいながら、改めて室内を見渡す。部屋の大きさは学校の図書室と同じ程度だが、明かり窓がいか所しかないため、室内灯がついていなければ相当薄暗く陰気な空間だろう。

「ここんどこ仕事来ないなあー。結子のヤマも手伝うほどじゃないだろうし」

「町が平和なんはいいいこっちゃ。別に給料もろうて働いとるわけなんねえかいね」

二人の男——立国丈二と九断光助はすでに直人への関心をなくしたらしく、何やら妙な話をしている。

「ボスカい連絡が来るまで待つしかねえわ。時間潰すための本ならいくらっでんあっぞ」

「難しすぎて読めねえよ、ここの本は」

丈二は本棚を見上げ、ため息をつく。

（なんか今『ボス』とか聞こえたけど……気のせいだよな？）

「はい。これでよし。ちょっと大きさにガーゼしといたわ」

「あ、ありがとう」

結子の治療の手際はよかった。元運動部ということもあって、小さな怪我の処置は慣れているのだろう。

「ただ、制服が破れたのはマズイわねえ」

制服の右ひじの部分はアスファルトで擦れ、小さい穴が開いていた。

「あ、この程度なら……」

と、直人が言う前に結子が二人に声をかけていた。

「ねー、どっちか裁縫できる？」

「ムリ」

「不可」

「だと思った」

（なら何で聞いたの……）

直人は密かにツッコんだ。

「私もこーゆーのは苦手だしなあ……」

「あ、この程度なら僕が自分で出来るよ。ちょっとした才能……とか、言ってみたりして……」

「……………え？」

（え？）

結子が小さな声をあげ、目を丸くして直人を見つめる。

「得意なの？」

「う、うん。縫い物は子どものころからよくやってるから……」

直人もまた驚いて目を丸くしている。結子だけでなく、丈二や光助までもが自分の方を注目し、席を立て近づいて来ていることに気付いたからだ。

（え、なにになに？ そんなに珍しいことだっけ？ 裁縫って。それとも、僕のことを何の取り柄もないダメな奴だと思ってる、それで驚いてるの！？）

恐る恐る、丈二が口を開いた。

「えっとツモリ君、だよな？ 縫い物が得意ってのはその……どのくらい？」

「いやその、どのくらいって言われても」

「そんな……どんなものでも一瞬で正確無比に縫いつけられるつちゆうぐらいのもんけ？」

「いやそこまでは……」

「得意なのって、裁縫だけ？」

「一応、家庭科で習うようなことは大体得意だけど……！？」

三人に食い入るように問い詰められ、直人は奇妙な恐怖感に襲われる。

（ちよつ、ちよつと本当に何なのこの人たち！？ 才能って言った途端スゴイ反応……）

少し間をおき、最終確認、と言うように結子が問いかけた。

「特に練習とかしないでも、最初っからかなり上手かった？」

「……う、ううん。最初はかなり失敗ばかりだった……」

しんとした静寂が、図書館の秘密部屋を覆った。廊下の向こうにある一般書庫室で本を出し入れする音が聞こえるぐらい、静かだった。

（ボク、なにか地雷踏んだ？ いけないこと言った？ 手当てしてもらってなんだけど、もう解放して家に帰してよく。お願い平崎さん……）

今にも泣きそうな顔で、必死に心の中で祈る。すると、その祈り

が通じたのかどうか知らないが、三人は一斉に口を開いた。

『……つはあゝ』

ホッしたような、残念なような。どちらとも取れるため息だった。

「ちょっと一瞬、期待したんだけどなあ」

「ああ俺も。ドキッとした」

「まあ、そうゴロゴロおるもんでもねえしな。本物ならボスが連絡してくるはずやし」

さっきまでの熱気がウソのように冷めて行く。

（イキナリ寄ってきたり離れたり……もう、さっきから訳のわからないことばかりじゃん！　なんで僕がこんな目に会わなきゃならないの！？）

これまでの一連の出来事に、気の弱い直人もさすがに怒りを感じた。

（もしかして、みんなでからかってるの？　新手のイジメかなにか！？）

混乱と怒りが混じり、瞬時に爆発した。

「イイ加減にしてよ！　もう！」

バンッ！　と勢いよく机を叩き、怒鳴りつける。

「ここは一体、何の集まりなの！？　ボスだとか仕事だとか、子どもの遊びみたいなこと言って何がしたいの！？」

「つ、積里君、落ち着いて……」

「あゝあ、坊主がパニくりおったわ。結子、なぐさめて説明しちやうりい」

「う、うん」

光助に指名され、結子が興奮する直人の肩に手を置く。

「ゴメンね。思わず驚いちゃって……。説明してあげるから落ち着いて」

そう言われ、直人の怒りは収まった。もともと怒りの爆発は一瞬だけだったらしい。ただ代わりに、結子の手が自分の肩に乗っているという事実のせいで興奮は収まらなかった。

「いい？」

「あう……うん」

早まる動悸を必死に抑えつつ、視線は結子の瞳に固定したままうなづく。

「今私たちが驚いたのは、才能って言葉を聞いたから」

「えっ……。それってヤッパリ、僕に特技や才能があるのが、そん

なに意外でおかしいってコト……?」

「ううん、そうじゃないのっ!」

結子は激しく頭を横に振って否定する。

「私達は……才能って言葉に敏感なの。それで集まったメンバーだから」

「才能で?」

「そう」

ゴクリとツバを飲み、一言ずつハッキリと言った。

「私達は、『偏才』なの」

「へ、へんた……?」

「へ・ン・サ・イ。おねーさん怒るよ?」

冗談を言う余裕は、互いに取り戻したようだった。

第四話・解答と解放

「それでそのお、ヘンサイってのは、いったい何？」

「百聞は一見にしかず。見ててよ」

結子はカバンの中から野球のボールを取り出し、自慢げに微笑む。

「あの本棚の、本と本の隙間」

「え？」

結子の指さした本棚を見ると、一か所だけ、並んだ本の間に20センチ程の隙間が空いている部分があった。

「あの隙間に、このボールを投げて通すわよ」

「ええっ、ここからっ!？」

距離は裕に10メートルはある。まるっきり不可能というわけではないが、そう簡単にできるものではない。

「まあ、見てなさい……よっ！」

軽い投球モーションから、ボールが本棚めがけて飛んで行く。それほど速くはないストレートがほぼ一直線に飛び、20センチの隙間を見事に貫通した。

「おおっ！」

「どんなもんよっ！」

バン！ ドサドサドサ……。

「あ」

「結子。お前通り抜けたボールが向こう側の棚の本にぶつかること考えてなかったろ」

丈二が携帯電話をいじりながら呆れた声を出す。ボールがぶつかった本棚にはただでさえ古くボロボロな本ばかりが並べてあったため、衝撃を受けてたやすく崩壊したようだ。

「やっばー。もとに戻さなきゃ」

「ぼ、僕も手伝うよ」

直人と結子は慌てて本棚に走り、落ちた本を拾い集める。

「つか、ジョー。あんた気付いてたなら投げる前に言ってよね」

「投げた後に気付いたんだよ。光助に言われてな」

「光助！」

「室内でボール遊びしちゃいけませんっなんて、言わんでんわかるやろうと思ってな」

「納得」

まるで漫才だ。直人は思わずクスリと笑った。

「あー、今、積里君笑った？」

「えっいや、そんな……」

そう言いつつも口元はニヤついている。

「ま、それはともかく。私は子どもの頃から得意なの。野球やソフトのボールを投げて、狙ったところにズバッと入れるのが」

結子は拾ったボールを手の平でもてあそびつつ、言葉を続ける。

「でも得意なのはコントロールだけで、球速や変化球なんかは人並み。練習してそこそこはよくなったけど、それでもコントロールだけが抜群にいいの」

「はあ……」

二人は本を片付け、閲覧席に戻って腰を下ろした。

「特に練習したわけでもないのに、子どもの頃からそうだった。あ、そうそう。ダーツや輪投げなんかも人並み。球形のものじゃないとダメみたい」

「それで……それが、偏才？」

「そう」

以下は、直人が説明を聞いてまとめた『偏才』の定義である。

- ・ 極々一部、限られた範囲でのみ発揮される。
- ・ 練習や特訓を必要とせず、その道の達人と同程度の結果を出せる。

・ それ以外の能力に関しては人並み、あるいはそれ以下であることが多い。

「一般に『天才』と呼ばれるものの中でも、特に狭い条件下でしか発揮されず、使えるんだか使えないんだかよくわからない究極の専門バカ。それが偏才。ちなみに辞書には載ってないわよ」

と、いうことらしい。

「はあ……じゃあ、僕の裁縫は違うんですね」

「そう。練習して身につけて、特定の分野全体が得意ってのは偏才じゃないのよ」

誰が名付けたかは知らないが、言িয়েて妙だ。そして、結子は先ほど確かに『私たちは、偏才なの』と言っていた。つまり。

「あの、ジョー……ジ君と光助さんも偏才なの？」

「さんはいらん。タメ口でいいと言うたろう」

光助はニヤリと笑って見せる。

「それよか坊主、もうそろそろ家に帰らんでいいとけ？」

そう言われて時計を見ると、6時半を過ぎていた。

「あ、晩ご飯の支度しなきゃ。制服も縫わなきゃなんないし」

「なんだったら、これからみんなでどこかに食べっ——」

突然、結子の言葉が止まった。直人からは見えなかったが、光助が指で合図を送ったようだ。

（今日は、一旦帰らしとき。いっぺんに色々言っても混乱すっじやろう）

と、そこまで正確に読み取ったかどうかはわからないが、結子はそれを汲んだ。

「それじゃあ残念だけど今日はここまで。明日またここに来たら……って、それより前に学校で会うか。アハハ」

「あ、そうだね。アハハハ……」

「別に無理して笑うところじゃあねえぞ」

なにはともあれ、直人はようやく図書館から出た。外はもうだいぶ暗くなっている。

「今日は色々あったなあ……」

大きくため息をつきながら、今日の出来事を反すうする。凶暴な

犬。片思いの人との出会い。奇妙な才能の話。なにやら妙に疲れてしまった。

「あ、そういえば、ボスがどうのこうのって結局なんだったんだろう……。それもヘンサイが絡んでるのかな」

夜道を歩きながら、直人は考えを巡らせる。目の前に電柱が迫っていることにも気付かないくらい、集中して考えていた。

ゴン。

「あっ、痛っ！」

もろにぶつかり、頭がじんじんと痛む。

「いったあ……。本当、今日は色々ありすぎ——」

顔を上げた直人の目に、電柱に張られた広告のうたい文句が映った。街灯に照らされたそのチラシには、『お悩み相談・どのような悩みでもご相談ください。もしかしたら……解決なさるかもしれないかもしれません』と書かれ、連絡先の電話番号が記載されていた。

「ちょっと変な広告だなあ。悩み相談自体は珍しくないけど、解決するかも、なんて普通チラシに書いたりしないよね。無責任だ」

直人は疑問に思ったが、当面の問題である自分の空腹と破れた制服を解決するため、急いでアパートへ向かった。

まさか、自分がこの広告の主に電話をかけることはないだろう。と、たかをくくりながら。

第五話・平崎 結子

『三番レフト、岩田さん』

最終回裏、2対1。ツーアウト1、2塁。

（あと一人……あと一人抑えれば勝てるっ！）

汗が全身から吹き出し、ユニフォームの中はびしょぬれになる。秋になっても衰えることを知らない太陽の熱が、マウンドに立つ華奢なソフトピッチャーの体力を容赦なく奪っていく。

『あと一人。しまっていこーっ！』

キャッチャーの明石が両手をあげてチームに換気を促す。その声が、ピッチャーの疲労をわずかながらごまかしてくれる。

（ここまで来たんだ……絶対に負けられない。）

明石の出すサインを見、第一球を放る。

『ストライークッ！』

絶妙なコントロールのインハイ。少しでもボールがズレれば長打になりかねない。

『OK ゆいこ！ 球、走ってるよ！』

ボールを返しながら明石は笑って見せる。小学校からの親友は、

いつも結子の支えとなってくれていた。

（大丈夫……っ！ サインの通りにキツチリ投げれば勝てる……っ！）

結子は明石の配給リードを信頼していた。コントロールだけが持ち味の結子が二年間レギュラーでいられたのは、明石の頭腦的なリードがあつてのことだった。

（絶対、大丈夫！）

体を沈め、腕を弓のようにしならせて第二球を投げる。キャッチャーミットめがけて、真っすぐにボールは走った。そして……。

「ゆいこーっ！ 早く起きなさいってば！」

「ん……ん……」

すぐ耳元でジリリリ、と不愉快な音が響く。目覚まし時計が己の職務をまっとうしているようだ。

（久々に、あの夢見ちゃった……）

急激に気候が暖かくなってきたせいか、はたまた夢のせいなのか知らないが、全身にうつすらと汗がにじんでいる。

「シャワー浴びる時間は……ギリギリありそうね」

生真面目な目ざまし時計を鎮め、手早く着替えを用意してバスルームに飛び込む。

『偏才のこと、しゃべっちゃったけど別にいいよね？ 秘密にするわけじゃないし、私達が勝手にそう呼んでるだけだし』

『知られたところで何も問題はないだろ。ただ、仕事のことは一応秘密にしといた方がいいんじゃない？』

『ボスのこともな。聞き間違いだとか何とか言って、上手くごまかしといてくり』

『……って、ボスのことしゃべったのあんたたちだよねえ……』

そんな会話を交わして、昨日の集会はお開きとなった。

「あーあ、一番近いからって、あそこで手当するんじゃないかった。後で隠ぺいするぐらいなら最初っから聞こえるように会話するなっ
ての」

シャワーを終え、大急ぎで朝食をとる。まだ遅刻の心配がある時間ではないが、結子にはやるべきことがあったのだ。

「いってきまーす」

「ねーちゃん、もう行くのー？」

「高校生は忙しいのよ」

小学生の弟の頭を小突き、玄関を後にする。

「さてと、仕事仕事」

そう言って、結子は狭い路地裏へと姿を消す。

結子が学校近くの大通りに現れたのは、それから20分後だった。

「やれやれ……今日も収穫なし、かあ……。やっぱりこの仕事、光助の手を借りた方がよかったかな」

ブツブツ言いながら、仕事を終えて学校へ向かう。その。

「あ、あの……」

「ッ！」

突然、背後から声をかけるものがいた。

「おはよう。平崎さん」

「お、おはよう。積里君……」

お互いに予定外の再会である。

（やっばー。さっきの独り言、聞かれてないわよね……？）

「平崎さんって、いつもこのぐらいの時間に登校するの？」

焦る結子に対し、直人は違う意味でドキドキしながら質問する。

「ま、まあ、大体毎日このぐらいの時間ね」

「へえ。そうなんだ」

（やった。聞かれてなかった……）

（やった。もしかしたら毎朝会えるかも……）

それぞれの理由から、二人はごく自然に笑みをこぼした。

「ぼ、僕も、この時間に来るようにしてるんだけど……その、もしよかったら……」

直人は顔を赤らめながら話を切り出す。直人なりに、好きな異性と仲良くなれるチャンスを活かそうと努力しているのである。

が、当の結子はまったくそのことに気付かず、別の思考をしていた。

（今、ボスのこととか聞かれると面倒ね。ジョーと同じクラスらしいから、アイツに押し付けよつと。とりあえず今は話題を他のことに集中させて……）

「あ、あの……もしよかったら、明日から」

「明日から一緒に学校行く？」

「え？」

あまりにストレートに望みが叶ったため、直人は反応が遅れた。

（え？　そう言う話じゃなかったっけ？）

叶えた結子も一瞬戸惑う。

「いいの？」

「うん」

（やったあーっ！）

心の中で大喜びする直人。一方、結子はホッとしたのも束の間、別の問題に気付いた。

（って、一緒に登校する約束しちゃったら、明日から朝の仕事が出来ないじゃんっ！）

こればかりは自分で解決するしかない。よく考えもせずに話を合わせてしまった自分を呪う結子であった。

第六話・屋上ギャンブル

「おーっす、ジョー」

「おう、おはよう」

クラスメートに校門で声をかけられ、立国丈二はごく自然にあいさつを返す。

丈二は直人たちよりも10分程早く学校に来ていた。しかし、学校へ着いた彼が向かった先は自分の教室ではなく、屋上へと続く階段であった。

「お前が新入りか？」

階段の踊り場に、先客がいた。いかにも強面の屈強な体格をした三年だ。

「ええ。光助さんからの紹介で、ジョーって呼ばれてます」

疑り深い目つきにも丈二は怯まず、笑ってさえ見せる。

「……よし。入りな」

強面の男は、屋上への扉を開けて丈二を招く。

（入るんじゃないくて、出るってのが正しいんじゃないか？）

そう思いつつ、丈二は屋上へ出る。そこにもまた先客がいた。

「おう、来たか」

強面と丈二を合わせて、屋上にいるのは五人。先客の中には、九断光助もいた。

「そんなじゃあ早速始めっかね。時間もあんましねえこっちゃし」

光助の声で、五人が輪になって座り込んだ。

ニヤニヤと笑みを浮かべる者。新入りの見定めをしようとする者。そんな者たちに挟まれ、丈二はただ押し黙っていた。己の任務を全うするために。

丈二が任務を言い渡されたのは、昨日の夜、直人が図書館から帰宅して丈二たち三人も帰り支度をしていた時である。

『……って、ボスのことしゃべったのあんたたちだよねえ……』

呆れたように結子が言い、先に部屋をを出て行った。

『ツモリ……か。結子の知り合いなんだから、ボスのことごまかすのはアイツに任せていいよな？』

『そうすつとがよかろう。あん坊主も、おりゃらより結子に話しかけられた方が嬉しいやろ』

などと、無責任なことを話していた時――。

備え付けの電話が鳴った。彼らにとって、特別な人物からの電話がかかってきたのだ。

『ボスからだ!』

『仕事け?』

丈二は急いで電話に出る。相手を確認する必要はない。この電話の番号を知っているのは、『ボス』一人しかないのだから。

『もしもし、丈二です』

『ジョーか……。丁度いい。お前に仕事だ』

ボスと呼ばれた男の声は、どちらかといえば若い。しかし、その声からは一切感情が読み取れない、無機質な声質である。

『光助に聞けばわかると思うが、お前達の学校では生徒間でギャンブルが行われている』

『ギャンブル……?』

受話器を持ったまま光助の方を振り返る。話が聞こえていたらしい光助は、無言でうなずいた。

『動いている額は小さく、あくまで仲間内だけの他愛もない遊びだ。だが、それも先月までだった』

そこまで聞いた光助は、驚いて目を丸くする。

『そのギャンブルに参加しているメンバーの一人が、後輩を無理やりゲームに引き込んで金を巻き上げたのだ』

『……初耳だ』

光助は小さくつぶやいた。光助自身、何度かそのギャンブルに参加したことはあったが、今ボスが話したことは初めて聞いた。そのメンバー間の取り決めでは、自らの意思で参加を希望したもののみを、ゲームに入れてもよいという事になっていたのだ。

『巻き上げた額も大金ではないが、その被害者はこれからもゲームを強制させられるのではないかとひどく怯えている。これは問題だ』

『そこで、俺の出番ですか』

『そうだ。光助と組んで、そのギャンブル・チームに参加しろ。そして二度とそいつらが博打を打てないようにしてやれ』

『了解です』

具体的な方法は、ボスに言われずともわかっている。丈二に出来ることは一つしかないからだ。

「光助、お前が参加するのは久しぶりだな」

今回のターゲット・ギャンブルチームのリーダーがそう言った。見る者を威嚇する派手な金髪。卑しい笑みを浮かべる口元からのぞく黄色い歯。典型的な不良気取りのチンピラだ。

「そうやねえ。ここんどこ大人しくしとったな」

「久々に来たと思ったら、新入りまで連れて来てくれてよ。いい手土産だぜ」

「そら、どうも」

話しながらも、光助は視線で丈二に合図を送る。

（おそらくコイツが犯人だ。もっとも、指令は二度と博打が開かれぬようにすること。いいな？）

（ああ）

丈二も視線を返す。そして、その視線はリーダーの手元に移動する。正確には、その手に持たれたランプの束に。

「で、勝負種目は何にする？ 俺は何でもいいぜ」

リーダーはカードを切りながら一同に声をかける。そして、一人の顔を見渡した後、その視線を丈二に固定した。

「どうだ？ 新入り君。なんだったらお前の一番好きなゲームでいいぜ？」

再び、ニヤリと笑って見せる。おそらくタバコも吸っているのだろう。ヤニの匂いがその口元から漂っている。

「……そうですね」

あくまでも表面上は謙虚に、しかし、内心は冷酷な仕事人となつて丈二は口を開く。

「ポーカーなら、得意ですけど」

その頃の直人と結子。

「あ、そう言えば昨日、ボスがどうとかって話してるのが聞こえたんだけど……」

「え？ なにそれ聞き間違いじゃない？ 教室でジョーに尋ねてみたらず？」

面倒はごめん、とばかりに丈二に押し付けようとする。

「丈二君に？」

「そ。ついでにあいつの偏才も教えてもらえばいいじゃん。あいつ、この時間にはもう学校に来てるはずだから」

その丈二が屋上にいることを、結子は知らなかった。

第七話・イカサマゲーム

『ポーカー』

配られた五枚のカードを一度だけ交換し、特定の組み合わせ（役）をつくるゲームである。このゲームの面白いところは、一回の勝負で動く掛け金を自由に上げることが出来る、という点である。

「レイズだ。五百円上乘せする」

リーダーがチップを放り、カードを二枚交換する。

「さあ、誰か乗ってくるか？」

自信ありげに、他のメンバーを見下す。

「こわい、こわい。ここは降りるかね」

軽くため息をつき、光助はカードを伏せる。ポーカーは、自分の手役に自信がないときは勝負をあきらめることができる。ゲームの最初に支払う参加料は失うが、勝負に行って負けるよりは被害が少なくすむ。

「一年生、どうする？」

丈二以外のメンバーは全員ドロップ（降参）し、リーダーの視線は「獲物」に固定された。必勝を確信した目で。

「そうですね……。怖いですけど」

丈二は自分のカードをじっと見つめ、宣言した。

「コール」

「よし。勝負だっ！」

二人のカードが、同時に開示された。

「スリーカードです」

「悪いな。俺は純正のフラッシュだ」

勝ち誇った笑みを浮かべ、リーダーは床上のチップを総取りする。
このような展開がすでに4、5回繰り返されていた。

「強気なのはいいが、たかがスリーカードごときで突っ張るのは無謀じゃねえか？」

「ブラフかも、と思ったんですが……」

ブラフ……。本当は弱い役なのに掛け金を上げ、相手を降参させることである。

「新入り君にハッタリかます程、俺の肝っ玉は小さくねえっての」

ガハハ……と、豪快に笑い飛ばす。

（よく言うよ。その趣味ワリい金髪がまさに見かけ倒しじゃねえか）

リーダーに気付かれぬよう、丈二は視線を光助に向ける。

（そろそろ、いいんじゃないか？）

（そうだな。一旦引き揚げるか）

二人の意見が合い、光助が口を開いた。

「そろそろ時間だな。おりやもだいぶ負けがこんじよるし、お開きんすつけえ？」

「あー？ まだもう少しいだろ」

リーダーは不服な声を上げる。もともと、それはすぐに余裕の声に変わる。

「ま、いいか。新入り君からあんまり巻き上げちゃってもなんだしな」

「ハハハ……かなりスツっちゃいました」

丈二は力なく笑って見せる。

「じゃ、昼休みにまた開帳だ。せいぜい縁起でも担いで来な」

「はいッス」

そう言った後も、わざと丈二は立たなかった。他のメンバーが引き上げるのを待ったのだ。特に、自分のすぐ後ろに立ち、手札を覗いていた人物が去るのを。

メンバー達が扉を開けて階段を下って行った頃を見計らい、丈二もまた階段に向かった。

「わかったな？ ジョー。やつらの手口が」

光助が踊り場で待っていた。

「ああ。典型的な通しだ」

運に左右されるギャンブルには必勝など存在しない。いくら気の弱い後輩を引きこんだとしても、都合よく金を巻き上げられるとは限らないはずである。しかし、イカサマを仕込めば別である。

「わざわざ扉を開けっぱなしにして、あとからコッソリ来たやつが俺の手札を覗いていた。ポーカーは相手の手札が読めれば、まず負けることはない」

「通しは素人でもそこそこ出来るからな。サマ使って巻き上げるにやあ持ってこいやろ」

通しとは、複数の人間が協力して行うイカサマである。一人が相手の手札を覗き、その内容を仲間にサインを送って教えるのだ。

「相手の手が強ければ降りる。弱ければまっすぐに勝負する。そんなことやったら簡単に金を稼げる」

「素人を無理やり引き込むは、バレバレなサマを使うは、おりやがしばらく来んうちにすっかり腐れてしもうとるな」

「さっきまでの負け分と、被害者の損害分。昼休みには両方取り返してやる」

「そして、屋上の賭場も今日で終いやな」

丈二と光助は、わざと勝負に負けていたのだ。負けることによって相手の油断を誘い、イカサマの手口を見破ることが目的であった。

「そんじゃ、あとは打ち合わせ通りに頼むわ」

「おう。それじゃ」

光助と別れ、丈二は自分の教室へ向かう。時刻はホームルームが始まる直前だった。

「あ、丈二君おはよう」

教室でまっ先に丈二に声をかけてきたのは、直人だった。

「あっ、おはよう。えーと、ツモ……？」

「積里直人」

「おお、そうだった」

「あの……それで、一つ聞きたいことがあるんだけど……」

結子は結局、『ボス』に関する直人へのフォローをしていなかった。

「昨日、丈二君と光助さんの会話で、確かにボスがどうのこうのって聞こえたんだけど」

（げっ！？ 結子のやつ、まだごまかしてなかったのかよ）

「あれって、どういう意味？」

直人にしてみれば、昨日からずっと気になり続けていたことである。結子に中途半端にはぐらかされてしまい、一刻も早く答えが欲しいのだろう。

（まいったなあ……。ん？ そう言えばボスのことしゃべったのって、光助一人だよな？ 俺は一言もそんなこと言ってないよな？）

しばらく考え込み、丈二もまた結子と同じような結論に至った。

「光助に聞いてくれ。俺もあんまり知らねえから」

直人は、またもおあずけを喰らう形となった。

第八話・猛追の青天井

昼休みとなった。丈二は単身、屋上へと向かう。

「こんにちはー」

「おう、ちゃんと来たな」

リーダーが不健康な歯をのぞかせて笑う。朝のゲームで勝ち続けたせいか、丈二のことを完全にカモとして捉えているようだ。

光助はいない。代わりに、別の男が参加していた。

「一人メンバーがいねえからよ、他のやつを連れてきたぜ。お前と同じ一年生だ」

そう紹介された男は、座っているため正確にはわからないが身長は低い方ではなさそうだ。やせ型で髪を茶色に染めているところを見ると、遊び慣れているという印象だった。

（はーくん、こいつがボスの言ってた被害者か？）

丈二は扉のすぐ前の位置に座る。というより、他のメンバーが丁度そこだけを開けて座っているのだ。自然、最後に来た者はそこに座らざるをえない。

「あの、一つお願いがあるんすけど」

リーダーに向かい、ある提案を持ちかける。

「ああ？」

「レートあげませんか？ 最初に払う参加料を、二千円に」

「な……っ！」

サツと緊張が走る。参加料は、一度支払うとそのゲームに勝たなければ取り返せないのだ。

「それと、レイズの上乗せ金額を青天井にしませんか？ さつき負けたぶんを一気に取り戻したいですよ」

ポーカーは通常、一回のゲームで上乗せできる賭け金に上限がある。この屋上でやっていたルールでは、賭け金は一万円までと決まっていた。青天井とはその上限を無視し、一万円以上を賭けることができるルールである。

「どうっスか？ 小さい額でちまちまやってたんじゃあ燃えないんスよ」

挑発的に笑いながら、ポケットからサイフを取り出して見せる。それも、わざと中身の万札がはみ出て見えるようにして。

「おっおっ……！」

リーダーの目の色が変わった。この男からすれば、イカサマを使い、ほぼ確実に勝てる勝負である。レートは高い方がいい。

「はははっ！ いいぜ、そうしよう」

高笑いし、サイフを床に叩きつける。少なく見積もっても十数万は入っているだろう。

「よし、始めようじゃねえか。チップは通常の倍の値段で扱うことにしようぜ！」

「あ、あの……」

か細い声があがる。無理やり連れてこられた一年生だ。

「オレ、そんなに金ないんですけど」

「あゝ？ なに言ってるんだ。勝てば問題ねえだろ？ か・て・ば」

そう言うリーダーの視線は、丈二の背後に現れたサイン役の男に向けられる。

（イカサマはバレてねえ。一気にむしり取ってやるっ！）

カードを取り出し、シャッフルを開始する。

「ゲームスタートだっ！ 参加料二千、青天井ルールでな！」

丈二は、シャッフルされるカードの束を、ただじっと見つめていた。

「光助さんに聞け、か……。でも、光助さんって何組だろう？ さ

つき丈二君に聞いとけばよかったな」

直人は、『ボス』に関する回答を出来るだけ早く知るべく、光助を求めて三年の教室まで来ていた。しかし、上級生の教室をのぞいて回ることに抵抗を感じ、なかなか行動できずにいた。

「うう……。すごく場違いな雰囲気……。仕方ないや、一度戻ろうつと。結子さんなら知ってるかも」

と、逃げるようにその場を去ろうとする。その時、ふと、窓越しに隣の校舎を見ると、一階の廊下に光助の姿があった。

「あ、あんなところにいた。けど、あそこって職員室とかがある棟だよね……。？」

光助はどこに行くわけでもなく、廊下の壁にもたれて立っている。誰かを待っているかのよう。

「職員室の先生に用でもあるのかな……。まあ、いいや。ちょっと行ってみよう」

そうして、直人は歩きだした。

「すみません、レイズです。二万円」

「に、二万っ!？」

悲鳴に近い声があがる。声の主は、イカサマを駆使しているはず

のリーダーだった。

「どうします？ 受けますか？」

丈二は余裕の表情を浮かべる。その逆に冷や汗を浮かべているのは、丈二の背後に立っている男だった。

（なんなんだ、コイツ……。二回連続で、フォーカードをつくりやがった）

フォーカード。ポーカーでは三番目に強い役である。

（ダメだ、勝てねえ。降りろ）

そのサインを受け取り、リーダーは舌打ちをする。

（クソッまたかよ……）

ギリギリと歯ぎしりし、悔しそうにカードを叩きつける。

「ドロップだっ！」

「そうですか。それじゃあ場に出てるチップは俺の総取りですね」

丈二はチップを回収し、カードをかき集めてシャッフルし始める。通常のポーカーでは、決められたディーラー役がカードをシャッフルしたり配ったりするのだが、ここでのゲームは、誰がやってもよいことになっている。

「とりあえず負け金は回収できましたね。ついでに、ちょっと利子

付きで」

丈二は大勝していた。相手の使っている手口は、勝てる時にだけ勝負し、負けそうな時は降りることだ。しかし、ポーカーは途中でゲームを降りても、参加料分は必ず損してしまうゲームだ。

（勝負しなきゃ、勝負しなきゃ金は戻ってこねえのに、勝負できねえ……）

この時点ですでに5回のゲームが行われていたが、リーダーはその全てを降りていた。勝負できなかったのだ。

（コイツ……なんでさっきから強い役ばかり引いてくるんだ!?!）

背後からのぞく男は、もはや自分の目が信じられなくなっていた。

丈二は5回連続で、参加している他の誰よりも強い手を作り続けていた。自らの「偏才」を用いて。

第九話・立国 丈二

6回戦。この時点で、ゲームに参加しているのは丈二とリーダーの二人だけになっていた。他のメンバーは、負けが込んで参加料すら払えなくなり、二人の勝負を見守るだけになったのだ。

丈二に配られたカードは、すでにキングのスリーカードが出来ていた。

（また、初っ端から役有りかよ。だが、次に交換するカードで最終的にどんな役ができるのか……？）

「さ、チェンジどうぞ、先輩」

「クソ……。三枚チェンジだ」

リーダーはチップを払い、カードを交換する。と、新たに引いてきたカードを見た途端――。

（お……おおおっ！ 来たっ来たっ！）

大きく眼を見開いた。引いてきたカードは、クラブのエース、キング、10。手元に残っていた二枚のカードは、同じくクラブのジャックとクイーン。

（クラブのロイヤルストレートフラッシュ！ これなら間違いなく勝った！）

ロイヤルストレートフラッシュは、二番目に強い役である。

(どうだっ!？ さすがに今度は勝負に行けるだろう!？)

しかし、サイン役の男はなにも合図を出さない。丈二がカードを交換するまで、勝負か否かの判断は出せないのだ。

そして丈二は、チップを出しながら宣言した。

「俺は……四枚、チェンジします」

(よ……四枚っ!？)

サイン役の男は驚いた。わざわざ出来た役を崩すなど、通常ではありえないことだ。

(少なくとも、これでスリーカードは崩れた……)

丈二が、山札から新たに四枚のカードを引く。そして、そのカードを見もせずに場に伏せる。

「さ、先輩。どうします？ これ以上レイズしますか？ 俺はいくらでも受けますよ」

「ナメやがって……」

丈二の引いたカードが見えない以上、リーダーはイカサマを使えない。どんな役が出来たのか、まったく知る手段がなくなった。

(……だが、四枚も交換したんだ。いい手が入ってるわけねえ……)

自分の手札を、じっと見つめる。ジョーカーを含まない、純正のロイヤルストレートフラッシュ。かなり強い役だ。

（四枚も交換して都合よく手が入るわけねえッ！　ブラフだ。今までの連勝を利用して、ハツタリをかましやがったんだ）

そして、ノドの奥から絞り出すように声をあげた。

「レイズッ！　五万だッ！」

叩きつけるようにチップを放り投げる。

この勝負に丈二が勝てば、これまでのゲームで被害者（らしい一年生）が負けた金額も回収できる。事実上の最終勝負だ。

「五万ですか……大きいですね」

丈二はカードを伏せたまま、かすかに笑う。それを見たリーダーの額に、大きな汗の粒が浮かんだ。

（ハツタリだ、ハツタリに決まってるっ！　そう都合よく手が入るわけない！）

「いいでしょう。コールです」

（はあ！？）

チップを追加し、伏せたカードを手取る。

「それでは勝負。俺の手は……」

（まさか、まさか本当にいい手が入ってんのか！？ バカな！ そんなに都合よく……）

一枚ずつ、カードが表向きになって倒される。まず見えたのはスペードの10。続いてジャック、クイーン、そしてキング。

（そ、揃ってるわけがない！ ここまで都合よく……）

「おおっ！ スゲエ！」

観戦していた一人が叫ぶ。

「俺の手は、スペードの純正ロイヤルストレートフラッシュです」

最後の一枚は、スペードのエースであった。

（ツゴウ……ヨク……）

リーダーは、顔面から血の気が引くのを感じた。視界が大きく揺れ、胸の奥から吐き気が込み上げてくる。その手から、カードが表向きに零れ落ちた。

「先輩のカードはクラブのロイヤルススか。残念ですね。俺の勝ちです」

ポーカーでは同じ数字を使い、同じ役が複数のプレイヤーに同時にできた場合、スペードのマークを使ったものが一番強いとされるのである。

「いやゝ珍しいッスね。二人同時にロイヤルなんてめったに出ませんよ。あ、もう時間何でチップ精算します」

ここでのギャンブルは、勝負前に現金をチップに代え、時間終了後にチップを現金に戻せるようにしていた。丈二は手早く、精算所に置かれた現金を掴み取った。

「そんじゃ、俺はこれで……」

「ザケンじゃねえぞ、てめえっ！」

正氣に戻ったりリーダーが叫んだ。

「勝ち逃げなんか許すと思ってるのか！？ その金戻しやがれ！ 続行だっ！」

「あれ？ 参加したくない奴を無理にやらせるのはダメだったんじゃない？ あなかったッスか？」

そう言いながら、丈二はさりげなく腕時計を確認する。

（……予定まであと1分、か）

「座れつつってんだよ！ どうせイカサマでもしやがったんだろッ！？」

と、イカサマをしていた本人が怒鳴る。

（……イカサマ、ね。そんなの俺には必要ないな）

立国丈二の偏才――。

（トランプ・カードに好かれちゃってるからね。俺は）

「てめえ、なんとか言いやがれッ！」

リーダーが再び怒鳴り、丈二の腕をつかむ。だが、丈二はあくまでも冷静だった。

（あと数秒……GO!）

「あっ、おい！」

丈二はリーダーの腕を振り払い、扉とは逆の方向へ走り出す。

「待てっ！」

「バカ野郎っ！ そっちは……おいっ!？」

迫ってくる男たちの手を交わし、丈二は屋上から飛び降りた。

第十話・脱出芸

丈二の姿が、屋上にいる者たちの視界から消えた。

「バツ……バカかアイツ！　ここ四階建てだぞっ!？」

リーダーが慌てて屋上の縁へ走り寄ろうとする。が、それを引きとめる声が背後から響いた。

「何をしているんだ、お前たち!」

校舎内へ続く扉から、白髪まじりの教師が現れた。

「げえっ!？　生活指導の根岸!」

「上級生が後輩をカツアゲしているという情報を聞いてやって来たが……本当だったようだな」

数人の三年生に、一年生が一人。そして床に散らばった現金。この状況なら、カツアゲに見えなくもない。

「ちっ違うッスよ先生っ！　俺たちは……」

「問答無用だ！　職員室に来い!」

根岸と呼ばれた教師は、学内の風紀に厳しいことで知られている。前々から何かと素行の悪かったリーダーたちにとって、天敵となる存在であった。しかも、今回は大損したとはいえ、後輩から不当に金を巻き上げていたことは確かだ。従う他ない。

「君も、一応来てくれるかな」

「あ……はい」

一年の男は、素直に従った。突然の展開についていけない様子だ。

「……クソッ。アイツ（光助）かッ！？ アイツがチクリやがったのか！？」

「余計なことはしゃべるな。……職員室に書き置きがあったんだよ。女子の文字でな」

「女子……？ クソ、一体、どうなってんだ今日は！」

リーダーの悔しがる声が、晴れ空に響き渡った。

遡ること一分前。

「……光助さーん！」

「お？ 坊主。なんをしょつとけえ、こげんところで……」

光助は、職員室のある校舎と、体育倉庫の間にある狭いスペースに移動していた。この普段は人が入ってこない場所に、直人は一度見失った光助を求めてようやく辿りついたところだった。

「あ、あの……一つ質問が」

「まあ、待ちいや。坊主」

光助は、手で直人の言葉を制する。堀の深いその顔は、よく見ると困っているような表情が浮かんでいる。

（のさんこつん（厄介なこと）になったなあ……。なんでこげな所に坊主が来っとけ？ アレを見られっと余計にマズイな……）

懐中時計を確認する。もう予定の時間だ。

「光助さん？」

「坊主、ちいっとの間向こうで待ったとき！　すぐ行くかい！」

「え？」

直人は光助の要求の意図がわからず、立ち尽くす。

「いいかい、早く向こう行けや！　ここは危ねえど！」

「は、はい！」

なにやら真剣に焦っているらしい光助の迫力に押され、直人は背を向けて走り出した。しかし、一瞬遅かった。

『バカ野郎っ！　そっちは……おいっ！？』

どこか、上の方から声が聞こえてきた。

「えっ、なに？ 今の……」

声の出所を探す直人の目に、何者かが屋上から飛び降りる光景が映った。

「う、うわっ!？」

「ジョー、こっちやっ!」

光助が叫ぶ。それを聞いて、直人も屋上から落下してくる人影が丈二であることに気付いた。

「丈二君っ!？」

その丈二が、急激に高度を下げて光助に迫ってくる。

「うわあああっ!」

直人は叫び、おもわず目をつむった。

（た、たたた大変だっ！ 飛び降り、落下、死……っ!？）

いやなイメージばかりが、直人の脳裏を巡った。目を開けたくとも、恐怖のためにまぶたが上がらない。

「あれ？ なんで積里君がここにいるんだ？」

（……え？）

丈二の声だ。なにごともしなかったかのような、平然とした声であ

る。

恐る恐る、直人は目を開ける。

「……………は？」

今度は、開いた目と口がふさがらなくなった。それほどあまりにも奇妙な光景だったのだ。

「なあ光助。なんで積里君がここにいるんだって」

そう話す丈二の体は、地上から一メートルほどの高さのところに浮いていた。と言っても、ファンタジーものに出てくる超能力のようには浮かぶのではなく、蜘蛛の巣にかかった蝶のように、頭を下にして浮いていた。ぶら下がっている、と表現するのが適切かもしれない。

「知らんわい。どれ、ちゃっちゃと降りい」

よく見ると、丈二の体の下に透明の糸のようなものが見える。その糸の先を視線で追うと、校舎と体育倉庫の間に複数張り巡らされていることがわかる。丈二は、空中につくられた透明のハンモックに引っかかっていたのだ。

「見られたもんは仕方なからう。坊主、ジョーを下ろすのを手伝っちくり」

光助はボリボリと頭をかきながら、直人に声をかける。

「……」

「坊主？」

「あ……はい」

クラスメートが空中にぶら下がっている光景を目の当たりにし、あっ気にとられて固まっていた直人はようやく正気に戻った。

「んしょ……と」

「よっ。着地成功！」

丈二の体が、地上に降り立った。

「どうやった？」

「成功に決まってるだろ。最低限の目的はキッチリ果たしたぜ」

二人は「仕事」の結果を確認し合う。すると、そこにもう一人の声が混じってきた。

「ちょっとアンタ達！　なんで積里君まで連れて来ちゃってんのよ！」

「おー、結子」

「平崎さん……」

今、ここへ到着したらしい結子が肩をいからせて三人に迫ってくる。

「アンタ達、あれだけ仕事のことは秘密とか言っというて、なにやってんの!？」

「まあ、なんだ。落ち着け結子。おりゃらが連れてきたわけやねえ」

怒る結子に対し、光助は妙に冷静だ。

「もう、秘密とかなんとかよだきい（面倒だ）し、いっそバラしてんいっちゃね？」

「うっわ、相変わらず身勝手……」

そしてまたまた、話についていけない直人であった。

第十一話・天才と偏才の相性

「それで、俺がポーカーで金を取り戻したってわけだ」

「へー……。要するに、丈二君の特技はトランプが強いってこと？」

「うーん、まあ……。ものっすごく簡単に言えばそんなもん……。かな？」

「しょっぱい才能よね」

結子がからかうように笑い声を上げる。

「うっせえよ結子。偏才ってのは大体そんなもんだろぅが」

丈二は眉をひそめて反論するが、額に汗を浮かべているところを見ると自分でも地味な才能だと認識しているらしい。

「俺のはただ勝つだけじゃなくて、その……。アレだ、トランプでものを切ったりも出来るぞ。一応（練習して）」

「あ、それはちょっとスゴいかも」

「どっちみち、カジノのディーラーかマジシャンにでもならないと使い道ないわよね」

直人は素直に感心するが、結子はまたも笑ってからかう。

「う・る・せ・えっての」

「アハハハハ」

丈二は怒った顔をして結子の頭を小突く。

「女の子の頭叩くなつてば、ジョー」

そう言う結子の表情は、子どものように純粋な笑顔だった。一緒にいるのが楽しくて仕方ない、というような顔だった。

（この二人……仲、いい……？）

ズン。直人は胸の奥のあたりに、なにか重いものを感じた。それは小さな重しだったが、直人は息苦しさを覚えてゴクリとツバを飲んだ。

「……ん、そーゆーこっちゃ。あい、了解」

携帯で『ボス』に電話していた光助が戻ってくる。

「一応確認取ってみたが、別ん話しても構わんらしいぞ。最初かいそげんすりゃよかったっちゃ」

「……ボスのことを最初に話したのも、後から秘密にしようって言いだしたのも、全部お前なんだけど」

丈二がツツコミを入れる。

「終うたこたあ気にすんな。どれ、坊主。話しちやるわ。おりゃらとボスん関係ば」

「本当ですか!？ ……やっど、かあ……」

直人は胸の重みを忘れ、安心したように大きく息をつく。

「そもそも、ボスっちゅうんはなあ……」

と、光助が話し始めた時――。

「ハア、ハア、見つけたぞ。……ジョー、とかいう奴」

息切れした声が聞こえてきた。

「おお？ アンタ、さつき一緒に屋上にいた一年じゃねえか。職員室から解放されたのか」

声の主は、先ほど丈二と共にギャンブルに参加していた一年生だった。そして、直人のよく知っている人物だった。

「か、かず君!？」

「ナオ……!？ ……なんでコイツと一緒にいるんだ？」

覚えておいでだろうか。その人物は直人の中学時代からの親友にして、バスケットボールのエース。栄和仁であった。

「あれ、栄君？」

「あっ平崎さんまで!？」

必然的に結子と同じ中学だったということになる。もったも、この二人は特に交遊関係があったわけではない。

「へー、意外。私のこと知ってたんだ」

「そりゃあ、ソフトボールの天才ピッチャーって、有名だったから……」

（天才……ね。正確には偏才だけど）

ほんの一瞬、結子の顔に影が走る。

（本当に私が天才だったら、あんなことには……）

「で、その……そっちこそ、俺のこと知ってたんだ」

「……うん。バスケの『天才』だからね」

少しだけ語感を強くし、皮肉を込めて言い放った。しかし、そのことに気付いたのは光助と丈二だけだった。

「何でココがわかったか知らねえけどよ、ホレ、あんたの負け分だぜ」

丈二が封筒に入れ替えた現金を和仁に差し出す。

「えっ!? その上級生に無理やりお金を取られた一年生って、かず君のことだったの!?!」

直人が驚いて声を上げる。和仁は中学時代から上級生との付き合い合

いも上手く、威されるということはなかった。また、自らギャンブルに没頭するようなタイプでもない。直人にとっては意外なことだった。

「バスケット部のキャプテンなんだよ、あの金髪の三年」

「げっ、あの、俺が打ちのめしたリーダー格のヤツ？」

今度は丈二が驚いた。それと同時に、その手に持たれた封筒が和仁によって払い落された。

「おいおい、なにやってんだよ。お前が負けた金だぜ？ 先月から分の分も含めて。遠慮せずに受け取っておけよ」

丈二はムツとして封筒を拾い上げようとするが、和仁にはその制服の襟を掴みあげた。

「余計なことやってんじゃねえよ！」

「か、かず君……！」

丈二の襟を掴んだまま、和仁は言葉を続ける。

「まず一つ言っておくが、俺は先月は参加してない。……つか、その頃の俺たちはまだ高校入学してないだろうがっ！」

「あー、そう言えばそうだったな」

丈二は冷静に返す。

「俺は今日、バスケ部の他の先輩からその話を聞いて初めて参加したんだ。バスケ部のキャプテンがカツアゲみてえなことしてるなんて許せねえからな」

「そいつあ立派な心構えやな」

光助が口を挟むと、和仁はジロリとそちらを睨んだ。

「ポーカ―みたいなかけ引きは得意だから、どうにかなると思ってたんだ。なのに、お前がイキナリ参加料を上げるとかわけわかんねえことしたせいで、すっかり調子が狂っちまって……」

「それで負けたのが悔しいってか？」

「そうじゃねえ！ お前の明らかなイカサマや教師へのチクリが許せねえんだ！」

（……こ、この二人は……。まちがいなく、仲悪い……）

直人はどちらの肩も持てず、オタオタするだけだった。

第十二話・プロフェッショナル

丈二の襟を掴んだまま、和仁は言う。

「先公にチクって自分だけ逃げるとかよ、そりゃ卑怯じゃねえか」

「別に。そう思いたければ勝手に思ってくれていいし。……つか、最終的に先公にチクったのは俺じゃない。俺の役目は金を取り戻して逃げることだけだ」

「役目？ なんのことだよ」

和仁の視線が直人の方に向けられる。

（えっ、僕に聞かれても……）

「……依頼や。さっき言った被害者の負け金を回収して、同時に二度とあそこで博打が打てんようにしちくり、と頼まれたとよ」

光助がフォローを入れる。

「依頼？ 子どもの探偵ごっこじゃあるまいし……。フザけてんのか？」

（……僕もそう思う……）

が、現に丈二は屋上から飛び降りている。遊びでできることではない。

「……じゃあ、誰がチクったんだ？」

質問を変えると、答えは意外な方向から帰ってきた。

「あ、それは私の役割だった」

結子である。

「平崎さんが……？」

「そう言う書き置きを職員室に置いてくれって、昼休み前に光助に頼まれたのよね」

「おりゃが自分でやっと足がつくかいね。……それん、あそこで行われるギャンブルばやめさせるにゃあ、一番手っ取り早い方法やと思うぞ？」

和仁は、一人だけ三年生である光助や同じ中学出身である結子の言葉に戸惑いながらも、丈二に向けて反論する。

「……どっちにしろ、チクって教師に捕まえさせるってのはセコいんじゃないか？ しかも、運が悪ければ俺まで処分を喰らう羽目になったかもしれねーんだぞ」

そう。実際に、捕まったリーダー達は後に停学の処分を受けることとなった。和仁はひたすら被害者であることを主張し続けることで、職員室から早々と解放されたのだ。

「もしも俺が依頼者で、さっきの三年達の巻き添え食らって停学になったりしたら……大失敗じゃねえか」

和仁の言うことはもつともである。だが、最後の部分だけ少し違った。

「失敗でもなんでもねーよ」

『え……？』

直人と和仁は、同時に声をあげた。

「おりゃらん仕事は、金を取り戻し、博打をやめさせるこつや」

「ボスに言われた内容は、それだけだから」

光助に続き、結子までもが声を冷たくする。

そして、わざと物々しく、丈二が言い放った。

「それ以外は、何がどうなっても全く問題ない。俺たちは子どもの探偵ごっこじゃないんだからな」

ざあ……と、風が木の葉を揺らす。直人は、制服の隙間から寒い風が入ってくるのを感じた。

「な、なんだよソレ。要求以上のことはしねえって、それでプロフェッサーでも気取ってるつもりか!？」

和仁が声を荒くする。丈二の襟をつかんでいたその両手には、もうあまり力が込められていなかった。

「……俺たちに出来ることは、限られてるからな」

「あ？」

「何から何まで、俺たちの手だけで完全に解決するなんて高望みなんだよ」

丈二の声に、少しだけ悲しみが混ざった。

「俺たちは天才じゃねえんだ。全部上手くいかせようなんて最初から望んでいない」

「最低限のノルマができれば、それでいいのよ」

先ほどまで笑い合っていた者の言葉だとは思えない。――自らを偏才と呼び、自分に出来ることだけに全力を尽くす者たち。

「目の前ん目標を果たすだけで、精一杯やつつよ」

光助が力なく笑った。

「……わけわかんねえよ。お前」

「お前ら、じゃなくて？」

「お・ま・え！ あとそこの三年！」

和仁は襟から手を放し、光助を指さす。

「……結子は？」

「平崎さんは……」

一瞬、視線を結子に向けるが、すぐに丈二の方に向き直る。

「いいんだよ、平崎さんは！ お前たちがだましたかなんかだろ！
？ 俺中学ん時から知ってるけど、こんなことやってなかったぞ！」

「だました、とは心外やなあ……」

光助が低く笑う。

「かず……って言ったっけ？ アンタ、ずいぶんと結子のこと持ち上げるけど、もしかして結子のこと……」

「はあっ!？」

「ちよっ……何言ってるのよ、ジョー！」

和仁と結子が同時に抗議する。

（え……まさか、かず君も……？）

直人は、ますます胸の動悸を早くする。その時、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

ちっ、と舌打ちし、和仁は丈二に背を向ける。

「……今日はこのぐらいにしてやる。だけどな、二度と俺をお前の遊びに巻き込むなよっ！」

「遊びじゃねえっつの……」

反論する丈二を無視し、和仁は去って行った。

（かず君……）

「坊主、今んやつとは知りあいけ？　アイツはいつつもあんげ怒っちよっと？」

「あ、いや、普段はもっという人です……」

突然声をかけられ、しどろもどろに答える。

「バスケ部の天才って呼ばれてて、気前のいい優しい人なんです」

「ほーう、天才ねえ」

結子だけでなく、丈二や光助も『天才』という単語に敏感なようだ。

「ま、おりやらがどう思われっかは、どんげでんいいこっちゃ。坊主、スマンけん……」

光助は、和仁が払い落した封筒を拾い上げる。

「あの天才君に頼んで、こん金ば被害者に届けちくり。おりやらが言うてん聞かんやろうかい」

「あ……はい」

なにはともあれ、直人たちも教室に引き上げることにした。

「……私、ちゃんと自分の意志でここにいるんだけどね」

帰り際に小さく結子がつぶやいたのを、直人は確かに聞いた。

（結子さんは、なんでこんな仕事をやるようになったのだろう。…
…ボスって人がかかわっているのかな………あ）

急に思い出した。

「そう言えば、ボスって結局……」

「あー、今時間ないし、教室で話すのもアレだから放課後な」

丈二がそう言い、「おあずけ」は続くのであった。

第十三話・『ボス』と『ケリー』

放課後となった。学校の玄関にて、直人と丈二が話をしている。

「で、あの金渡してくれた？」

「うん。最初は嫌がってたけど、被害者の人に返しておくってさ」

二人は、光助を待っていた。丈二の提案で、男三人で図書館へ行くことになったのだ。直人は結子と一緒にいきたかったが、何やら他の「仕事」があるらしい。

「あー、それにしてもムカツクなー、あのかずってヤツ」

その和仁はバスケット部の練習に行っている。

「自分が手を出して負けたくせに、俺に八つ当たりするなっの。あ、アイツに俺はイカサマやってねえってこと言うの忘れてた」

イライラと歩き回っているところを見ると、本当に腹が立っているようだ。

「かず君って、けっこう感情の起伏が大きいから……。普段は明るくて面白い人だよ」

「バスケットが上手いからってチョーシ乗んなっての」

直人がフォローを入れるが、丈二の耳には入らない。一度意地を張るとしつこい性格らしい。

「あゝあ、腹立つなあゝ、もう」

「ね、ねえ、光助さんずいぶん遅いよ。三年生は何か行事でもあるのかな」

とりあえず、直人は話題をそらした。

「いや、今日は何もねえって聞いてたけど……」

「それにしても遅い」

「遅いねえ」

「早くこねーかな」

「そうやね。いつ来っとかしらん」

「……光助。イキナリ会話に混じるな」

いつの間にやら、光助が直人の後ろに現れていた。

「いや、遅うなってスマン。結子に仕事んこつで頼み事されてな」

「あいつの仕事って……ああ、ケリーをお願いしたのか」

「ケリー？」

明らかに日本人ではない名前だ。おそらく女性だろう。

「あの、ケリーって……？」

「ああ、直人にはまだ紹介してなかったな。俺たちの仲間だよ」
この頃から、丈二は「積里君」と呼ばなくなっていた。

「あ、三人だけじゃなかったんだ」

「ん……まあ、の……」

なぜか光助は言いよどむ。

「どんな方ですか？ ケリーさんって」

「どんなんて、そもそも……ムグッ!？」

丈二が開きかけた口を、突然光助の手がふさいだ。

「グッ……う……？」

「そやねえ、色が白うて、背が小さくて……可愛いやつちゃ」

その体勢のまま、光助が説明し始める。

「へえ、キレイな人なんですな」

「そうそう。ただ、ちいっと気難しくてな」

そう言う口元が、ニヤリと笑っている。

「さつきも、結子ん仕事を手伝っちくりやるごつ頼んでやったとよ。おりゃん言うことしか聞かん奴やかいな」

「えっ！　もしかして、そのケリーさんて……」

直人の顔が、ほんの少し赤くなる。

「その、もしかして……光助さんの、カノジヨ……ですか？」

光助の口の端が、ニィィ、と吊りあがる。

「まあそんなところだ。本当に可愛いやつでなあ……」

「ングッ！　ンーッ！」

もがき暴れる丈二を無視し、笑い声をあげる光助であった。

「……ふあゝあ、春の昼下がりは眠いわねえ……ケリー」

結子は、朝通ったのとは違う路地をケリーと共に歩いていた。

「春眠、暁を覚えずっていうけど、昔の人はズバリと真実を言い表したもののね」

などと話し続けるが、ケリーは返事を返さない。黙って結子の前を歩き続ける。

「はいはい。アンタは日本人の文化なんて興味ないわよね。興味あるのは仕事と光助だけなんですよ」

「……」

光助、の名が出た途端、ケリーの足がピクリと止まった。

「あらら、素早い反応なこと。さっさとお仕事すませて図書館行き
ましようね」

結子が笑うと、再びケリーは前を向いて歩きだした。

一方、男三人は図書館の秘密部屋に到着した。

「くああ……春の日射しがいい感じにあったかくて眠くなんなあ……」

丈二は窓のカーテンを開け、大きくあくびをする。

「この本の古いほこりの臭いがまた……静けさとあいまって眠気を
誘うんだよな」

「こういう時だけ本が好きになっなあ、お前は」

カバンを適当に放り出し、閲覧席に腰掛ける。

「さて、坊主。いよいよボスについて話ちやっけ」

「お、お願いします！」

直人の声に力がこもる。ここまでの道のりが妙に長かったのだから仕方ないだろう。

「まず……ボスがどこの誰なのか。それは」

「それは？」

ゴクリ、とツバを飲む。

「知らん」

「ってええっ!？」

思わず叫んでしまった。

「いやいや、冗談やねーとよ。本当に、おりやもジョーも結子も、直接ボスと会ったこつはない」

光助の目は真剣である。

「会ったことはないって……じゃあ、どうやって仕事とか受けるんですか？」

「電話だよ」

丈二が口を挟んでくる。

「俺たちはみんな、それぞれの事情があってボスのところに電話した。それが最初のきっかけさ」

「電話？ あっ！」

またも直人は大声をあげた。今までの会話で、ある心当たりが浮かんだのだ。

「もしかして、その電話って悩み相談の……」

「そうや」

光助が、無人の貸出カウンターを指さす。そのカウンターの奥の壁に貼ってあったのは、確かに直人が見たものと同じポスターだった。

『お悩み相談・どのような悩みでもご相談ください。もしかしたら……解決なさるかもしれません』

第十四話・鉄の部屋にこもる男

『どうもー、茨木デパートです。注文の品をお届けに参りました』
インターホンが鳴り、ドアの向こうから若い女の声がかかってくる。

「……そこに置いといてくれ」

部屋の中の男は、ソファーに腰掛けたままそうつぶやいた。無線マイクを通じて、男の低い声が外の女に届く。

『そこって、……。あの、受け取りのサインを……』

戸惑うような返事が返ってくる。

（……初顔だな、この女。今までの担当に何かがあって、代理で来たのか？）

男の髪は長く、背中の半分が隠れている。髭は剃ってあるものの、身だしなみは良いとはいえない。男はソファーから立ち上がりかけて、自分の間違いに気付く。

（そうか。新入社員が入って担当が代わったのか。もう、そんな時期だったな）

飾り気のない、質素な部屋だった。いや、部屋と言うよりもフロアと表現するのが正しいのかもしれない。床がアスファルトで出来ていたなら、駐車場に見えないこともない。それほど広い空間であ

る。ソファやベッド、電話機などのいくつかの生活用品がある他は、本当に何もない虚無な空間だった。

「その床に、線でかこったスペースがあるだろう」

男は、唯一の出入り口である鉄製のドアの方を見ながら、そのずつと奥にいるであろう女にマイクで話しかける。

『線……？ あ、ありました。この四角いラインですか？』

「そうだ」

コツ、コツ、と男はドアの方に向かう。しかし、ドアの前に立つても女の肉声は聞こえない。マイクとインターホンを通じてのみ、二人はコミュニケーションを取っている。

「そのラインに合わせて、商品を置いてくれればいい。サインは必要ない」

『え？』

「上司に聞かなかったか。ここに商品を届ける時は、相手からサインを受け取らなくていい、と」

しばらくの間、女の声が途切れる。かわりにメモ帳をめくる紙の音が流れてきた。

『あ、ハイ。そうでした。……申し訳ございません』

（……ウソは言っていない声だ。本当に心の底から謝っているな）

ドアの向こうで女が頭を下げている様子が、男の脳裏に浮かぶ。

「構わない。別に迷惑ではないからな」

女を安心させる為か、わずかに口調を柔らかくする。

「そこに置いたら、出来るだけ早く帰ってくれ。まだ他の配達が残っているのだろう」

『は、はい。承知しました』

ドサ、と重いダンボールを降ろす音がする。続いて、遠ざかって行く足音。

（今の女が、余計な詮索をしないタイプでよかった。もっとも、仕事に慣れてくるとどうなるかわからんが）

男は、両手で鉄のドアを開く。その向こうには2、3メートル程の短い廊下があり、その奥もまた、鉄製のドアが道を閉ざしていた。

（月に二回の恒例行事か。今の女とも、これからしばらく付き合うことになりそうだ）

同じような構造のドアと廊下が三回ほど続き、四つ目のドアは、鍵穴が二か所についていた。一つは、通常のドアと同じくノブの横に。もう一つは、膝の高さの位置にあった。そのドアの前で、男は立ち止まった。

（人のいる気配はないな。要求どおりにしてくれたようだ）

ズボンのポケットから銀色の鍵を取り出し、下の方の鍵穴に差し込んで回す。ガタン、と鈍い音をたてて、ドアの下半分が男の方に倒れてきた。そうして開いた空間の奥に、目的のダンボール箱が置いてある。

（金さえ払えば、こんな奇妙な仕掛けのドアもつくってもらえる。……世の中というのは、おかしいところで便利に出来ているな）

腕を伸ばして重いダンボールを抱え、ドアの内側に運び入れる。少々面倒な作業だが、男は慣れた様子でそれをやってのけ、ドアの下半分を元に戻して施錠した。

ダンボールを抱えて、先ほど通ってきた道程を引き返していく。

（春、新人生の季節か。ここにいと全く季節を感じないが、確実に世間は動いているようだな）

ソファのある部屋まで戻って来たとき、備え付けの電話が鳴り響いた。男はダンボールを床に下ろし、受話器を手取る。

「どうした？」

相手の名前を聞かずとも、声で分かる。電話をかけてきた相手は、男のよく知っている人物だった。

「ああ、そういえば昼ごろに電話した時、後でかけ直すと言っていたな」

『あい。例の坊主んこつで電話さしてもらいました。一遍、直に話

しちもらおうかと』

南九州の訛りがある、独特の話し方。こんな言葉をしゃべるのは、この界限には一人しかない。

『どんげすか？　ボス。もしよけりゃあ、今すぐ電話かわっけん…』

「……ああ。わかったよ光助。そのナオトとか言う少年とかわっつくれ」

「ボス」と呼ばれた男は、受話器を持ったままソファーに腰掛けた。

第十五話・カウンセラーの域

「こっかい先は、直接ボスと会話した方がよからう。……直接つちゆうても、電話越しにやけんな」

そう言いながら、光助は電話の受話器を取る。

「え、そのボス……さんと話せるんですか？」

「おう。別ん怖がる必要はねえかい、安心しい」

番号を押し、相手が出るのを待つ。

（どんな人なんだろう……。へ、変な宗教の教祖とかじゃないよね……？）

三回ほどコール音が鳴った後、「ボス」が電話に出た。

『どうした？』

周りが静かなせいで、受話器から離れている直人にもハッキリと声が聞こえる。

『ああ、そういうえば昼ごろに電話した時、後でかけ直すと言っていたな』

「あい。例の坊主んこつで電話さしてもらいました。一遍、直に話しちもらおうかと」

そう言って、光助は直人の顔を見る。

「どんげすか？　ボス。もしよけりゃあ、今すぐ電話かわっけん……」

『……ああ。わかったよ光助。そのナオトとか言う少年とかわっつくれ』

光助が手で直人を招く。ちなみに、丈二は閲覧席の机に顔を伏せている。春の日射しに誘われて眠りについたようだ。

（う、うわ……。話って、何を話せばいいの？）

緊張しのせいか、直人の足取りはギクシャクしてしまっている。

光助から受話器を受け取り、震える声を出す。

「こ………こんにちは」

『……ああ、君がナオトか。光助から聞いている』

低く、渋い声がますます直人を緊張させる。

「あのっあの……僕は」

『硬くならなくていい』

「え」

『恐れなくてもいい。私は別に大人物ではないのだからな』

一転して、穏やかな声になった。直人の緊張をほぐそうとしているらしい。

『深呼吸でもして、気持ちを落ち着けろ』

「は、はい」

直人は素直に従い、受話器から顔を放して数回深呼吸する。それを見た光助が小さく吹き出したが、無視することにした。

（……素直な少年だな。光助に遊ばれそうな性格だ）

「ボス」はソファーに深く座り直し、リラックスした体勢をとる。

『あの』

「落ち着いたか」

『は、はい』

（まだ少し緊張しているな）

クツと、かすかに笑い声をあげる。無論、電話の相手には聞こえないように。

「それで……そこにいる偏才たちと、私の関係について知りたいのだったな」

『は、はい!』

(少しだけ声が強くなった……。相当待ちくたびれていたようだな。不安が薄れて期待が濃くなってきた)

「ボス」は正確に直人の感情を読み取る。

「まず……私のことについて少し話そうか」

『お願いします』

「私の職業は……光助にポスターを見せられてわかっていると思うが、一種の心理カウンセラーだ。一般には悩み相談室と呼ばれているがな」

『はあ……。あの、ポスターには悩みが解決されるかも、とか書いてありましたけど……。あれはどういう意味ですか?』

「ああ、それか……。フフ」

今度は、ハッキリと口に出して笑った。

「それは、光助が勝手に書いたものだ。ポスターの作成を頼んだら、勝手に書き足されたのだ」

『そうなんですか……。』

(ん? 今の間は……)

直人の無言からわずかなニュアンスを感じ取り、思考を巡らせる。

（そうか、光助が傍で話を聞いて、何かやかしたな）

まさにその通り、二人の会話を聞いていた光助は、今のポスターのことを聞いた途端、ニヤリと笑って胸を張ったのだ。

（え、それってイバることなの？）

と、直人は半ば呆れている。

『話を戻そう。私の仕事は、人々の悩みを聞いていくらかのアドバイスをする事だ。もつとも、悩みの相談内容は特に制限していないから、なかには私にもアドバイスしようがない悩みもくる』

「え？　そういうものなんですか」

『そういうものだが、それでも結構どうにかなる。大体の悩みやストレスというものは、人に話を聞いてもらうだけでも精神が楽になるものだ。時には全く助言する必要のないケースもある』

「へえ……」

『本当に、様々な内容の悩みの電話が来る。イタズラや冷やかしも多い。だが、本当に心の中から悩み、救いを求めてくる者もいる』

ここからが本題、というような口ぶりになった。

『例えば、上級生にギャンブルを強制されて金を巻き上げられた、

とかな』

「……」

『そう言った悩みをいくつも聞いていると、言葉でアドバイスをするだけに留めるのは忍びなくなる』

「はぁ……あ、それで仕事を依頼するんですか？」

直人の中で、話がつながってきた。

『本来なら、それはカンセラーの域を越えたお節介だ。やるべきではない、と言うよりもやってはならない行為と言える。だが……』

「……だが？」

『そんな時に、別の悩みを持った若者が現れたのだ。自分に出来ることはないか、自分の才能を、人のために役立てられないか？ ……』

「才能……」

直人は受話器を持ったまま、光助の方を振り返る。いつの間にか丈二も起きており、真剣な顔つきで二人の会話を聞いていた。

第十六話・可愛いカノジョ

「今日もダメ……か。思った以上に面倒な仕事ね、これ」

結子は公園のベンチに腰掛け、休憩をとることにした。放課後からずっと歩きっぱなしだったため、足がパンパンになってしまっている。

「ケリー、なんか飲む？ おごってあげるわよ」

「……」

反応がない。ケリーはベンチには座らず、公園の入り口付近をウロついていた。

「なによー、そんなに早く帰りたいのー？ 少しは休ませてよ……」

そう言いながら指圧マッサージで足の筋肉をほぐす結子を見て、ケリーはため息をつくように目を瞑り、ベンチに向かって歩き出した。

「私はアンタほど狭い道に慣れてないんだから、大目に見て？ そこの自販機でアンタの好きな飲み物買ってあげるからさ」

「……」

ケリーは無言のまま、首を上下に振る。好物の缶入りコーンポタージュを飲んでから帰るのも悪くない、と判断したのだろう。

「最初に、ボスと知り合ったんはおりゃやった」

光助が直人に語る。「ボス」は『そこから先は、そっちで話してくれ』と言ったきり、電話を切ってしまったのだ。

「二年ぐれえ前やったけ。ちょっとしたこつかいボスと知り合って、何度か電話するうちに、逆にボスカい相談ば受けたとよ。助けてあげたい人がいる。けれど、自分が動くわけにはいかない。……てな」

「そ、それで、光助さんが代わりに引き受けたんですか？」

その質問には、光助ではなく丈二が答えた。

「その光助に話を聞いて、俺が立候補したんだ。俺と光助はガキの頃からよく一緒に遊んでたからな」

「一番最初ん仕事は、子どもをあやすこつやったなあ……。養護施設ん預けられた子どもが、周りの人間に馴染まんとかなんとか」

光助はその時の記憶を思い返すように、遠い目をしている。

「まあそんなことがあって、俺たちに出来ることがあったら連絡してくれてボスをお願いしたんだ」

「おりゃらん偏才は、日常生活ん中じゃあ使う機会がねえかいね。……自分に出来ることをやりたい、それが人の役ん立つことやったら尚更いい。ただし、あくまでも深追いはしない。最低限やれるこつだけやって、決して調子ん乗らんちゅう条件付きてやっ取る」

「あえて言うなら、自己満足ってヤツだな」

（え……）

などと、丈二が自分で言い出すのだから直人は驚いた。

（なんか……イメージ違うな。本当に子どもの遊びみたい……）

そう思ったが、すぐに別の質問が浮かんできたためその思考はすぐに消えた。

「あの、平崎さんは……どうやって、ここに来たんですか？ 平崎さんも昔から知り合いだったとか、ですか？」

「んにゃ……」

光助が小首をかしげる。

「詳しいこつはおりゃもジョーも聞いとらん。一年と少し前ぐらいけ？ ある日ボスカい連絡があって、新入りとして紹介されたとよ」

「ボスの方から紹介されたってことは、結子が悩み相談の電話でもしたんだろ」

（結子さんが、相談……？）

直人にとっては意外なことだった。中学時代の結子は、親友の明石と共にただひたすらにソフトボールに打ち込む快活な少女という印象だった。二年の秋までは。

(あ、そういえば……)

一時期だけ、そうでないことがあった。それはソフトボール部を引退してから三か月ほどの間。仲の良かったキャッチャーの明石とも疎遠になり、クラスメートの誰とも話をしようとしないうちに、暗い少女になっていた時期があったのだ。

(一年と少し前……そうだ、平崎さんがまた元気になったのもその時期だ。ってことは、平崎さんが相談したのって、ソフト部をやめたことに関係あるのかな……?)

ひょっとしたら、結子の引退理由がわかるかもしれない。直人は当時の記憶を引っ張り出そうとするが、それはすぐに中断された。

「ただいまー、今日も見つかりませんでした」

当の結子本人が帰ってきた。

「おう、お帰り」

「ダメやったけ? ケリーがおりゃあどうにかなったと思うたけんなあ」

光助が再び首をかしげる。この言葉を聞いて、直人の思考はまたも変わった。

「あの、そういえばケリーさんって……」

「ケリーなら一緒に帰ってきたわよ。もうすぐ来るはず」

そう言って、結子はなぜか窓の方を向いた。

（え？ 窓？）

つられて直人もその方を向くと、いた。開いた窓から、ケリーが入ってくる場所だった。

「どんげね。おりゃんカノジョは」

色が白くて背が低く、光助の言う事しかきかない可愛い――。

「にゃあ」

「カワイ、イ……」

雑種の、白いメス猫が窓から入って来て光助に飛びついた。

「コイツがケリーや。ウソは言わなかったろ？」

確かに、日本「人」ではなかった……。

第十七話・九断 光助

『光ちゃん、そしたらウチは出かけて来ます』

家政婦の陽子が一階から声をかけてくる。高校に入学したばかりの光助はため息をつきながら、わざわざ階段を降りて行く。

『ちゃん付けはやめえて言いよるやろ？ もうガキやねっちゃんかい』

『なん言いよつと。ウチかい見りやあまだまだ子どもよ』

平均よりも一回り、いや二回りは大きな体をゆするように、陽子は笑う。

『高校入ってん、光ちゃんなんて呼ばれとったらハジいわ。ただでさえクラス内で浮いちよるとに』

『言葉ん訛りをウチんせいにしてんダメやかいね。光ちゃんが自分で、勝手にウチのマネをしだしたこつ、忘れたんね？』

光助は母親を幼くして亡くした。父親もあまり家には居つかず、家政婦の陽子に育てられてきたのだ。

『ヨーコがこげなしゃべり方しょっかい、自然に刷り込まれたっちゃ』

わざと嫌がるような表情で反論するが、それも陽子は笑ってスルーする。

『あらあら、はよ行かんと遅刻すつわ。そんじゃ、もう行くかいね』
ドアの向こうに陽子の大きな体が消えるのを見送り、光助は二階へ引き上げる。

『ったく、ガキン頃ん話ばっかし持ち出すっちゃかい……』

自分の部屋に戻ると、開け放した窓から一匹の猫――ケリーが入ってくる場所だった。

『おう、ケリー。どげんした？　メシにやあまだちっと早えど？』

『にやあ……』

ケリーは窓の棧に立ったまま、光助の方をじっと見ている。

『外んなんかおっとけ？』

窓から外を覗く光助の目に、一台の車が映った。この穏やかな街並みに似合わない、高級な乗用車だ。

『……よだきいな。帰ってきやつたけ』

眉をひそめ、素早く窓を閉める。

『ケリー。アレが来る前ん、家でっぞ』

『にやあ』

一人と一匹は階段を駆け下り、裏口から家の外へ出る。「アレ」

と呼ばれた男が玄関のドアを開けたのはその直後だった。

今から二年前の、春の日の出来事である。

「ケリーに猫道を案内してもらったんだけど、どこにもいなかったのよね」

結子はハンカチで汗を拭きながら報告する。この部屋は日射しがいい割には通気性が悪く、室温が少し高くなってる。

「見落としたんじゃないの？」

「ううん。似たような奴ならいたんだけどさ、話に聞いてたのと全然性格が違うの」

「ボスに依頼した人物が描いたイメージと、おりゃらが描いたイメージが違うとるかもしれんな。もっかい確認してみつけ」

などと言いながら、光助は受付カウンターに置かれた備品のメモ用紙を指さす。

「にゃ」

ケリーが素早くカウンターへ走って飛び乗り、メモ用紙を一枚取って戻ってくる。一切言葉を発せずとも、光助とケリーの間ではコミュニケーションが取れているようだ。

「あ、あの〜」

直人が声をかける。

「ねこみち、ってなんですか？」

「猫道ってのは、そのまんま、猫が通る道のことよ」

猫——特にノラ猫は、人間のつくった仕切りを無視して歩く。普通の人間なら通らないような細い路地や、垣根に開いた穴などを自由に通り抜けることで、目的の場所へ最短距離で向かったり人の入らない空間へ出入りすることが出来るのだ。その時に通る抜け道が猫道と呼ばれるのである。

「あ、そういうえば僕も子どものころ、学校帰りに近道とか探したなあ……。人の家の庭を走り抜けたりとか……」

「あーやっぱり直人もやった？ あれは男の子ならみんなやることだよな。塀の上歩いて怒られたりとか、なあ！」

「誰が一番便利な近道を見つけられるか、競争とかした？」

「したした！」

丈二も目を輝かせる。

「そこ、少年時代に戻らない。てか高1ってまだ子どもだし」

結子が呆れた声でツツコミを入れる。

「本物の猫が使う猫道はそげなもんやねえわ。極端な例やと、車で一時間かかる距離を二十分で着けっぞ」

「えっ徒歩で!？」

「にゃあ」

ケリーが得意そうに胸を張る……ことはできないので、代わりに光助が胸を張った。

「それで……その猫道を使って、何を探してるの？」

「犬よ」

「犬？」

「茶色の大型犬が逃げ出して、困っているって相談があったんだって。それで私達を探してあげようってことになったの」

大型犬と言えば、直人にも心当たりがある。

「あの、昨日この前であった凶暴な犬みたいなやつ？」

「外見はそうなんだけど……。話によると、一か所にじっとしてるのが好きな大人しい性格で、人に襲いかかることなんてないってさ」

なら、違う。直人は記憶を探ってみるが、該当するような犬は他に見当たらなかった。

「ケリーの知ってる猫道を通して、町中の路地裏なんかを見て回っ

ただんだけど……」

「やっぱり、もう一遍ボスに確認するのがよからう」

「にい」

賛成、と言うかのようにケリーは両目をつむった。

第十八話・青少年の始動

トゥルルル……トゥルルル……という音が、直人の目を覚ました。

「う……ん」

いつもの習慣で、半ば眠ったまま目覚まし時計に手を伸ばすが、何度スイッチを押しても音は止まらない。

（……？）

薄く眼をあけ、ねぼけた頭を回転させる。――時計のベル音ではない。

（携帯だっ！）

ガバツとふとんを跳ねのけ、枕もとの携帯を手取る。電話ではなく、メールの着信だった。

『オハヨウ、坊主』

「光助さんからだ」

『ボス　ヨリ、追加デ確認ノ電話ガ入ッタ。コノ間、君ト結子ガ見カケタトイウ犬ヲ発見シタラ、一応捕マエテ連絡シテクレ……ダソウダ』

「なんでわざわざ片言なの？」

などと朝っぱらからツツコミを入れつつ、メールを返信する。

「了解です……と。おかげで早起しちゃったな」

時計を見ると、朝六時になる五分前だった。

「そうだ、今日から僕も犬探しを手伝うことにしたんだった」

昨日の夕方、直人が自分から頼んだのである。犬を探すだけなら特別な才能は必要ないだろうし、普通に部活をやるよりは面白そうだと判断したからだ。

「断られなくてよかった。しかも……」

携帯を見る直人の瞳が、嬉しそうに輝いている。すると、再び携帯にメールが届いた。

「あ、光助さんからだ」

『追伸――』

その文章を読んだとき、直人の表情は固まった。

『結子ノ電話番号トアドレスヲ教エテ貰エテヨカッタナ。ガンバレ、恋スル青少年』

沈黙。長い沈黙ののちに、直人はひきつつた声を上げた。

「……バレ、てたの……?」

脳裏に、結子の爽やかな笑顔が浮かぶ。その向こうに、ニヤリと笑みを浮かべる光助の姿が見えたような気がした。

「うわあああああっ！」

朝の青空に、顔を赤くした青少年の悲鳴が響き渡った。

通学路の途中で、結子と会った。

「おはよう。積里君」

「あっ……お、おはよう、平崎さん……」

思わず顔が赤らむ。が、結子自身は直人の気持ちに気付いていないらしく、急に視線をそらした直人の顔を覗き込んだ。

「どしたの？」

その行為が、ますます直人の顔を染める。

「いつ、いや……なんでも、ないよ」

「そう？　ならいいけど」

そう言って結子は歩きだす。直人もすぐそれに続いた。

「今朝、光助からメールもらった？」

「うん。なぜかカタカナばかりの」

「アハハ。アイツいつもそうなのよね。口頭でも文章でも普通にしゃべれないの」

二人はわざと遠回りしながら学校へ向かう。当然、歩きながら目的の犬を探すためだ。

「本当に大人しい犬だったらいいけど、この間のやつみたいに凶暴だったらどうしよう」

「もしそうだった、らちよっと面倒ね。ま、私の敵じゃないけどさ」

野球ボールをもてあそびつつ、結子は得意げな笑みを浮かべる。

「そういや、あの時のケガ、大丈夫だった？」

「あ、うん。もともと大したケガじゃなかったし」

そんな話をしていると――。

「ワン、ワァンッ！」

近くで、犬の鳴き声がした。攻撃的な、聞き覚えのある鳴き声だった。

「結子さん！」

「行こう、積里君！」

二人は声の発信源へ走って行く。そこは、住宅地の中にポツンと存在する空き地だった。その空き地内に置かれた土管の前に、あの茶色い大型犬が座っていた。

「あれ、この間のやつだよね？」

「そうみたいね」

しかし、二人はすぐに空地へは入らず、塀の影からその犬を見ていた。というのも、その犬が一人ではなかったからだ。

「よしよしよし。元気な声だぞ、ハク」

土管に腰掛け、犬にエサを与える人物がいた。直人達と同じ高校の制服を着ており、金髪や首に幾重にも巻きつけた首飾りが、いかにも遊び人風な男子だった。

「誰アイツ。積里君、知ってる？」

「ううん、知らない。……もしかしたら一年生じゃないのかも」

男の学年章を確認すべく、二人がゆっくりと動き出した時。

「そこにいる人達。何コソコソのぞいてんの？」

男がそう言った。視線は、しっかりと直人たちの方へ向けられている。

「別にかみつきやしないさ。なあ、ハク」

「グルルル……」

言葉とは裏腹に、犬のうなり声は凶暴そのものであった。しかし、覚悟を決めたかのように、結子は空き地へ踏み入った。直人も後に続く。

「初対面でなんだけど、ちょっといい？　その犬、あなたのペット？」

ぶしつけに質問を繰り返した。男の学年章は二年生のものだったが、結子の言葉は先輩に対する口ぶりではない。相手を警戒するよな、硬い口調だ。それほどこの男は不審な空気を放っていた。

「いきなり何言ってるの？　ってカンジだけど……。ま、答えてやるよ」

「グルル……」

体を低く沈めて警戒態勢をとる犬の頭に、ポンと手を載せながら男は言った。

「こいつはハク。オレの言うことならなんでも聞いてくれる、利口で頼もしい奴さ」

その声に、嘲笑うかのようなニュアンスがあることを、直人は背筋を震わせて感じた。

第十九話・刻同 俊

「俺の名前は刻同こくどう 俊しゅん。アンタ達は？」

男は片手で犬をなでながらそう名乗った。結子は一瞬、言葉を詰まらせる。

「おいおい、先輩の俺が先に名乗ったんだぜ？ そっちも名乗り返すのが常識ってもんだろがよ」

「……私達が聞きたいのは、その犬がアナタの飼い犬なのかってことだけ。名前はどうでもいいわ」

相手の雰囲気のにまれないよう、わざと口調を強める。具体的にハッキリとはしないが、正体不明の不気味さがこの男にはあった。

「さっき言ったら？ こいつは俺に従順で、言うことをなんでも聞いてくれるやつだって。たとえば……」

男——俊の視線が、震える直人を捉える。

「その一年ボーズの足に、思いっきり噛みつかせたりとか……な」

一瞬、猟奇的に歪んだ笑みを浮かべ、俊は犬の頭から手を放す。

「ワンッ！」

「うわ……っ！」

犬は、その場から動かずに吠えたただけなのだが、直人には、今にも飛びかかって来るように感じられた。

「クク……ははは」

「……何が、したいのよ」

結子はひるまない。背中に隠し持った野球ボールをしっかりと握り直して身構える。

「別に。つか、そっちの方から声かけて来たんだろ？ 用が済んだんならとっとと学校行けばあ？」

「……」

結子はそれ以上何も言わず、うなり声をあげる犬を観察する。

（――間違いないわね）

やがて、俊に見えないようにボールをバックにしまい、直人の方を振り向く。

「行こう。積里君」

「えっ」

「いいから」

そのまま、空き地の外へ出てようと歩き出した。直人も後に続く。

「あれ、本当に行っちゃうんだ。可愛い女の子に声かけられて、ちよっと嬉しかったんだけどな」

「それはどうも」

俊の方を見ずに言い返し、半ば早足で空き地を去って行った。

「ハク。お前、あの女になにかされたのか？ 微妙に怯えてるぞ」

「グルル……」

結子たちの後ろ姿を見送り、俊は再び犬の頭に手を乗せる。

「なにかされたのか？ 嫌なこと、痛いことを」

「ギャウウ……」

問いかけられ、犬は頭を低く伏せた。

「そうか。あの女に痛いことされたのかあ」

さきほどの猟奇的な輝きが、俊の目に戻ってきた。

「痛いことされて、そのままでもいいのか？ 自分に嫌なことをするやつには……」

犬の耳に口を近づけ、低い声でハッキリと言い聞かせる。

「し・か・え・し。しないとなああああ」

その声は、犬の脳内へ深く刻み込まれた。

「ひ、平崎さん。結局、あの犬は関係なかったの？」

「アイツ……。一度もあの犬を『自分の飼い犬だ』って言わなかったわね」

結子の表情は真剣そのものだ。

「ボスの話によると、目的の犬は左の後ろ脚に怪我の跡があるらしいの。この間はハッキリと見えなかったけど、今確認したらやっぱりあった」

「じゃあ、今の犬がっ!？」

「たぶんね」

歩きながら、結子は携帯を取り出す。

「ただ気になるのは、性格が全然違うってこと。大人しくて人見知りするって聞いてたんだけど……」

「あ、もしかして、さっきの人が本当の飼い主だとか!」

「だとしたら、普通にそう言えば済むじゃない。それに依頼者は一人暮らしの女性らしいわ」

光助に電話をかける。数回コールした後に、相手が出た。

『どんげした。見つかったけ？』

「うん。ほぼ間違いない。でも、やっぱり性格が違うのよ」

『本当に、そいつに間違いねえけ？』

「ケリーに協力してもらって町中探したけど、該当するような犬は他にいなかったわ」

『ふむ。なら可能性は高いな。捕まえたんか？』

「それが、ちょっと面倒なことになってんのよ」

結子が光助に説明している間に、直人は同じことを丈二へ電話することにする。しばらくの間、二人は別々の相手に電話しながら歩くことになった。

「……ってことなんだけど」

『ふうん。妙な男ねえ……』

丈二は少し考え込むが、突然声を軽くして話題を変えた。

『ところでさ、直人』

「なに？」

『今、結子と一緒にいるんだよな』

「そうだけど……」

電話越しに、丈二の小さな笑い声が聞こえてくる。直人はそれを聞いて嫌な予感がした。

「そ、それで、一緒にいるから、何？」

『……よかったな。ハハハ』

「じよ、丈二君までッ！？」

「？ 積里君、どうしたの」

いつの間にか電話を終えていた結子が、直人のことを不思議そうに見つめる。

『頑張れよ』

「な、ナニを！？」

「ねー積里君ってば。なんで顔が赤くなってるの？」

しばし、犬の問題を忘れる直人であった。

第二十話・壮絶な対決

「えー、それじゃあ今日の体育は、一、二組合同でやる」

いかにも熱血そうな体育教師の話を聞き流しつつ、丈二は隣にいる直人に声をかける。

「結子は一組かあ。残念だったな」

「ちよっ……丈二君っ！」

結局、光助と丈二にはバレてしまっていたらしい。

「大丈夫だって。俺も光助も、人の恋路の邪魔はしない主義だからさ」

「お、おおお願いっ！ 平崎さんには秘密にしといてよ！」

直人が必死になるほど、丈二の表情はイタズラっぽくなるなる。

「どーしよーかな」

「丈二君っ！」

「うるさいぞ、そこお！ 今説明してるだろうがっ！」

「す、すみません……」

教師に怒鳴られ、ようやく二人は静かになった。

「男子はバスケ、女子はバレード。クラス対抗で試合しなさい」

「はい」

と、返事をし、生徒達が散らばっていく。

「クラス対抗で試合かあ……僕、こういうの苦手なんだよね」

「俺も。ま、大抵の奴らは適当に遊ぶだけだろ」

「そうだよな。マジメに試合する人なんてあんまり……」

そんな話をしていると、二人の背後から声がかかった。

「よお、ナオ」

「あ、かず君」

一組の和仁だった。

「授業はマジメに受けようぜ？」

直人の肩に手を置き、笑顔をつくる。

「だ、だってかず君が相手じゃ、勝ち目ないし……」

直人がそう言った瞬間、丈二が声を張り上げた。

「おおっと、コイツはどここの運動バカだったかな」

「あ？ お前、この間の……」

和仁と丈二の視線がぶつかる。その間に挟まれ、直人は元々小さい体をますます縮める。

（ひえええ……。そういえばこの二人、仲悪いんだった……）

「探偵ごっこ君には、バスケの高尚さが理解できねーか？」

「バクチで負けてひーひー泣いてたのは、どこの誰だっけ？」

二人は火花を散らせて睨みあう。まる、生涯の天敵同士のようなだ。

「えー、それじゃ試合を始めるぞー」

体育教師がボールを持ち、フィールドの中央に立つ。

「各クラス、ジャンプボールは誰だ？」

『オレがしますっ！』

和仁と丈二が同時に声をあげ、睨みあったままフィールドの中央で向かい合う。あまりの剣幕に、他のクラスメート達は戸惑うばかりである。

「何か、妙な気迫を感じるが……。とりあえず、試合開始ッ！」

教師がボールを高く投げ上げる。

『おおおっ!』

二人は同時に跳び、ボールへ向けて右手を伸ばす。滑稽だと笑う事も出来ないくらい、真剣な表情であった。

50分後。授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「ハア、ハア、……どうした。最初の威勢はどこいったんだ？」

「ハア……」

二人は他のクラスメートと交代せず、授業時間いっぱい勝負し続けていた。丈二はスコアボードを忌々しく見つめつつ、それでも口元に笑顔をつくって言った。

「ハア……。ま、一応、バスケ部のエースって……呼ばれてる奴に、華を持たせて、やった、んだよ……」

「へっ、なに言い訳、してやがんだ。カッコわりい……」

「ふ、二人とも、大丈夫？」

呼吸すら普通にできない状態でなおも口ゲンカをする二人を心配し、直人は声をかけた。

「大丈夫に、決まってるんだろ？ こっちは……毎日、鍛えてんだぞ」

「全然、まだまだイケるぜ……。なんならあと一時間でも……」

「なあゝにバカなことやってんの。もう授業終わってんだけど」

高い、透き通るような声が割り込んできた。

「平崎さん」

「次は三組が体育なんだから、一、二組はさっさと帰りなさい」

しかし、その言葉は直人にしか届いていなかった。

「トランプが趣味のネクラ野郎には、せいぜいこの程度が、限界だな」

「その、ネクラ野郎に……負け金回収してもらった奴が、ナニ言ってるんだ？」

「んだとお!？」

「おお? もう一試合やるか!? そしたら今度は俺が勝つぞ!？」

再び睨み合い、フィールドの方へ戻りかける。

「いいから、早く戻れってば!」

「うげっ!？」

結子が後ろから丈二のえりを掴む。そのまま後ろへ引っ張り、体育館の外へ連れて行こうとする。

「積里君。そっち、お願い」

「あ、うん」

「おいつ、ナオ！？ オオおお……」

後ろからえりを掴まれては、丈二も和仁も抵抗できない。結局、体育館を出て校舎の入口まで連れて行かれた。

「いつまでケンカしてんのよ……。さ、ここまで来たら大人しく教室に戻りなさい。積里君、あとはよろしくね」

「うん。それじゃ、体育頑張ってね」

未だに反目しあう丈二と和仁を後に、結子は体育館へ戻って行く。

「あゝあ、なんで理由もなくケンカしたがるのかなあ、男って」

クラスメート達はすでに体育館に行っており、周囲に人はいない。結子は少し歩調を早める。

「……？」

ふと、結子は視線を感じて立ち止まった。直人達ではない。三人はすでに校舎の中へ戻っている。

（嫌な予感……）

その予感が的中することを、結子は数秒後に思い知らされた。

第二十一話・本当の対決

「あんの野郎、バスケ部のエースが素人に本気だしやがって……」

丈二はまだブツブツと言っている。直人と丈二は教室へ戻り、服を着替えているところだった。

「あともう一試合やってたら、俺が勝ってたってのーっ！　そうだよな、直人」

「う、うん……」

大人げない……と思いつつ、そう返すしかない直人であった。

（たぶん、今度はかず君にも同じようなこと言われるだろうな……）

気が弱く、ケンカの仲裁が出来ない自分を責めつつ、着替えを済ませる。

「あ、しまった」

着替えを終えて体育着をカバンに片づけていた丈二が、突然声をあげた。

「どうしたの？」

「体育館にタオル忘れちゃった。取りに行きたいけど……俺、今週当番だから授業の準備手伝わなきゃならないんだよなあ……」

頭をかきながら、その視線は直人に向けられる。それを見て、直人はすぐに意図を理解した。

「それじゃあ僕が取ってくるよ。次の授業まであと五分だから、急げば間に合うし」

「お、いいの？　じゃあ頼むわ。……結子にもよろしく」

「そ、それは置いといてっ！」

なにはともあれ、直人は再び体育館へ行くことになった。

（やっぱり、誰かに見られてる）

そんな予感が、結子の足を鈍らせる。そして結子が体育館のすぐ側まで来たとき、近くの草むらがわずかに動いた。

「誰？　誰かいるの！？」

音のした方へ声をかけるが、反応がない。草むらは比較的大きく、人間一人が容易に隠れることができるほどであった。

「……」

しばらくの間、じっと草むらを見張り続けるが、それ以降変化は見られない。

（気のせいだった？　でも、念のため……）

結子は出来るだけ球形に近い小石を拾い上げ、用心深く、慎重に草むらへと近づいて行く。

「そこに、誰がいるの？」

一歩ずつ近付くほど、そこに何者かの気配を感じる。そこに誰かがいるのは間違いないさそうだ。しかし――。

（なんで返事しないの？ まさか、呑気なバカが昼寝してるだけ……なんてことはないわよね）

じりじりと距離を詰める結子は、草むらの向こうに何か黒っぽいものを見つけた。よく観察すると、黒ではなく、濃い茶色い毛で覆われたハウキのようなもので、ゆっくりと動いていた。

（シッポ！？）

そう気付いた瞬間――。

「グアルッ！」

草むらから茶色の塊が飛び出してきた。左後ろ脚にケガの跡がある、何度も見慣れたあの犬が。

「なッ……何でコイツがここに！？」

驚いて体勢を崩してしまったものの、結子は素早く小石を持ち直し、向かってくる犬の鼻先へ投げつけた。

「ギャウッ！」

「え!？」

まるでその動作を読んでいたかのように、犬は素早く空中に飛びあがって石をかわした。そしてそのまま結子へ覆いかぶさろうとする。

(ヤバッ……!　なんか武器がないと!)

「ガァッ！」

「ッ……どけっ！」

犬の脇腹をひざで思いっきり蹴り上げる。かろうじて第一撃からはのがれたものの、犬は少しも怯まずに再び飛びかかる構えを見せる。

(どうする!？　こんな大きな犬、素手じゃ対応できない……!)

すぐその体育館に行けば、人が大勢いる。しかし、なぜこの犬が襲ってくるのかわからないが、関係のない人間を巻き込むわけにもいかない。

「グアアアアア！」

「くっ……マズ……」

小石ならまだいくつか落ちているが、結子は球形のものでないと偏才を発揮できない。素早く動き回る犬を仕留めることは困難だ。

(それでも、何もしないよりはマシッ！)

小石を数個まとめて拾い上げ、犬に向けて投げつける。だが、犬はそれらをたやすく回避すして飛びかかってくる。

「ッこの！」

結子の手には一つだけ石が残されていた。さっき拾ったものの中で、一番サイズの大きい石を投げずに残していたのだ。

「グッ……」

結子が石を強く握り、即席の武器にすることに気付いた途端、犬は急速に飛びかかる方向を変えた。さきほどまで潜んでいた草むらに再び飛びこみ、ガサガサと音をたてて移動する。

「う、うそ！？」

素早く右へ、左へと往復して移動する。結子は犬の体で葉が擦れる音を聞き、その位置を予測している。しかし、ふいにその音が止まった。

(何よ、この犬……。本当にただの飼い犬なの！？)

結子は最後に音が聞こえたあたりをじっと見つめるが、おそらく、犬はすでに音を立てずにそこから移動しているだろう。

(どこから、どこから来るのよ)

草むらに近付けば、その向こうに隠れた犬を見つけることはできるかもしれない。しかし、下手に近付くことによって、さっきと同じように不意打ちを受ける恐れがある。

(クッ……。次にアイツが出てきたら、この石を思いっきりぶつけるしかない。なんとか鼻先にぶつければ、一発で仕留められるはず……)

草むらから視線を外さないまま、逆に距離を取る。

(……)

すぐ近くの体育館から聞こえる生徒達の声がずっと遠い世界のよう

うに感じられる程、静かな空間が広がった。

(……来るなら来い。どこからでも)

しかし、その沈黙は意外な声で破られた。

「ひ、平崎さん。なにやってるの……？」

「積里君!？」

直人が現れると同時に、草むらから犬が飛び出した。

第二十二話・助っ人？

「積里君……っ！？」

「ひ、平崎さん！ 危ないっ！」

「グアアウッ！」

一瞬、結子が視線をそらした隙に、犬が襲い掛かってきた。

「このっ……ッ！」

アゴが割れんばかりに大きく開かれた犬の口から、鋭い牙がのぞく。結子は運動部で鍛えた反射神経のおかげでかろうじて噛みつきを回避できたが、その牙の切っ先が、わずかに腕をかすめた。

「いっつ……」

じん、と焼けるような痛みが結子の腕に走る。傷自体は小さいが、そこからじわじわとしみ出てくる鮮血が、強烈な痛みを自覚させていた。

（なによ、こんな傷なんて、部活やってた頃はしょっちゅうだったじゃない！ この程度で痛がってる場合じゃないッ！）

「平崎さん、この犬は……」

状況を飲み込みきれしていない直人をよそに、今の衝撃で落とした石を探す。だが、その時間は与えられなかった。

「ガァ！」

間髪をいれずに再び犬の口が開かれる。そう結子が認識したと同時に、犬の体は宙に飛んでいた。

（距離が近すぎる！）

脳内のアドレナリンが高まったせいか、牙の近づいてくる様子がまるでスローモーションのようにゆっくりと感じられる。自分の体を動かす事も出来ないまま、獣の臭いを発する口が近付くのを待つだけになっていた。

（ヤバ……）

視界の大部分が、赤黒い闇に覆われる。いや、完全な闇ではない。白い突起物が半円形状に並んでいる。その鋭い突起物がすぐ目の前に迫って来る。その時――。

「ギャウツ！」

急激に視界が開けた。一瞬、結子はなにが起こったのかわからず、茫然と立ち尽くす。

「グァ、ギャアァウ！」

「うつ……こ、このっ」

犬がうつぶせに地面に倒れている。その背中に直人がしがみつき、必死に抑えつけていた。

「積里君！」

「ひらっ、平崎さん……逃げてっ！」

全身の体重をかけて犬の動きを封じる。凶暴なエネルギーを地面に押さえつけながらも、直人の脳内は妙に静かだった。

（な、なんで僕、こんなことになってるの？ 確か、タオルを取りに来ただけなのに……）

「グアウ！」

（わわっ、暴れないでよく！ お願いだから、落ち着いてく！）

当然ながら、犬がその思考に従うわけがない。ますます激しく抵抗される。

（お願いお願いお願いっ！ もう、やめてく！）

どうやら、落ち着いていたわけではなく、衝撃が大きすぎて恐怖心がマヒしていただけのようだ。今ごろになって恐怖を感じ始めたらしく、その目にうっすらと涙が浮かんで来ている。

「ガアッ！」

「うわ！」

ついに、小柄な直人の体が振り落とされた。犬は素早く直人の腕から逃れ、体勢を立て直して結子を睨みつける。

「グルアアアアアッ！」

全身の毛を逆立て、怒りの様相を示している。四本の足がガツシ
リと地面を掴み、最後の一撃を放つべく牙を剥く。

「積里君、大丈夫？」

「う、うん……。今のところは」

本当に、「今のところは」である。次の攻撃に耐えられる保証は
ない。しかも、仮にしのいだところで反撃するチャンスがないのだ。

「……ボールさえあれば、アイツがどんなに動いても当てられるん
だけど」

「も、持っていないよ……。ボールなんて」

動けない。どちらも、視線を犬に固定したまま動けない。再び沈
黙があたりを包んだ。

「ガアアアアアアア！」

後ろ脚が、力強く大地を蹴りあげた。茶色の塊が自らの発した声
と共に飛んで行く。その声の大ききゆえに、同時に発された別の声
を、その場の誰もが聞き逃していた。

「ニャウッ！」

鋭く、高い声だ。そして同時に、白い塊が犬へ飛びかかった。

「ガァッ!？」

「け、ケリー!？」

いつの間にか現れていたケリーが、犬の背に飛び乗っていた。バランスを崩し、犬の突進はまたも不発に終わった。

「ガル……」

「にゃ!？」

だが、体重の軽いケリーは簡単に払い落されてしまう。ケリーは地面に落ちる直前に素早く体の向きをかえて無事着地するが、それ以上の攻撃をする意思はないらしくクルッと犬へ背を向けた。

「にゃっ!」

そのまま一目散に、ケリーは逃げて行く。

「ちよっ、なにしに來たの!？」

思わず結子は叫んだ。が、そのケリーが逃げて行く方向を見た時、大きく目を見開いた。

「よーしよし。ようやったな、ケリー」

「にゃう」

不敵な笑みを浮かべ、両手でケリーの体を抱き上げる人物――。

「光助さん！」

「光助！」

直人と結子が同時に声をあげる。特に結子は、その顔に安堵の表情を浮かべていた。

（やった……。光助なら、コイツを捕まえるのに適してる！）

「グアアアッ！」

何度も攻撃を妨害されて怒りが頂点に達した犬は、光助の方を向き直って地面を蹴りあげる。しかし、一度地面を離れた後ろ脚は、宙に浮いたままになった。

「ガ……。グア？」

よくよく見ると、その脚に糸が絡んでいる。先日、落下する丈二を受け止めたのと同じ透明の糸だ。

「ご苦労、ケリー。結子と坊主もよう頑張ったな」

光助は肩にケリーを乗せ、その手に掴んだ糸を引っ張った。

第二十三話・平和な男

「犬っちゅう生き物は肉体の構造上、舌を掴まされると身動きが出来る。噛まれるのを覚悟の上で手を突っ込めば、素手でも捕まえらる」

「こんな奴に噛まれたらシャレにならないわよ」

光助は器用に糸を使い、犬の脚を縛っていく。初めのうち、犬は激しく抵抗し続けていたが、完全に脚を封じられるとおとなしくなった。

「腕に上着でもまとおけておけば大事には至らんだろう」

「その上着も持っていないんだけど」

「きょう……」

犬は力なく尻尾を振り、妙にしおらしくなっている。これが先ほど凶暴に襲いかかってきたのと同じ犬だとは思えない。

「保護団体が抗議がきそうな格好やけん……現行犯逮捕ならしやあないわな」

「あの、光助さんはなんでここに？」

「ケリーが教えてくれたとよ。結子が犬に襲われて非常に危険な状態だから、すぐに行って助けてやれ、と」

「え、そこまで詳しく!？」

「……までは、わからなかったが、とりあえず不穏な空気を感じたんで案内してもらった」

「にゃふ……」

そのケリーは、芝生の上に丸くなってあくびをしている。そして自分の仕事は終わった、とばかりに居眠りをはじめた。

「それで、なんでこん犬がここん来たわけ？」

「さあ……私にもわからないわよ」

結子はハンカチで腕の止血をしながら答えた。

「あゝあ、ヒドい目にあった……。変なバイ菌とか入ってなきやいいけど」

「……ほ、保健室に行った方がいいんじゃない？」

直人は蚊の鳴くような声をあげる。改めて思い返すと、結子の傷の原因が自分にもあるということに気付いたからだ。自分が突然声をかけたばかりに、結子は隙をつかれたのだと。

「あ、あの……平崎さん」

「ん?」

「ごめん。僕が、その……いきなり出てきたりするから……」

まっすぐに、結子の目が見れない。

(……本当、この間から助けてもらったり、手伝うはずがお荷物になったり、僕って迷惑なヤツ……)

自分が恥ずかしいやら、申し訳ないやらで、がっくりと肩を落としてうなだれてしまっている。

「や、やだあ積里君！ 何言ってるの？」

「え……」

「どっち道、私一人だけじゃもっと危なかったし。積里君は全然悪くないよ」

結子はそう言い、歯を見せて笑う。

「平崎さん……」

「助けてくれてありがとね。積里君」

直人はようやく顔をあげ、微笑む結子と目を合わせる。

『ありがとね。積里君』

その言葉が、笑顔と共に直人の心に焼きついた。

「平崎さん……」

「さて、おりゃあそろそろ教室ん戻ろかい」

光助がわざと大きな声で割り込んでくる。

「そんな犬は保健所にでん連絡すればいいやろ。そのへんの手配はおりがしちよっしゃるわ」

「うん。お願い、光助」

「行くぞ、ケリー」

光助は脚の糸を緩め、犬が歩けるようにする。これ以上縛る必要がないほど犬は戦意を失くしていたのだ。もっとも、首輪代わりに巻いた糸は外さない。

ケリーも目を覚まし、その後をついて行く。

「……変な事件だね。犬が凶暴になったりおとなしくなったり……」

「そうね。……今朝の二年生——」

結子はあごに手を当て、今朝の記憶を引き出す。

「たしか、コクドウとか言ってたっけ？　アイツが絡んでるんでしようね、やっぱり」

「あ、あの人犬をけしかけたっていうの？」

「そう考えるのが自然でしょ」

刻同俊——。あの男の奇妙な眼差しを思い出し、直人は再び背筋を震わせた。

「でも何のために？」

「そこまでは知らないわよ。後でジョーや光助たちと相談しなきゃ」

結子は校舎の外にかけられている時計を確認する。時刻はかなり授業時間に食い込んでいた。

「今からじゃ授業にも出られないわね。保健室いこつと」

「あ。そう言えば僕、丈二君のタオル取って来るように頼まれてたんだった」

「そんじゃ、こっそりタオル取って戻ってきてくれる？　一緒に保健室行こうよ」

結子から意外な提案が出た。

「えっ僕はべつに怪我してないけど……」

「ただ授業をサボったと思われるよりも、怪我した女の子を保健室に連れて行ったってことにした方がマシでしょ」

「それも……そう、かも」

「凶暴な野犬から女子を助けたって言ったら、ヒーローっぽいじゃん」

などと少し大袈裟に表現してみたりする。

「そこまではないけど……。じゃあ、すぐに取ってくるから」

「つたく、ジョーのやつもタオルぐらい自分で取りに来いっての。

……そーいやアイツ、今回なにもしてないわね」

「いっくし！」

「どうした立国。風邪か？」

「いえ……。なんでもないっす」

わざとおどけて教師に手を振る。

（誰かうワサしてんのか？ つつーか、直人はなんで戻ってこないんだろ……。タオル取ってくるだけなのに）

なにが起こったのかも知らず、平和に授業を受ける丈二であった。

第二十四話・束の間の休息

電話のコール音が鳴り響く。男――「ボス」は食事を中断して電話を取った。

「はい、もしもし」

『もしもし……』

中年女性の声だ。ボスにとっては何度も聞き覚えのある声だったが、これまでとはわずかに声のトーンが違っていた。

『あの、この間の相談のことで……報告というか……』

（嬉しい、という感情が、隠しきれずに声に出ている。……上手くいったようだな）

『先日、保健所から連絡があったんです。ウチの犬が見つかったって』

「それはよかったですね」

相手の喜びを受け止めるように、自分も笑い顔をつくって答えた。

『前に相談した時、先生に親身に話を聞いていただいて、それに保健所に問い合わせしてみてもどうかとアドバイスまでいただいて……』

相手の女性はボスのことを「先生」と呼んでいる。

『その時すぐには見つからなかったんですけど、そういう犬を見つけたら連絡しますって保健所の方が言われたんです。それで、先日やっと……』

よほど犬のことを大事に思っていたらしい。感極まって今にも涙を流しそうな声になっている。

『先生のおかげです。本当に、ありがとうございます!』

「いいえ、私は何も。その犬が無事に戻ってこれたのは……」

『これたのは……?』

(偏才学生たちのおかげです。などとは言えないな)

先ほどとは違うニュアンスの笑みを浮かべる。

「その犬が、本当にあなたのもとへ帰りたいたと思っていたからですよ」

『まア!』

「よほど、あなたのことを好きなようですね」

我ながら臭いセリフだな、などと思いながらも言葉を続ける。この女性に対してはこのような言葉が最も有効であることを、男は知っていた。

『それはもう、なにせウチには他に家族もないものですから……。』

この子と私はお互いを心の支えにして生きているんです』

『ワン！』

犬の声が聞こえる。女性のすぐそばにいるようだ。

『この子とは、私が一人暮らしを始めてから一緒に生活したんです。とっても利口な子で……』

（やれやれ、ここから先はただの自慢話になりそうだな）

適度に合いの手を入れつつ、女性の話を聞き流す。男の関心は、電話で中断された食事の続きに向けられていた。

『本当に、ありがとうございました。本当に……』

三十分ほどで話し続け、女性はようやく電話を切ってくれた。

「……やれやれ。事後フォローが済んだのはいいが、食事がすっかり冷めてしまったな」

男はテーブルに戻り、箸を手取る。だが、その箸はすぐにテーブルへ戻された。

トゥルルル……、トゥルルル……。

（ふーっ、もう一仕事か）

仕方なく男は立ち上がり、受話器を手を取った。

「さて、仕事もないことだし、勉強に励むとしますか」

犬の捕獲騒動から二週間がたっていた。中間テストを目前に控え、直人は偏才たちとともに図書館の秘密部屋で勉強していた。

「面倒くせ〜な〜。一年の中間テストなんて別にどうでもいいだろ？」

丈二は早くも筆記用具を放りだしてしまっている。初夏の暑さが増すますやる気を削いでいるようだ。

「そんげ言いよつと、後々のさんこつなつど。成績は稼いどいて損ないわ」

「むしろさあ、入学当初は成績悪くて、あとからだんだん良くなってきたって方が印象よくねえか？」

そう言う人間は大抵、卒業するまで成績が変わらなかったりする。

「勉強しないんなら帰ればー？　ここにいないならちゃんと勉強しなさい」

「なんだよ結子ー。先生みたいなこといいやがって」

直人は黙ってことの成行きを見守っていたが、ふと思い出して言った。

「……そういえば、かず君はテスト自信あるってさ。特に英語」

「なあ、結子。ちょっとここの英語教えてくれ」

180度態度が変わった。

「坊主、ジョーの扱いになれてきたなあ……」

「ぼ、僕も勉強しなきゃ」

この二週間で、直人はすっかりこの集団になじんでいた。当然、和仁との交流も続いており、よく丈二と和仁のケンカを止めるのに苦労している。（今回は逆に利用したが）

「直人、ここんどこわかる？」

「えー……ちょっとわかんないなあ」

「どれ、見しちみい」

光助が割り込んできて問題を解いてみせる。上級生の面目躍如とあったところか。

「そういや、光助って進路どうすんだ？ 進学？」

「んにゃ、就職すっこつなりそうや」

「へー、なんの仕事？」

結子も勉強の手を止めて話しかける。直人も同じだ。が、光助は

すぐには答えず、三人に背を向けた。

「……あんましマトモとは言えん仕事よ。本当はやりたくねえっちゃけん、しゃあねえわ」

背を向けているため、直人たちは光助の表情が曇っていることに気付かなかった。唯一、窓辺でうたた寝をしていたケリーだけが、光助の複雑な心境を理解していた。

第二十五話・執念

「あざー先ぱーい、いますか？」

薄暗い廊下に、男の声が響き渡る。重々しい威圧感のある、西洋風の装飾が施された廊下をズカズカと歩いて行く。

「あざー先輩？」

「……騒々しい。何の用だ」

ふと、声がして、男は立ち止まった。声が発せられたのは、たった今素通りしたばかり扉の奥らしい。

「先輩いたんスカあ？ もっと早く返事してくださいよ」

男は間の抜けた口調で文句を言いつつ、その扉の前に戻る。

「入りますよ」

「ああ」

ギィィ……と重厚な音をたてて扉を開けと、廊下よりも暗く、陰気な空間が男の視界に広がった。暗闇の奥に白い光が灯っており、その光に顔を照らされている人物がいた。

「先輩。まあた、部屋まっくらにしてんスカ。目え悪くなりますよ？」

「……すでに十分、俺の視力は低下しきっている。ガキのころからな」

先輩と呼ばれた男は、自分の顔にかけている分厚いメガネを指さして言った。そのレンズの内側にある鋭い両眼は、白い光の発信源——コンピュータの画面に向けられたままである。

「それで、何の用だと聞いているんだ。早く答えろ、俊」

「そうそう！　ちよいと、困ったことがあるんスよ」

刻同俊は首に下げたアクセサリをいじりながら中の男に近寄って行く。

「前に見つけた犬に、逃げられちゃいましたね」

「……あの、ハクとかいう大型犬か」

「そう！　あの、でっかくて俊敏なヤツ！　名前覚えててくれたんスか？」

「黒茶色っぽい犬のくせに、『ハク』なんて名前だからな」

「オレ、ネーミングセンス結構いいでしょ」

男の込めた皮肉にも気付かず、俊は得意げに胸を張る。

「せっかく、素質のある上玉だったのにさ。恩を忘れて逃げやがった」

「人の飼い犬をさらっておいて、何が恩義だ」

「う……それは、しょうがないっしょ。つか、あれ命令したのあざー先輩じゃないッスか！」

「その呼び方はやめろ」

男は大きく息をつき、ようやくパソコンの画面から俊へと視線を移した。

「勝手にさらってもいい、とは言っていない。飼い主を上手く言うくるめて、もらい受ければいいんだ」

「そんなかったるい……じゃなくて器用なことオレには無理ッスよ。あのババア、人の話なんか絶対聞かないってタイプだから」

「お前もな」

再び、パソコンの方へ向き直る。

「せ、せんばーい！ まだ話終わってないッスよ！？」

「……」

男は無言でキーボードを操作する。一応、最後まで聞いといてはやるか、というような態度だ。

「それで、ハクが逃げ出した理由なんスけど……。たぶん、ウチの学校の生徒が関わってると思う」

「……」

「ちょっと……まあ、ありまして、ハクにある女子を襲わせたんです。そしたら返り討ちにあって保健所送り。で、今は元の家に戻ったって……」

「何が言いたい」

「その女子の名前、調べてもらいませんか？　俺が調教したハクを返り討ちにしやがった、あの一年のクソ女に復讐したんで」

あの、猟奇的な瞳で俊は笑った。

「……顔は覚えているか？」

「そりゃもちろん。ちょっと俺好みの可愛い子だったんで」

「ストーキングをしたいのか」

「リベンジをしたいです」

「フッ」

男はかすかに笑みを浮かべる。そしてしばらくの間パソコンを操作し、画面に直人達の通う高校の生徒名簿を映し出した。

「一年の女子だな？　今画像を検索している」

「相変わらず手際がいいッスねー。情報化社会においてメチャクチャ有利な才能じゃないッスか」

「お前が言っていると嫌味に聞こえる」

結子の顔が画面に映し出されるまでに、五分もかからなかった。

「……ここ？」

「そう。ここの服が安くてお洒落なのよね」

直人と結子は休日を利用してショッピングをしていた。無論、丈二と光助はいない。というよりもこの二人が直人をけしかけたのである。

「僕、服はあんまり興味ないんだけどな……」

「ひとり暮らしするんだったら、安い服屋をおさえとくのは当然でしょ」

「そ、そうだね」

直人の心臓はずっと高鳴りっぱなしだ。光助達によって仕組みれたとはいえ、結子とデートのような行動ができるのだから。

「積里君？」

「あ、ゴメン、平崎さん。ちょっと先に外出てるね」

収まらない興奮を鎮めるために、直人は結子を残して店の外に出

る。

「ふ〜……。光助さんも丈二君も、明らかに僕のことからかつてるよ。いや、嬉しいけどさ……」

ブツブツと考えごとをしていたせいか、直人の足は自然にその場をうろついている。しかし突然、その足取りが止まった。なにかにぶつかったのだ。

「……おい、ナニぶつかってきてんだ」

「え？」

考え事を中断し、恐る恐るぶつかった「なにか」を見上げる。

「謝りもしねえつもりか？　おい」

「ひ、ひいっ!？」

その正体は、いかにも強面の、表稼業ではないタイプの大男だった。

第二十六話・鳴峰組の本部にて

「光助、いるか？」

あごひげを生やし、サングラスをかけた中年の男が閉じた障子に向かつて声をかけている。

「……おるに決まっちゃやん。アンタが来いて言ったくせん」

「入るぞ」

障子をあけると、中に光助がいた。いつもの制服姿ではない。この屋敷にふさわしい簡素な着物姿だ。男は光助の前に自分で座布団を敷いて座った。

「お前も高校生でいられるのは今年で最後だ。来年の今頃には……」

「そげな話はもう何遍も聞いちよる。今更言わんでんいい」

光助は視線を男に向けない。男の居心地を悪くするためか、読みかけの本の表紙を見続けている。

「大体、なんでここで話すとね。息子に説教するとに、わざわざ自分の職場に呼び寄せる親父が他んおるけ？」

男——光助の父は、黙って光助の顔を見続ける。

「……仕方ないだろう。ウチも人手不足なんだ」

「仕方ない、け。そんな決まり文句もガキン頃かい聞かされちよる」

「光助。しばらく真面目に、私の話を聞きなさい」

男は少し口調を強める。しかし、それでも光助の態度は変わらない。

「嫌やし。一応話は聞いちよってやつかい、勝手んしゃべりや」

「……」

親子の間に、不穏な空気が広がる。光助は頑なに父親を拒絶し続け、決して心を開かない。

「――おい、待て！」

ふいに、部屋の外から声がした。続いて、廊下を走って来る複数の足音が。

「何事だ？」

父親は一時会話を中断し、障子をあけた。そして、その足もとを抜けて素早く何者かが部屋へ飛び込んだ。

「ケリー！ なんしょつとや」

「おい、何だお前達は」

廊下に出た父親が、急に凄みのある声を出す。ケリーに対してではない。その後を追って走ってきた人間に対してだ。

「すみません！　ちょっと通してッ！」

「ひ、平崎さん、大丈夫なの？　こんなことして……」

光助がいつも聞いている声だ。

「坊主と結子！？　なんでここんおっとけ？」

驚いた光助も部屋を出る。そこにいたのは、紛れもなく結子と直人であった。

「あ、やっぱり光助だ！」

「おいおい、どんげなっちよっとけ」

二人の後ろからは、さらに数人の男たちが走ってくる。どうやら直人達を捕まえようとしているようだ。

「……知り合いか？　光助」

「ああ」

「そうか。……いい度胸をしているな、こいつら」

父親は二人を値踏みするように見つめ、低い声で言い放った。

「ここら一帯を仕切る広域組織・鳴峰組の本部で騒ぎを起こすとはな」

なぜ、直人と結子がここへやってきたのか。その原因は十分ほど前――。

「え、ごごごめんなさい……。つい、うっかり」

「ほーう、うっかりで人にぶつかっというて、口先だけで謝るつもりか」

鳴峰組の下っ端は、直人の襟を掴んで持ち上げた。無論、この時点でこの男はさほど怒っていなかった。少しおどかしてみただけである。問題はその後だった。

「本当にごめんなさい！」

「ん、そうやって素直に頭をさげれば別に……」

「こらあ！　なにやってんのアンタ！」

後からやってきた結子はその現場を目撃したのだ。

「ちょっと図体がデカいからって偉そうに……」

「な、なんだあ？　この嬢ちゃんは」

「平崎さん！」

男の風貌が災いしてしまった。結子は男の姿を見て相当危険な状

況だと判断し、恐怖を紛らわせるために強い態度にでてしまっているのだ。

（わけわかんねえな……。もう行こうっと）

男が直人を放し、背をむけた。その時、着地を誤った直人がバランスを崩して地面に倒れた。

「ちよっ、待ちなさいよ！」

「平崎さん。僕、大丈夫だから……」

「おい、どうした？」

「あ、兄貴！」

さらに間の悪いことに、もう一人、別の組員がその場に現れてしまった。

「こ、コイツらが……」

「ああ？」

「か、数を増やしてもダメよ！」

「逃げよう！ 結子さん！」

その後、色々騒いでいるうちにギャラリーが集まってきたし、組員達はしかたなく二人を車に乗せて本部の近くまで連れてきてしまったのだ。

「あ、兄貴。思わず連れてきちまりましたけど……どうするんですか？」

「さあ……どうしよう」

車を降りたところで組員二人が相談していると、そこにケリーが通りかかった。

「にやう？」

光助を待っている間に屋敷の周りをウロついていたケリーは、車の中に直人と結子がいることに驚いた。そして中の直人たちもまた、ケリーの登場に気付いたのだ。

「ケリー！ ……ってことは、近くに光助がいる！」

「今、ケリーこの屋敷から出てこなかった？」

そして、組員たちが目を離れた隙に車を飛び出し、ケリーを追って走り出した。

「にやあ！？」

「あ、おい！ 勝手にそこに入るな！」

なぜか迫ってくる二人に驚き、ケリーは光助のもとへと逃げだす。それを追いかける直人と結子。さらにそれを追う組員。

「阿呆か、お前らは」

そして今、光助親子の話し合いの場へ現れたのであった。

第二十七話・追跡者達

「カタギん奴に手え出すなて、昔っかい言われちよっとな、わからんバカがおるこつ」

結子から話を聞き、光助はため息をつく。光助の父親はさきほどの騒ぎを起こした組員二人に説教すべく、席を外している。部屋にいるのは光助と結子、直人だ。ケリーは庭で昼寝をしていた。

「あゝ、よかった。まさか本当に光助がここにいたなんて」

「あああ、あの、光助さんて、一体……？」

直人はまだ状況が飲み込めず、おどおどしている。当然と言えば当然だろう。

「さっきんヒゲグラサンが、おりゃん親父だ。ここの組織ん幹部をしちよる」

「か、幹部!？」

「別に大した事しちよるわけやない。クソ真面目で、年季が入っちゃうだけやし」

眉をひそめ、明らかに不機嫌な表情で光助は語る。早く父親の話から離れたい、というニュアンスを込めているようだ。

「鳴峰組って、名前だけはなんとなく聞いたことあるんだけどなあ……。ここが本部だったんだ」

鳴峰組。結子たちの住む地域一帯を仕切っている組織――。一般には”ヤクザ”とも呼ばれる存在である。しかし、一般にイメージされるような乱暴なものではない。地域を警護する自警団を前身とし、用心棒代（ミカジメ料）をもらう代わりに治安を守る。昔気質の礼儀を重んじる組織である。

「どっちんしろ、民間人は出来るだけ関わらん方がいい。お前もさっさと帰れ」

「そうした方がよさそうね。買い物の途中だし」

結子は妙に落ち着いてそう言い、立ち上がった。

「行こう、積里君」

「う、うん」

「そんじゃあまた明日。図書館でな」

二人を裏門まで見送り、光助はようやく笑顔を見せながら手を振った。

「せっかくなら、車でさっきの店まで送り返してくればよかったのに」

「それはさすがに無理だよ……。っていうか平崎さん、なんでそんなに落ち着いてられるの……？」

最寄りのバス停のベンチに並んで座り、二人はバスを待つことに

した。

「なんでって……光助があそこの関係者なら、その光助の関係者である私たちには手を出さないでしょ」

「あ、そうか」

「そもそも、私達はなーんにも悪いことしてないしっ！」

自分に言い聞かせるように、結子はキツパリと言いきった。

「……ごめんね、結子さん。僕があの人にあつかったから」

「もー。だから、積里君も悪くないってば！ どっちかって言うとな、私が騒ぎを大きくしちゃったんだし。積里君はなんにも悪くない。ね？」

「え……うん」

そう言ってニツコリと笑顔を見せる。それを見て、直人はまたも顔を赤らめてしまった。

だが、二人とも気付いていなかった。自分達が見張られていることに。

「へえええ……。あの女、あそこの組と関係あるんだ。あざー先輩は知ってんのかな？」

高校生の男女と、いかにも俊敏そうな中型犬が十数メートル離れた所から二人を監視していたのだ。

「その呼び方やめなさいって、言われなかった？」

「言われたよ。でももうこの呼び方に慣れちゃったし」

男は、あの刻同俊である。結子たちが鳴峰組にさらわれる前から、二人のことを追跡したいたのである。いったん二人を見失った後は犬の嗅覚を利用して探索し、屋敷を出たところを発見したのだ。

「つかさ、俺の方が年上なんだけど？ そのへんわかってる、みどりちゃん？」

「わかった上で、言ってるの。自分の私怨に後輩の女の子を巻き込む先輩に対して敬語を使う必要はない」

みどりと呼ばれた女子は冷たく言い捨てた。背が低く、髪も短い、鋭い目つきのせいで貫禄を感じさせる。

「んなこと言ってもよく。お前を連れて行って言ったのはあざー先輩だぞ？」

「それもわかってる」

みどりの視線は、結子にくぎ付けになっている。結子の顔を、動作の一つ一つを、目に焼き付けるように凝視していた。

「隣のやつは誰？」

「あの隣のチビ……。この間も一緒にいたけど、もしかして付き合ってたのかもな」

「カレシ？」

「えーと、名前は確か……ツモリとか言ったっけ。先輩について調べてもらったんだ」

やがてバスが到着し、直人達は乗り込んだ。しかし、俊とみどりは動かない。

「この場ですぐやっちまおうかとも思ったけど……。あっちの人と関係あったら面倒だな。いっぺんあざー先輩に相談しよう」と

「また、言った」

「別にいいじゃねーかよ。しつっこいなあ」

追跡してまで復讐しようとした人間が言うセリフではない。が、俊自身はそのことに気付いていない。

「平崎結子……」

俊の言葉を見無視して、みどりはボソッとつぶやいた。

「そう、ゆいこ。ターゲットの名前、憶えた？」

「……うん」

バスが通り去って見えなくなっても、みどりはその方向を見続けている。その視線に気付いた俊が、ニヤニヤと笑いながら声をかける。

「なにになになに？ みどりちゃん。もしかしてあのチビに興味あんの？」

「……は？」

「へー、あんなのが好みなんだ。意外だね」

「くだらない」

「素直じゃないなあ………ツツア!？」

みぞおちに蹴りを入れられ、俊は体を折りたたむように倒れた。

第二十八話・接近する影

中間テストを目前に控え、普段の授業もテスト対策の自習が多くなった。直人は形だけは真面目に教科書を広げているが、横に座っている丈二と話をしていた。

「えっ、じゃあ丈二君は光助さんがあそこの組の人って知ってたの？」

「知ってたっつーか……光助とはガキの頃から仲良くて、昔遊んでいた時にそんなこと言ってたような気がする。その時は冗談だと思ってたけどな」

丈二の方は教科書を出してすらいない。もっとも、教師が監視していない自習時間では珍しくない光景だ。

「まさか本当だとは思ってなかったけどな」

「へえ」

「それよかさ、直人。俺が聞きたいのはその後なんだけど」

「その後？」

丈二はニヤリと笑って席を立った。隣に座っている直人の肩に腕を回し、顔を近付いてボソボソと話しかける。

「組の本部から出た後、結子とちゃんとデートできたか？　ってことだよ」

「デッ、デート!?!」

直人は、一瞬飛び出しそうになった大声を必死に押し殺す。

「どうだった?」

「どうって……その、時間があんまりなかったから、少しだけ買い物して、それで……おしまい」

耳の先まで火照らせて直人はうつむいた。周りの人間が聞き耳を立てていないか、気になって仕方ないようだ。

「じゃ、もう一回デートやり直しだな」

「だから、デートじゃ……」

「今度は直人が誘えよ」

「僕がつ!?!」

今度は抑えきれずに声が大きくなった。が、幸いにもクラスメート達は勉強や雑談に夢中で二人の会話を聞いてはいなかった。

「この前のは俺と光助がセッティングしたからな。今度は男らしく、自力でこぎつけてみる」

「で、でも、なんて言ったらいいか……。断られたら気まずいよ」

「大丈夫だって。別に告白するわけじゃないんだからさ。してもい

いけど」

最後の一言が余計に直人を追い詰める。

「俺が見た感じじゃあさ、けっこう脈アリ、だと思っけど」

「え？」

興奮と驚きで、一瞬直人の呼吸が止まった。

「結子さあ、直人のことを悪くは思っていないみたいじゃん。同じ中学だったって共通点をおいても、割と親密な関係になってるんじゃない？」

「ししし、親密ってそんな……」

キーン、コーン、カーン、コーン……。

授業終了のチャイムが鳴り、礼をするために教師が戻ってきた。

「よし！」

丈二は直人から離れ、席に戻る。

「今日の放課後、結子より先に図書館行って、デートに誘う打ち合わせしようぜ」

（ちょっと！ 声大きいよ！）

口には出さない直人の叫びを感じ取ったのか、丈二は朗らかに笑

って見せた。

その笑い顔は、放課後には苦い表情へと変わった。玄関を出たところである人物に会ったからである。

「おい、ナオ。今日の放課後、ヒマある？」

「かず君」

声を返した直人の背中にヒヤリと汗が流れる。……人間と言うものは、嫌いなものほど逆に引き寄せられてしまうものだと思い知らされたようだ。

「時間あったらさあ、久々にゲーセンでも行かね？ テスト前って部活ないからヒマなんだよ」

「あの、今日は……」

なんとか穏便にやり過ごそうとするが無駄だった。

「部活ないなら自主トレでもやってろよ。スポーツバカ」

「自主トレもやった上で時間が空いてんだよ。そのぐらいわからねえか？ ただのバカ」

（ただのバカってなに？）

またもや罵り合いが始まった。もはやあいさつ代わりだ。

「普段から部活もやってない暇人間は黙ってろ」

「他にやるべきことがあるなら部活やる必要なんてねえんだよ」

言い合いながら三人は歩いて行く。校門を出ても丈二と和仁は口ゲンカをし続け、直人が二人を置いて走り去ろうかなと考えだした時――。

「あの、ちょっといいですか？」

三人に声をかける人物がいた。他校の制服を着た、短髪の美少女である。

「え？ あ、俺ら？」

「そうです」

「えっと……なに？」

少女の登場で、しばしケンカが中断された。

「あの……私……」

うつむいて上目づかいになりながら少女は言った。

「ちょっと、この住所までの道をききたいんですけど……。このあたり、初めてなものですから」

よく見ると手にメモのような紙を持っている。メモを頼りにやってきたが、途中から道がわからなくなった、という風に見える。

「その地区なら知ってる。俺が教えてもいいけど」

まっさきに丈二が声をかけた。その目つきから察するに、少女に興味（下心）があるようだ。

「なんなら、そこまで連れて行こうか？」

「あ、ハイ。お願いします」

しかし、それだけでは済まなかった。

「待て。俺が行く。」

和仁が口をはさんできた。またしても丈二に対抗心が湧いてきたのだろう。

「俺の家がそこに近いから、ついでに連れて行く」

「はあ？ 家とか関係ないだろ。俺が先に声かけたんだから俺が一緒に行く」

今にも掴みあいをしそうな雰囲気だ。実際に少女が「だったら二人で案内してください」と言わなければそうなったかもしれない。

「それじゃ、悪いけど一人で行ってくれ。直人」

「うん」

直人は安心して答える。とりあえずケンカに巻き込まれることは回避できたからである。

「じゃあ行こうか」

「よろしくお願いします。あ、私、みどりっています」

少女——みどりはかすかに笑って、そう名乗った。

第二十九話・燃え盛る激情

「みどりちゃんって、どこ高？」

「汐春女子高です」

「制服見りゃわかるだろ。これだからスポーツバカは」

少女——みどりを案内しつつも、丈二と和仁は口ゲンカをし続けている。

「俺はよその高校の制服なんか興味ねえんだよ。そこまでヒマじゃねえからな」

「制服に刺しゅうされてる学校名が読めないのか？」

「あの……ケンカは、ちよつと……」

そんなやり取りが何度も繰り広げられていた。

（立国丈二と九断光助。この二人を結子から引き離すだけでいいなんて、楽な仕事ね）

みどりは、丈二・直人と共にいたのが「九断光助」ではなく、和仁だということに気付いていなかった。

「じゃあ、あの女は直接スジ者とは関係ないんスね？」

『ああ。お前の報告を受けてより詳しく調べてみたが……色々面白いことがわかった』

同時刻。俊は図書館に近くに潜み、携帯で「あざー先輩」と会話していた。

『過去の携帯の電波記録まで調べた甲斐があった。実に、実に面白い情報だ』

「そうッスね。まさかこんな偏才の集団が、俺たちの他にあったなんて」

ニヤリと口元を歪める。

『ああ……予想外だった。本当にな』

電話の向こうからも、低く押し殺したような笑い声がもれてくる。

『そいつらを調べたおかげで、かなり有益な情報が手に入った。好都合だ。俺にとっても、みどりにとっても……な』

「オレにとっても、スよー？」

『そうだな、俊。お前のおかげだ。きっかけはどうあれ……お前があいつらに接触してくれたおかげだ』

「えっ、そうスカ？ 俺の手柄？ うはっ、嬉しい」

笑いながら、足元に座っている犬の頭に手を乗せる。先日、結子

の追跡に連れていた短毛の中型犬だ。

『その褒美と言ってはなんだが、今回はお前の好きなようにさせてやる。思う存分暴れてもいいぞ』

「うっひゃ、ありがたいお言葉」

俊は目を輝かせ、舌なめずりをする。

『ただし、九断光助という男には気をつける。そいつは鳴峰組の關係者らしいからな。下手に巻き込むと面倒だ』

「だ、いい丈夫ですって。そいつと、あと丈二とかい言う奴はみどりちゃんに任せてますから」

『そうか……。なら、安心だな。そろそろ電話を切るぞ』

「はい、了解ッス」

電話を切り、俊は改めて図書館の方を見る。結子たちが普段集まっている秘密部屋自体は俊のいる位置からは見えないが、そこへ続く通路の一角は見渡せるようになっていた。その通路を利用するのが結子、光助、丈二、そして直人の四人だけだということも「あざー先輩」は調べていた。

「さあ、そろそろ来るかな……。平崎結子」

一瞬、歪んだ笑みの表情が消え、その下から怒りと憎しみの感情が浮かび上がってきた。

「犬は……地上で最強の動物だ」

ギリギリと歯をきしませ、うわ言のようにつぶやく。

「本来の犬は、雄雄しく、強く、俊敏で何よりも強い生き物なんだ。人間に飼われてしっぽを振っている方が間違っている」

その感情が伝わったのか、犬が立ち上がって唸り声をあげだした。

「だから俺は解放してやった。家の中に閉じ込められていたあの大きな犬を外に連れ出して、野生に戻してやったんだ。……それをあの女が邪魔しやがった」

直人が結子と再会を果たしたあの日、結子によって撃退された犬——「ハク」はショックでまた大人しくなってしまうていた。それを見た俊は怒りを覚え、仕返しを企てた。それさえも妨害されてしまい、俊の憎悪は一層高まっていた。

「俺には……犬の野生の闘争本能を引き出す才能がある。そんな俺の”偏才”を、あざー先輩は認めてくれた。自分の目的のために俺の力が必要だと言ってくれた」

「あざー先輩」の目的がなんなのか、俊は知らない。しかし、その目的が、今回の事件で急速に果たされつつあるということだけは理解していた。

「準備はいいか？ ハッ」

ハッ、と呼ばれた犬は頭を縦に振り、”イエス”の意を示す。

「お前とハクが一緒にいたのはほんの数日だったが……同志として、力を合わせて生きて行けるハズだったんだ。それをあの女がブチ壊したんだ」

今度は独り言ではない、犬の耳に口を近づけ、ゆっくりと語り告げる。

「アイツの臭いはしっかり覚えているよな？　この間、追跡したあの臭いだ」

「ワウ」

任せろ、とでも言うように一声をあげた。その目には闘志がみなぎっている。

「ただの逆恨みだってみどりちゃんは言ってたけどよ、ここで引き下がったら男じゃねえよな？」

「ワン！」

その時、ずっと見張っていた廊下に人影が見えた。背の低い男子――直人だ。

「あいつは問題ない。あざー先輩の調査によると、アイツは別に偏才じゃねえらしいからな」

その直人の後ろに、もう一人別の人物の姿が現れた。それを見るとき同時に俊の目が大きく開かれた。

第三十話・暗躍、そして変更

丈二・和仁と別れた後、直人は一人で図書館へ向かっていた。

「あの二人って、なんであんなにケンカしたがるのかなあ……。前世でなにかあったりして」

などつぶやきながら歩いていると、途中である人物に出会った。

「おう、坊主。今日はジョーや結子と一緒にないとけ？」

「あ、光助さん。えっと……。丈二君はちょっと道案内をして……。それで、平崎さんは……。あっ」

唐突に思い出した。

（そうだった！ 平崎さんをデー……。遊びに誘えって言われてるんだった）

「どんげした？ 坊主」

光助は急に頭を抱えだした直人に質問する。その言葉には、好奇心のニュアンスがあった。

「い、いえ。何にもありません」

「ウソはいかなあ。結子をもう一遍誘うのに、どんげなして言い出そうかって考えちよっちゃろ？」

少し、カマをかけてみる。

「えっ！ 知ってたんですか！？」

「ほほう、凶星か」

「……あ」

完全に手玉に取られている。もつとも、これは特技というよりも単純に光助の性格が悪いだけのようだ。

「適当に言ってみただけやっちゃん、大当たりけ」

「あの……これは丈二君の提案で……」

「ハッハッハ！ ジョーも気が利くわ。ま、しっかり頑張りや、坊主」

「だ、だから、まだそんな心構えが……」

そして、二人は一緒に図書館へ行くことになったのだ。

「おいおいおい……何やってんだよ、みどりちゃんは。何で九断光介がここにいるんだ？」

俊は混乱しながらも、バッグからファイルを取り出す。そこに挟まっているプリントには、「あざー先輩」が調べた直人や丈二、そ

して光助の写真が載っていた。

「間違いねえ……やっぱり光助だ。どうなってんだ!？」

慌てて携帯を取り出し、再び電話をかける。しかし、聞こえてくるのは機械的な女性の声だった。

「クソッ! こんな時にあざー先輩は通話中かよッ!」

さきまで自分と会話していたのに、今は誰と話しているのか? という疑問が一瞬浮かんだが、それをすぐに打ち消して再度指を動かす。

「先輩がダメならみどりちゃんに確認だ。あの男には手を出すなって言われてるからなあああ……ちくしょう!」

電話発信のボタンを押してから最初のコール音が聞こえるまでの間が、俊には長く感じられた。

携帯の着信音が鳴り響いた。

(俊から……?)

みどりは一瞬怪訝な顔をするが、すぐに丈二と和仁へ笑顔を向けた。

「すみません。ちょっと友達から電話がかかってきて……。すぐに終わると思うので待っててください」

「ああ、いいよ」

二人から離れた所に移動して電話に出る。幸いにも、みどりが離れると同時に後ろの二人はケンカを再会したらしく、多少大声を出しても会話を聞かれる心配はなさそうだ。

「どうしたの？　こっちはちゃんとやってるわよ」

『やれてねえんだよ、それが！』

俊の声は妙に焦っている。

「どういうこと」

『お前、ちゃんと九断光助の顔を確認してたのか！？　あいつ、こっちに来てるぞ！』

（え？）

改めて、みどりは二人の方を向く。積里直人と共に行動していた、二人の男子を。

「確認も何も、そもそも写真を受け取ってない」

『は？』

「だから、私は光助と丈二の写真は見えないのよ。積里直人は顔を知ってたから、そいつと一緒にいた男子二人を誘導してる」

『はあ？ 写真もらってないって……あつ』

なにやら、思い当たる節があるようだ。

「まさか、私に写真を見せるように言われてたのに、すっかり忘れてたとか？」

『……』

沈黙が、「そうだ」と伝えているようだ。

「写真がないものだから、私はてっきり、そこまで調査が進んでないのかと思ってたんだけど。それで仕方なく前情報だけを頼りに二人を誘導したの」

『おいおい、なんてくっだらねえミスだよ！』

「そのミスをしたのはそっちでしょう」

電話の向こうから、俊の歯ぎしりをする音が聞こえてくる。

『ちくしょう……なんでこんなミスしちまうんだ。一体、どうすりゃいいんだよ！』

「光助に手を出しちゃダメってことはわかってるでしょ？」

『当たり前だ！』

ほとんど八つ当たりするように怒鳴りつけてくる。しかし、あくまでもみどりは冷静だった。

「ねえ。それで、そこに平崎結子はあるの？」

『いや……チビと光助だけだ。ハツに見張らせてる』

「なら簡単じゃない」

みどりは突き放すように冷たく言い放った。

『あ？』

「わからないの？　そこにターゲットがないなら、結子が図書館に来る前に見つけてやっちゃえばいいだけじゃない」

『あ……』

「組の関係者を巻き込まなければいいだけでしょ？　今ならチャンスじゃない」

『おお、そーだった！』

俊の声が一転して、歓喜にかわる。

『そういやそうだな！　みどりちゃんは何もしなくたって、アイツらが勝手にバラバラになってくれてんじゃん！』

「やっと理解した？」

あまり長引くと、丈二たちに不振に思われる。みどりはそれだけ言っただけで電話を切り、二人の下へと戻っていった。

第三十一話・発見

「平崎結子、九断光助、立国丈二……積里直人。そして……」

昼間だというのに薄暗い部屋の中で、「あざー先輩」こと字一はあざいちパソコンに向き合っている。

「フフ……皮肉なものだな。俺が必死に探しても見つからなかった『アイツ』の手がかりが、こんなちょっとした偶然で見つかるとは」

字一はパソコンと携帯電話を駆使し、わずかな時間で膨大な量の情報を入手し続けていた。当然、それらの情報の中には、自分が探しているものとは無関係だったり、真実は異なる情報も存在する。しかし、字一はそれらの中からの確に”本物”だけを選び取っている。

「後は俊やみどりが上手くやってくれば、完全に情報がそろそろあと一息だ」

字一の目に鋭い輝きが灯る。ここ三日ほどの間ほとんど睡眠も食事もとらずにパソコンを操作し続けていたため、体は痩せ細り、分厚いメガネをかけた顔は不健康に青白くなっている。それでも、メガネの奥の細い目は生き生きと光を放っていた。

「やっとだ……。やっと、アイツの居場所を突き止められる」

口の端が大きくつり上がり、白い歯を覗かせる。

（いっぶりだろう……こんなに腹の底から笑いたいと思ったことは）

あと少し、あと少し、あと少し。その言葉が呪文のように暗い室内に響き渡った。

「図書館のすぐ近くだと、中の奴らに気付かれる恐れがあるな。さあ、行こうぜ！ ハツ！ お前の鼻で、あの女の居場所を探し出さんだ！」

「ワン！」

俊とその犬——「ハツ」は図書館から離れ、そこから学校へと続く道のりを辿るように歩き出した。当然、無関係の人間にハツを見られると面倒なので、人目につきにくい路地を選んでいる。

「時間的に、もうそろそろ来る頃なんだ。授業が終わってまっすぐに図書館へ向かっているなら、もうこの近くまで来ていなきゃおかしいぞ」

「ワウ……」

しかし、下校時間の町並みには大勢の歩行者がいる。その中から結子を探し出し、同時に自分たちが他の人間に気付かれないようにするのは困難なことだった。

「クソ、面倒だな。あの女が別の道を通ってたりしたらヤバイじゃんかよお！ いっそのこと、夕方になってアイツらが帰るのを待つか！？ 夜道を襲った方が楽かも知れねーしょォ」

どうやらこの男、あらかじめ細かく計画してから行動するという発想に欠けているようだ。思いつきと勢いだけで行動し、しかも確認不足が多いため、ミスを重ねやすい。

「ああ、もう。あざー先輩に作戦考えてもらえばよかった！好きにしていって言われたから自分で作戦立てたけど、そういうの俺には向いてねえってことに気付くのが遅すぎた！」

とうとう頭を抱えて路地に座りこんでしまった。

「最初の予定じゃあ……みどりちゃんが光助と丈二って野郎を連れて行って、俺が図書館で待ち伏せして平崎結子をやるつもりだった。直人とかいうチビは居ても居なくても関係なくな。それなのに……俺が、俺がみどりちゃんに写真見せるの忘れてたせいで、光助が図書館に来ちまった。つつーか、みどりちゃんもひと言いってくれればいいのによお！」

ハツの方は俊にかまわず、学校帰りの学生たちを見張り続けている。犬は視力が弱いため、臭いで結子を探している。

「ど、どうする……？ 本当にこんなんで見つけれんのか？ やっぱり図書館で待ち伏せしてた方が良かったのか……！？ いやでも、もしかしたらすぐそこに居るのかもしれないし」

様々な思考がグルグルと脳内を巡り、散らばって収拾が付かない。だんだんパニックになって来た。

しかし、ここに来て、天は俊に味方した。

「ワン！」

小さい声でハツが吠えた。

「どうした？」

俊が顔を上げ、大通りの方を見ると――。

「い、いやがった！ 平崎結子オ！」

数人の女子たちと共に、おしゃべりをしながら歩く結子の姿があった。時折腕時計に目をやっているところを見ると、時間を気にしているようだ。

「ハッハハああ……。偏才以外の友達か、あれは。放課後の遊びに誘われて仕方なく付きあってやってるって感じだな」

結子の表情は一応笑っているが、早く一人になりたいくたしょうがない、といったところだった。図書館へと向かうべく、会話のタイミングを計っているようにも見える。

「好都合だな。こっちとしても、さっさとあの女が一人になってくれた方がいい。ハッ、このままアイツらの後をつけるぞ」

「ワウ」

「さあさ、平崎結子。早いところそいつらを追っ払ってちょうだいな」

長い「おあずけ」がようやく終わりそうだと確信し、俊の目に力強い光が宿った。

第三十二話・交錯する思惑

「それでさー、もうあのCD売ろうかと思ってんだけど」

「あつ、ならそれ私に売ってちょーだい！ 二千円出すから！」

「えー、三千は欲しいなあ」

「二千五百！」

友人たちが隣で楽しそうにおしゃべりしているのを聞き流しつつ、結子は心の中でため息をついた。

（あゝあ。早いところ解放してくれないかなあ。今日は絶対に来いってジョーに言われてたのに。一応遅くなるかも、とは言っておいたけど……）

友達と話をすることは嫌いではない。しかし、今日の放課後に丈二から「絶対に来い」と連絡を受けたため（その理由は聞いても答えてくれなかったが）、早く図書館へと向かいたいのであった。

（そういえばジョーの奴、私が遅くなるかも、って言ったら妙に嬉しそうだったわね……。小さい声で『好都合だ』ともつぶやいてたような）

「ねー結子、聞いているの？」

「え、何？」

いつの間にやら話題が変わっていたらしい。

「結子って、バスケット部の栄君と仲いいの？」

「別に仲がいいってわけじゃないけど。中学が同じだっただけ」

「もしよかったらさあ、今度紹介してくれない？ あたし、あの人狙ってるんだ」

「いやだから、そんなに仲良くないってば……」

「合コンやろうよー！ 今度の週末にでもさあ」

この手の話題は特に苦手だった。小学校からソフトボール一筋に生きてきた結子は、恋愛というものにひどく疎い。

（でも、そのソフトもやめちゃったし、最近は仕事もないし、たまにはイイかも）

そう考えた時だった。得体の知れない嫌な予感に襲われたのは。

（？　なんか、今、ゾクッって来た……）

「結子、結局どうなのよ」

「あ……えっと、イイんじゃない？　また連絡してよ。それじゃ、私はこれで」

「うん。バイバイ！」

結子はすぐに集団から抜け出し、路地裏に入り込む。そして友達の視界から隠れると同時に、全力で走りだした。

（背筋に寒気がする。あんまり長くここに居たくない！ 早く図書館に行かなきゃ！）

その後を、一人と一匹は音を立てずに追跡した。

「結子のやつ、えらい遅いなあ」

「今日は友達と遊ぶから遅くなるって、平崎さんが丈二君に言っていたみたいですよ」

直人は何度も時計を確認する。光助にバレてしまった以上、結子が来たらその場でデートに誘わざるをえなくなる。来て欲しくないような、でも会いたいような、複雑な心境だった。

「困んなあ。坊主が顔を真っ赤にして慌てふためくところを早う見たいのに」

「……僕、もう帰ってもいいですか？」

「いやいや、スマンスマン」

光助は口では謝っているが、顔は意地悪なままだ。

「それはともかくだ。坊主、いつそんなこつ迎えん行ったらどうや？」

「迎えに？」

「そ。おりゃがおつとくどつともやりにきいやる（俺が居ると口説くのもやりにくいだろう）。ジョーも来ん内ん、迎えん行つて外で話付けてきいや」

光助はそれだけ言って、直人の返事も待たずに机に伏せて眠り込んでしまった。こうされると気の弱い直人は従うしかない。

「わかりました……。それじゃ、いってきます」

どっちにしろ、これ以上光助と二人でいるのは疲れる。そう判断して直人は部屋を出て行った。

「でも、平崎さんって今どこにいるんだろう」

とりあえず図書館の外へ出たはいいが、どこへ行けばいいのか見当もつかない。ひとまず大通りへ出ることにした。

そして程なくして結子を発見できた。

「いた！ でも、なんか逃げてる……？」

結子は人ごみの中を縫うようにして足早に移動していた。

（やっぱり、人気のないところはマズい！ この間、あのデカイ犬は私が一人になった途端に襲ってきた。アイツをけしかけた刻同とかいうヤツも、無関係の人間を巻き込むのは避けたいはず……！）

ほとんど直感で、結子は自分を追跡しているものの正体を察知していたのだ。この間の犬とは異なるが、獣の気配を感じ取っていた。

「クソッ、あの女、俺たちに気付きやがったのか！？ さっき一瞬チャンスだと思ったら、すぐにまた人ごみに紛れやがって！」

「ワン！」

俊は逆に隠れながら移動している。結子に顔が割れているからだ。

「そろそろ図書館だ。あの周りは人の通りが少ないから、そこまで行けば再びチャンスがあるだろうぜ。それを待つしかねえ」

しかし、結子は更に俊の予想を裏切った。

「平崎さん、どこに行こうとしてるんだろう」

結子は図書館へは向かわず、大通りを人の多い方向へ進み続けた。

（このままじゃ、図書館には行けそうにない。後ろをつけてくる気配が消えるまで逃げる！ そして……）

歩きながら左手にボールを構え、右手で携帯電話を取り出して操作し始めた。

（ジョーたちに連絡しておいた方がいいわね。今日はボールがあるとはいえ、一人で闘うのは危険）

「あっアイツ……仲間を呼ぶつもりだ！ メンドくせーぞ、ちくしょう！」

「な、なんかよくわからないけど、平崎さん、なにかヤバイっぽい……？ 助けに行った方がいいのかな」

俊は物影に潜み、直人は人ごみに巻き込まれながら、それぞれ結子を追って行く。この時点ではどちらもお互いの存在に気付いていなかった。

第三十三話・ありふれたきっかけ

中学時代、直人はいたって「普通」の少年だった。成績や運動能力は平均よりもやや落ちる程度だったが、それなりの人数の友達を持ち、充実していたとは言えないが絶望もない、静かな生活を送っていた。

『ナオって、好きな女子とかいんの？』

中学一年のある日、友達の一人がそんな話を振ってきた。思春期らしい、ごくありふれた質問だった。

『一応いるけど教えない』

直人はいつもそう答えていた。しかし、本当の答えは「いない」である。ただ、そう正直に答えると「普通」でなくなるような気がして、言えなかった。

『えー、誰？　もしかして波原？　三組の安部とか？』

『タメとは限らねーよ。もしかしたら先輩だったりして』

友人たちが口々に勝手な候補者の名前を挙げる。それも通過儀礼の一つに過ぎなかった。

「中学一年」という時期は人生の中で最も大人へなりたがる時期である。六年間もの小学生時代を終え、真新しい制服に身を包むことで急速に自分の成長を実感し、様々な可能性が増えることを喜ぶ。そして、恋人をつくろうという欲求もより強くなる。

『そういや、安部って誰かと付き合ってるらしいぞ』

『マジッ!? もしかしてナオ?』

『ち、違うよ』

そんな会話もあちこちで聞こえてくる。しかし、直人の心には、まだ誰かと恋仲になりたい、という思いは湧いていなかった。無論、異性に全く関心がなかったわけではない。自分が「彼氏」となって女性と接することをイメージ出来なかったのだ。

（僕もいつか、恋愛するようになるのかなあ……）

時々はそう思う事もあったが、中学という新しい環境に慣れるのに精一杯な毎日だった。

しかし、ある日の体育の授業で直人は唐突に思い知らされた。恋愛はするものではなく「落ちる」ものなのだと。

『積里君、頑張ろうね』

ソフトボールの授業で同じチームになった平崎結子。容姿的に「かわいいな」とは思っていたが、この時点ではまだそれだけの感情だった。

『セカンド行ったぞー!』

直人が守備しているポジションへ強力なゴロが飛んでくる。直人は懸命にボールを追うが、捕球に失敗して後逸してしまった。

（しまった！）

『エラーだ！ 逆転された！』

同じチームの誰かが叫び、その責めるような口調に直人は肩を落とした。元々運動は苦手な方だが、自分のエラーで逆転されてしまったのはショックが大きい。

『大丈夫、大丈夫だって、積里君。今打ったバッターって野球部だし、しょうがないよ』

マウンドに立っていた結子がそう言いながら直人に近付いてくる。

『私も出来るだけ打たれないように頑張るからさ、積里君も失敗は気にしないで。苦手でもなんでもとにかく頑張っちゃおうよ！』

『あ……う、うん』

結子は笑って、肩に手を置いた。肩に伝わる手の暖かさ、すぐ近くで感じる息遣い、そして失敗した自分を責めない、エネルギーに満ちた笑顔。それらが一瞬にして直人少年を魅了した。

（平崎さん……）

ドラマティックとは言い難いごく普通の出来事だが、これがきっかけとなって直人の恋は始まったのだ。

『ナオって、好きな人いる？』

そう聞かれての答えは以前と同じだったが、そのニュアンスはわずかに違っていた。時が経つほどにその心は結子に傾いていった。

（いつか、チャンスがあれば平崎さんと……）

しかし、奥手な性格が災いし、その想いは伝えられなかった。クラスメートという関係のままで中学時代は流れ、あっという間に卒業を迎えたが、まだチャンスは終わっていない。高校になって二人の距離は急激に縮まっていた。

「平崎さん！」

「えっ、積里君？」

携帯の通話ボタンを押しかけた結子に直人は追いついた。

「どうしたの？ 何か、逃げてるみたいだけど……」

「そうなのよ。なんとなくだけど、ヤバい気配がするの」

そう言って結子は背後を振り返る。直人もそれにならうが、追跡者の存在は確認できなかった。

「ヤバいって、この前の犬みたいなの？」

「ズバリかも。今ジョーに連絡しようとしてたところなんだけど」
話し合いながらも足は止まらない。

「丈二君……そういえば」

「どうしたの？」

「さっき一緒に図書館に行ってたんだけど、途中で女の人を道案内するからって別れたんだ」

「女の人？」

「その道案内していった住所ってのが、確かこの近くだったような……」

一瞬だけ視界に入ったメモの記憶を引き出す。引っ越して来たばかりで何度も町の地図を見ていたことが幸いした。

「どっち？」

「たしか、向こう側だったと思う！」

珍しく直人が前に立ち、二人は丈二のもとへと向かっていく。その後を、音もなく俊とハツが追跡していく。

「おいおいおい、あのチビが合流しやがったぞ。しかも全然人気のないところに行きそうにねえしよお」

さらにここに来て、俊にはミスがあった。丈二たちを誘導していく場所がどこなのか、みどりに聞いていなかったことだ。

第三十四話・逃亡劇から再会へ

直人の案内を頼りに、二人は丈二のいるであろう場所へと向かっていく。その後を追う俊は、攻撃の機会が訪れないことでますます怒りが募ってきていた。

「……ヤロウ、なんで俺たちに気付きやがったんだ？ カンが鋭いのかっ！？ あんなに警戒されちまったらこれから復讐のチャンスなんて来ねえぞッ！」

顔中に焦りの色を浮かべるが、状況は好転しそうにない。

「しかもアイツら、よく見るとどこかに向かつてる行ってるぞ。闇雲に人の多いところを歩いているだけじゃねえ！ あれは目的を持った歩き方だっ！」

そうなるとますます都合が悪い。どこに、なんの目的で行くのかはわからないが、間違はなく自分に不利なことになるだろう、ということは想像できる。

「ちくしょう、どうすりゃあ……」

前に行く二人が角を曲がった。俊がその角に追いついた時――。

「お、おお！ イケそう！」

先ほどの大通りより、人の数が少なくなっていた。直人達の他にも数人の人間がいるにはいるが、みな何かしらの用事のために足早に急いでいる者が多く、多少の騒ぎになっても大丈夫だろう、と俊

は判断した。

「もうガマンの限界だ。ハッ！」

「ワン！」

「いいか？ 一般人にゃあ迷惑かけるなよお……。一般人巻き込んだのバレたら、後であざー先輩に怒られるからなあ」

「ワウ」

「ただし、あのチビは例外だぜ。アイツはもう敵の偏才どもの味方だしな。チビと平崎結子……。この二人に素早くかみつけ！ 特に足をだ」

そう言い聞かせながら、犬の頭をなでる。

「最初に足を攻撃すれば、敵は動けなくなる上に立ち上がれないことで恐怖心に駆られる。奇襲して一撃を決めれば勝ったも同然。あとはやりたい放題だ」

「ワン！」

一声吠えると同時にハツは飛び出した。長い四足がアスファルトの道路を蹴り、細くしなやかな体を弾丸のように力強く飛ばしていく。

「ガウアッ！」

叫び声をあげると同時に牙をむき出し、背中を向けて歩いている

結子の脚へとかみつく。……つもりだったが、一瞬ターゲットは回避していた。

「やっぱり、犬がついて来てたのね」

「この犬、この前のヤツとは違うよ!」

結子はボールを構え、ハツに向き合う。周囲の人間は少しの間だけ二人と一匹に視線を送っていたが、各々の都合のために急いで通り過ぎて行った。そしてしばらくの間、結子と直人、それに俊とハツだけを残して人通りが途絶えた。

「ガウ……」

ハツは攻撃が失敗したことに驚き、体勢を立て直して低いうなり声をあげる。

「作戦その二、成功ね」

結子が微笑みながら言い放った。

「このまま丈二君のところに行くってのもいいんだけど、その前にチャンスがあれば反撃しようって……」

「最初からすぐに一人になったとしても相手はすぐには仕掛けてこない。いつ、どんなタイミングで攻撃してくるかわからないから、こっちも反撃がしづらかった。でも……わざと人ごみの中に紛れて長引かせれば相手は痺れを切らしてくるはず」

結子が勝ち誇った表情になると、直人も自信あり気に口を開いた。

「出来るだけ長く引っ張れば、チャンスが来たと同時に攻撃してく
ると思ったんだ。タイミングさえわかっていれば反撃はしやすい。
……もつとも、相手が慎重なタイプだったら上手くいかなかっただ
ろうけど……」

「悪かったな。短気で慎重さが足りないバカでよお！」

植木の陰から俊が姿を現した。こめかみに青筋を立て、歯をギシ
ギシと言わせている。

「あらあら、やっぱりアンタだったの」

予想が当たってホッとしている。

「獣臭い匂いで尾行してくる奴なんて、アンタぐらいしか思いつか
なかったわ」

「……みどりちゃんといい、お前といい、最近の女子高生は目上に
対する礼儀ってもんがなってねえな」

「みどり？」

一瞬、結子の目が大きく開かれた。

「もう構わねえ！ ハツ、やっちまえ！」

「グウアアアア！」

しかし、吠え声をあげただけでハツは攻撃に移れなかった。結子

がボールを投げつけたからである。

「ギャウ！」

「ちゃんとしたボールなら、相手が素早くても当てられるのよ！」

「行こう、平崎さん！」

直人の掛け声で、二人は一斉に背を向けて走り出した。

「あっ！？　ここで勝負するんじゃないかったのか！？」

「一人より二人。二人より三人でしょ！」

俊とハツも後を追うが、結子がもう一つの野球ボールを手に持っているために近付きにくい。しかも、敵は二人だ。

そして、直人達は目的の場所へ辿り着いた。

「ジョー！」

「あれ？　お前ら何やって……」

丈二と和仁、そしてみどりが住宅地の道路上に立っていた。

「かず君もいるし、四人もいれば大丈夫だね！」

「え？　なんの話だよ、ナオ……」

直人は結子の方を向いて安心した声をかける。しかし、結子が見

ていたのは、丈二でも和仁でも、直人の方でもなかった。背後に迫ってくる俊でもない。

「みどり……」

「ゆい、こ……?」

中学時代にバッテリーを組んでいた明石みどりに視線を向けたまま、硬直していた。

第三十五話・埋まらなかった溝

油断したつもりはなかった。最後まで、全力で勝負していたはずだった。それなのに……人の心は、無意識のうちに気が緩んでしまうのであった。

『ストライクッ！』

最終回、ツーアウト。最後のバッターをツーストライクにまで追い込んだ。

『OK！ 大丈夫！』

明石みどりはボールを投げ返しながら、マウンド上の親友を励ます。

『ラスト一球、キッチリ決めよう！』

『わかった。みどり』

炎天下の中を一人で投げ続け、結子の体は疲労している。しかし、みどりの励ましが闘争心をかき立てていた。

三年生が引退し、正式なレギュラーとして最初の公式試合である。「絶対に勝つ」と監督やチームメートに宣言してようやくこぎつけたレギュラーの座。ここで負けてしまつては全ての信頼を失ってしまう。

（大丈夫。このバッターの苦手なポイントは把握している。外角の

低め。そこに投げさせれば勝てる！)

指先でサインを送る。そのサインを見て、結子は力強くうなずいた。

(……少し球威が落ちてきてるけど、この一球を決めれば勝利。結子ならきつとやってくれる)

結子の上半体が低く沈んだ。長い腕を振るい、勝負を分ける最後の一球が放たれた。

(よしっ！ 相変わらず抜群のコントロール、そしてこの球速なら大丈夫！)

渾身のストレートをしっかりと受け止めるべく、みどりはミットを構える手に力を込める。しかし、その手にボールは飛び込んでこなかった。

カアアアアン……。そんな音が、どこか遠くで鳴り響いたような気がした。

『……え?』

一瞬、完全に反応が遅れた。フルスイングされたバットがボールをはじき返したことに気付かなかった。

『——り！ みどり！ バックホームッ!』

焦った声が聞こえて我に返った時には、すでにランナーが目の前に迫ってきていた。

『はっ！』

野手から帰ってきたボールを受け取り、ランナーにタッチをしようとする。しかし、全ては遅かった。

『ホームイン！』

相手側のベンチが大歓声をあげる。よく見ると、ホームを走り抜けたランナーは一人ではなく、二人いた。

（最終回で一点差、そしてホームインが二人……？）

それらが示す結果を、みどりは認めたくなかった。完全に勝利を手にしたと思っていた。だが、現実はやつくりとみどりの心に侵食していった。

（逆転された……？ 私、リードミス？）

『みどり』

気がつくと目の前に結子が立っていた。いつもの快活な笑顔が消え、今にも泣きそうな顔だった。

『ごめん。私、打たれちゃった……』

（……うるさい）

みどりは何も聞きたくなかった。

（どうして打たれたの？ 私のリードが間違っていたの？ 結子の球が甘かったの？）

つい一瞬前の状況を必死に思い出しながら、どうにか整理をつけようとする。しかし、考えれば考えるほど混乱は広がった。

（私の配球リードと、結子のコントロールがあれば勝てる。勝てるって、ずっと信じてきたのに……。結子となら、絶対に勝つって宣言して……）

『みどり……』

『うるさいっ！』

試合後の整列も忘れて、みどりは涙をぶちまけた。

『ごめんって、何で謝るの！？ 結子はただリードに従っただけじゃないっ！』

チームメイト達が何事かと集まってくるが、涙は止まらない。

『勝てるはずだったのに、勝ったと確信したのに！ アンタと、アンタと一緒に……絶対に勝てると思ったのに……』

最終回での逆転負け。優秀なキャッチャーとして通っていたみどりにとって、屈辱とも言える敗北だった。必勝を確信していただけに、崩壊は早かった。

『こんな……こんなって、アンタに会わなかったら……』

そして、みどりは言ってしまった。これまでの青春、全てを否定する言葉を。

『アンタなんか会わなければよかったッ!』

そして翌日から、結子とみどりは練習に来なくなった。試合の負け自体よりも、友情と信頼の断絶が原因であることは誰の目にも明らかだった。

監督やチームメート達は決して二人を責めなかった。敗北の原因があるのは二人だけではないと、誰もが自覚していた。しかし、二人の深い心の傷に触れることは敬遠せざるをえなかった。二人が自分たちで解決するしかないと見守ることに決めたのだ。

だが、溝は埋まらないまま、つらい思い出から逃げるようにみどりは転校して行った。

「みどり……」

「……ああ、そうだった」

今、みどりは結子を見ていない。その冷めた視線は和仁に向けられていた。

「思い出した。あなた、バスケット部のキャプテンだったわね」

「えっ俺?」

和仁の方はみどりのことを知らなかった。声をかけられて、ようやくどこかで見た顔だと思いだしたぐらいだ。直人も同じだ。

「エースピッチャーの結子は有名だったけど、私はそうでもなかったからね」

「おいおい、どうなってんだ？」

状況を飲み込めない丈二が間の抜けた声をあげる。その背後に、音もなくハツが忍び寄っていた。

第三十六話・包囲陣

「アンタ、俊とか言ったわよね」

結子は視線をみどりから外し、俊に向ける。

「何が目的なの？ この間から二回も襲ってきたりして、何が狙いなのよ」

「それを聞いてどうすんだ」

「その理由次第で、こっちも態度を変えるしかないでしょ。これ以上付きまとわれたくないし」

「……フン」

俊の目つきが変わっていた。怒りに震える目でもなく、焦りで動揺する目でもない。どんな障害があらうと目的を果たそうとする、覚悟を決めた目だ。

「今から二週間ほど前、俺はハクを町に放した」

その言葉は結子に向けられていない。独り言のようにつぶやいている。

「ちょっとしたテストだったんだ。ハクが前の飼い主のことなんか忘れて、野生の獰猛さを取り戻せたかどうか、のな。そのためにわざと解放した」

両手を胸の高さに上げ、じっと見つめる。

「俺がこの手で、キッチリ調教してやったからな。飼い主の所に戻るはずがない。事実、ハクは飼い主のところには行かず、町中の色んなところを歩き回るだけだった。だから俺は安心してハクが俺の元に帰ってくるのを待った。そうしたら、ハクがおびえたような顔をして戻って来たんだ」

「ハクって、あのデカイ犬のこと？」

その問いに、俊は答えない。

「せっかく凶暴な性格にしてやったのに、どこかの誰かに何かをされて、ヒドく怯えちゃった。そして数日後にお前らに会ったとき、ハクの態度からすぐにわかった。犯人はお前らだ、ってな」

「犯人って……。先に襲ってきたのはアンタの犬じゃない」

「それでいいんだよ。この世界は弱肉強食だ！」

まるで演説でもするかのように、俊は大きく両手を広げて声を張り上げる。

「人間は、自分がこの世で一番優れた生物だと思い込んでやがるが、そんなのは違う！ 生物としての勝負なら、人間はかなり貧弱な部類に入るっ！」

（な、何なの、コイツ……）

結子の背筋に冷たいものが走る。それが恐怖だと、結子は認めた

くなかった。

「犬は人間よりも遙かに強い！ 犬が人間を支配することに何も問題は無いんだ！ そして、その犬達は俺に育てられ、俺の言うことに服従する」

（コイツ……マジに、狂ってる）

恐怖に侵略されないよう、唇をかみしめて心の平静を保つ。そうすることで、結子は気がついた。俊の隣に、先ほどの犬がいないことに。

丈二が背後の気配に気付いたとき、ハツはすでに口を開けていた。

「グアアアアッ！」

「ジョー！」

丈二はとっさに手持ちのカバンで牙を防ぐ。間一髪、それは成功した。

「ガアッ！」

ハツは一旦着地し、態勢を立て直そうとする。しかし、体勢は逆に崩された。

「ギャウウ！」

顔面、目の近くに白球が直撃していた。

「大丈夫、ジョー」

「ああ……」

「ひ、平崎さん！ この犬、まだ闘うつもりだよ！」

一歩間違えば失明の恐れのある攻撃を受けても、ハツの闘志は微塵も薄れなかった。足をしっかりと踏ん張って低く唸り声をあげている。

「やめるわけねえだろ」

俊がゆっくりと近づいてくる。

「相手の数が多かろうが構いやしねえ。絶対に勝つんだよ、俺達は。訓練を受けた犬が人間に負けるわけがねえんだ」

「……絶対に勝つ、なんて言わない方がいい」

みどりが言葉を割り込ませて来る。いつの間にか、みどりは丈二たちから距離を置き、俊とみどりで結子達を挟むように立っていた。

「そんな言葉、軽々しく使っちゃダメ」

「ああ？ 細かいことにうるせえな」

俊が不機嫌に言い返す。しかし、みどりの鋭い視線を受けて押し黙った。

「そんなに勝ちたいんなら……その小さいのを狙うのよ」

みどりの白く細い指先が、真っすぐに直人を指さす。

「えっ僕……!?!」

「そいつは偏才じゃないんでしょ？ それに、そっちの……」

今度は和仁を指さす。

「……もう一人は、バスケの天才だって呼ばれてたしね。運動神経はかなりいいでしょ。結局、こいつらの今一番弱点となっているのがあのチビよ」

「おい、結子！ 何でこんな事になってんのかわからねーが……あの金髪男とこっちの女の子は、俺たちに危害を加えるのが目的なんだろう!? 反撃していいんだな」

丈二が臨戦態勢を取って緊迫した声をあげる。

「うん。少なくとも、大人しくやられるわけにはいかない」

「おいおい、俺は無関係だろ!?!」

和仁が勘弁してくれ、とばかりに悲鳴をあげる。

「犬が恐いなら逃げろよ」

丈二がつぶやいた。

「あ？ 恐いわけじゃねーよ！ 関係ねえのに巻き込まれるのが…」

「ビビった言い訳にしか聞こえねえな」

「アンタ達、ケンカしてる場合じゃないっての！」

結子の手元に残されたボールはあと一球しかない。しかも敵は犬一匹だけでなく、元・親友のみどりまでいるのだ。みどりがどのような偏才を持っているのかわからないが（状況から見て、おそらくみどりも何かしらの偏才を持っているのだろう）、自分たちに敵意を見せているのは確かだ。

（みどり……どうして、どうしてアンタが私たちを攻撃するの……？ 私、私は……）

苦い思い出がよみがえってくる。それらを振り払うように強く目を閉じ、やがて覚悟を決めて見開いた。

「やるしかない！」

第三十七話・奪われた情報

「何をしてるの？ ハツ。積里直人を攻撃しなさいって言ってるの。相手の数が多い時は一番楽な奴から仕留めるべきでしょう」

みどりが平淡に言い放つ。しかし、ハツは構えの姿勢から動かない。

「ダメだって、みどりちゃん。ハツは俺の言うことしか聞かねえよ」

「じゃあ、私の言うことを聞くようにして」

「はあ？ それじゃあ俺の存在意義が……」

「うるさい」

この一言で俊は黙り込んだ。なぜか、俊はみどりに弱いようだ。

「……わあったよ。ハツッ！」

「ガルアアアウ！」

一直線に、直人を目掛けて飛びかかる。それにいち早く反応したのは、反射神経に優れた和仁だった。

「ッこのおー！」

「かず君！」

肩にかけていたバッグを振り回して反撃する。教科書の詰まった重いカバンが弧を描くが、犬の反応速度はもっと早い。バッグが空を割って振り下ろされるよりも前にハツの滑らかな肉体は和仁の足元をくぐりぬけていた。

「くそッ」

「積里君ッ！」

白球を持つ結子の腕が高く振り上げられ、すぐ近くにまで迫ったハツに対して振り下ろす。

ハツはボールを回避するために、結子の手からボールが放たれる前にジャンプしようとした。それが結子の狙いだと知らずに。

「ストップ！」

「ッ!？」

みどりの声がそれを止めた。ジャンプしようとして瞬体を沈めたハツはそのまま急ブレーキをかけるように停止し、視線を結子に向けた。

「くっ……バレた!？」

結子はボールを投げるつもりはなかった。正確には、投げるフリをしてジャンプを誘い、宙に浮いて身動きの取れない瞬間を狙う策だったのだ。

みどりはそれを見抜き、命令を出した。

「狙いは積里直人。それは依然変わらない。でもその前に結子の右腕を」

(……みどり！)

「ガァァ！」

限界まで開かれた口からヨダレを垂れ流しつつ、ハツの牙が結子の腕を襲う。丁度、この間の闘いで傷をつけられたあたりだ。

「うッ……」

「この！」

直人と和仁が同時に犬へ体当たりをし、寸前で止める。わずかに前足のツメが直人の胸をかすめ、制服の表面を裂いた。

「ッ痛……！」

「いて、いってえええー！」

叫んだのは直人ではない。俊だった。

「いってえなああ、てめえ、ジョージつつったな！」

丈二は犬の突進と同時に俊の元へと走り、反撃に転じていた。その右手には一枚のトランプ・カード――血のついたスピードのエースがあった。

「この野郎！ キザなマネしやがって！」

「ナイフを持ち歩く趣味はねえからな。代用だ」

俊の左手の甲に赤い筋が走り、ゆっくりと血が流れ出して来る。

「先に手を出してきたのはそっちだからな。加減しねえぞっ!」

「やかましい!」

「俊、撤退しなさい」

「あ?」

みどりは一步もその場を動かず、声だけを張り上げる。

「目的は果たした」

いつの間にか、ハツの口になにかが咥えられていた。黒い、金属製の物体だ。

「僕の携帯!？」

直人のポケットから携帯電話が消えていた。今の体当たりの際に奪い取ったようだ。そしてハツは「戦利品」を咥えたまま、みどりの方へ走って行く。

「待ちなさいよッ!」

結子が最後の一球を放った。全力を込めたストレートだ。

バシッ。と音を立てて、ボールはみどりのへそのあたりで止まった。

「みどり……」

「相変わらず、緩い球ね」

制服の下に手を入れてボールをキャッチしていた。布で衝撃をやりわらげているとはいえ、硬球を受けた手はビリビリとしびれている。みどりは手のしびれを必死に隠しながら背を向ける。

「行くよ、俊」

「みどり！」

結子は親友の背中に声をかけるが、無駄に終わる。みどりはそのままハツを連れて去ってしまった。その態度が、結子の足を止める。

「しょうがねえ〜なあ〜。ま、あざー先輩からのお使いは片付いたし、いっか」

俊は右手でポリポリと頭をかき、左手からにじみ出る血をペロリとなめた。その口元には笑みさえ浮かべている。

「こんな傷なんかつけてくれちゃって……。どうしてくれんだあ？
じょ・お・じくうん。平崎結子もだけど、アンタも俺の報復リスト決定だかんね」

「お、おい！」

「追ってくんなく。そろそろこの辺にも人が来るからよ」

そう言い捨てて俊も去って行った。言葉通り、徐々に人の通行が多くなってきていた。直人、結子、丈二、和仁の四人は深追い出来ず、立ち尽くすばかりであった。

「積里君、大丈夫？」

「あ……うん」

服は破れたが、体に傷はついていない。しかし、問題は他にある。

「アイツら、直人の携帯を奪ってなにをするつもりだ？」

「わからない……」

「一旦、光助と合流した方が良さそうね。図書館に戻りましょう」

「俺も一緒に行くぞ！」

和仁が怒った声をあげる。

「イキナリ訳わかんねえ出来事に巻き込まれたんだ。無関係じゃ済まされないからな」

「そっちが勝手に来たんだろ」

またもケンカが起こりそうになったのをどうにかなだめ、一同は図書館へと戻って行った。

第三十八話・暴かれる過去

「ほう、そげなこつがねえ」

図書館の秘密部屋。結子たちから報告を受けた光助はそう言っ
て考え込んだ。その膝の上ではケリーがうたたねをしている。

「ちいっと整理してみつかね。その俊とかいう男ん目的は結子へん
報復。それとは別に『あざー先輩』なる人物から命令されていたこ
とが、坊主ん携帯を奪うこつ、け」

「その後半の方がわからないのよね。積里君って、みどりと知り合
いだった？」

「ううん。特には……」

結子の方しか見ていなかったから、とは言えない直人であった。

「それでも同じ中学だったんだろ？」

丈二が口を挟んでくる。

「もしかしてさ、そのみどりって子が直人に興味あるとか、かもな」

「ええっ!？」

「先輩からの命令つつってただろうが。物忘れの激しい奴だな」

和仁も余計な言葉を付け足す。

「ふうむ……こりゃ推測やけんな。坊主っちゅうより、おりゃらんメンバーなら誰でん良かったっちゃねえと？　そこん、ハンサム君は除いてな」

光助は和仁を指さして言った。

「ハンサム君って……わかってらっしゃる」

「光助の言葉は大抵皮肉か嫌味なんだよ。そのまんまに受け取るな」

「いい加減にしなさい。で、光助。それってどういうこと？」

少しでもチャンスがあれば相手をけなそうとする二人をなだめ、結子は聞き返した。このメンバーの中では光助が最も頼りになる。

「携帯を奪う理由と言ったら、まず真っ先に考えられるのは……情報を得るため、だろう。持主の個人情報しかり、登録されちよるアドレスや電話番号しかり、あれ一台だけで相当の情報が詰まっちゃろ？」

「それもそうね」

「僕の個人情報なんか見たってどうしようもないから……目的は、登録されてる番号？」

段々話がつながってきた。それでも結論を急がず、一つ一つ、ゆつくりと可能性を探って行く。

「他にも犯罪に利用するっちゅうのもあっけん、それならわざわざ

おりやらにケンカ売らんでも、誰のでも構わんやろ。こげなのさん（面倒な）こつすつとこを見つと、誰かん情報を求めちよつてことで間違いなかるう」

「それじゃあ、誰の情報が欲しいのよ」

「相手ん行動かい察するに……おりややジョーや結子んこつはある程度知られちようだな。そうなると消去法で、アレに決まるな」

和仁を除いた全員が、同じ答えに辿り着いていた。この組織と関係があり、おそらく相手がまだ知らない——いや、直人の携帯を奪うまでは知らなかった人物。

「ボス……さんの電話番号？」

直人が緊張した声をあげる。確かに、直人は「ボス」と連絡を取るために番号を登録していた。もっともまだ使用したことはないが。

「ま、番号自体はポスターで公表されちよつけんな。あのポスターの主がウチンボスやちゅうこつは誰も知らんだらう」

「最初っからボスの電話番号を得るのが目的だったってことか!？」

「そんな可能性が高い。そもそもボスん存在自体がどうして知れたんかはわからんが……。おりやら偏才の集まる組織があつことがバレてしまえば、そんな指導者がおるちゅうこつも簡単に推理できるやろ」

「それでもまだ疑問は残るわよ」

結子があごに手の甲を当て、考えながら恐る恐る意見を述べる。

「ボスの電話番号を知って、それからどうするつもり？　ボスの本名や住所は私たちすら知らないのよ」

「番号さえわかりゃ、その辺はすぐに調べられっじやろう。わずか数日でありゃらんこつを調べ上げたような奴らしいかいな、敵は」

「でも……ボスと何を話すつもりなの？　私達がやったことで文句でも言うつもり？」

「落ち着けよ、結子。光助に問い詰めたところで敵の全てはわからねえぞ」

珍しく丈二が結子をなだめるものの、結子の心の中は激しく渦巻いていた。二年前につらい別れ方をした親友・みどりが何をしたいのか、結子は早く知りたいのだ。

「……おそらく、相手は……ボスの関係者やろ」

光助がボソッとつぶやいた。それを聞き逃したものはいない。

「なに？　光助」

「いや、その前に、話さなきゃならんこつがあったなあ」

「おいおい、何をだよ」

「にゃふ……」

膝の上で眠っていたケリーが目を覚まし、机の上に飛び乗った。

「おりゃあ、ボスと会^おうたこつがある。電話やねして、直接な」

「え？」

誰にとっても、意外な言葉だった。和仁さえも、「ボス」の正体は秘密だと聞かされていた。

「ボスに会ったあ!？」

「っちゅーよか、こん組織はおりゃとボスが一緒に計画して立ち上げたもんじゃ」

ポツリ、ポツリと、光助は語りだした。「ボス」の正体と、自分の過去を。

トゥルルル……トゥルルル……。鉄の部屋に、電話のコール音が鳴り響く。

「はい」

「ボス」は腕を伸ばして受話器を取る。しかし、電話の相手はすぐには声を出さなかった。

「もしもし?」

『……フフ』

低い笑い声が聞こえてくる。

「もしもし? どうしました?」

『……間違いない。この声だ。やっと見つけたよ、
風三かざみ元彦もとひこ』

第三十九話・風三 元彦

風三元彦は、広い座敷の中央に座っていた。無論、座布団の上に正座である。

『どうだ？ 元彦』

父が後ろから声をかけてくる。父の隣には、いかにも堅物そうな顔つきの男たちが並んで座っている。逆に元彦の正面には、こちらを向いて土下座している中年の男がいた。

『本当に、申し訳ございませんでした』

男は蚊の鳴くような声を出し、畳の上に頭をこすりつける。昨日、民間人を脅して金を巻き上げていたことをわびているのだ。

『病気の母に入院費用をと思い、つい気が焦り……』

『どうなのだ。元彦』

父の声が男の言葉を遮る。元彦は男の震える肩を見ながら、ポツリとつぶやく。

『……残念です』

『残念？ どういうことだ』

それには答えず、元彦は座布団から立ちあがった。

『どういふことだと聞いているのだ。ハッキリと明言しなさい』

『……残念ですが、その者の言葉には真実の色も、反省の色もございません』

『ひいっ!』

と、男が小さく悲鳴をあげた。父の隣にいた者たちが立ち上がり、男を取り囲んでいく。

『先に失礼します』

元彦は自分で障子を開け、逃げるようにその場を去って行く。

数分ほど別室で読書をしていると、二人の男が入ってきた。

『お前の言うとおりでたぞ。元彦。あのウソつきはしかと処分した。無論、金も被害者の元に返させておいたぞ』

『しかし、最近は任侠の世界にもただのチンピラあがりが多いものですな』

父と、その右腕とも呼ばれている「いぶし銀」の男――九断である。

『元彦君も、ああいう手合いには厳しく接してもらわないとね』

『はい』

『そうそう、九断。お前のところの息子もそろそろ高校生じゃない

か』

『ええ、早いもので。光助にも、高校卒業後にはウチの組員になってもらいます』

九断光助という人物に元彦はまだ会った事はないが、その名は度々聞かされていた。

『元彦よ。お前や九断の息子といった若い人材が、これからの組織には必要となる。お前の方が三つ年上なのだから、決して遅れを取るなよ』

『はい』

そうは言ったものの、元彦はこの世界が好きではなかった。義理と人情。聞こえはいいが、実際にその裏で動いているのは人間の欲と都合である。そして何より、自分が「裁き手」となるのが嫌だった。

『それにしても、元彦君は本当に素晴らしい才能を持っているね』

九断が微笑む。

『わずかな言葉の震え、強弱、間の取り方。そう言ったものから相手の心の奥を見透かすことが出来るなんてね』

『完全に読心が出来るわけじゃないですよ。感情や、せいぜい嘘を言っているかどうかを見抜く程度です』

『それでも充分にスゴイと思うがね』

『しかし、それだけではいかんだ』

父が声を大きくする。

『将来、組の未来を背負うものとしては、見抜くだけでは足りぬ。人の上に立ち、それらを扱っていくには器量が必要となる。そのためにお前はもっと器を磨かねばならん』

『ええ、わかっています』

その日はこれで解放された。

(……本当に、このままでいいのか?)

高校を卒業したばかりで、まだ組の一員になったという実感はない。元クラスメート達は進学したり一般企業に就職したりしているのに、自分はこんな裏稼業に身を置いている。そんな現実を認められなかった。しかし、自分の胸ポケットに入っているバッジは、紛れもなく鳴峰組の証である。

(もっと他に、自分に出来ることはあるんじゃないか?)

そんな考えを口に出すことはできない。一度組のものになってしまったからには、簡単に抜けることなど出来ないのだ。

自分の現状を嘆きつつ、町中をあてもなく歩き回る。ふと気がつく、その足は図書館に向かっていた。

『そうだ、借りていた本を返さないとな』

自然に独り言がこぼれる。すると……。

『にゃあ』

(……?)

合いの手を入れるかのように、足元から猫の鳴き声がした。見ると、真っ白なノラ猫が草むらからこちらを見ていた。

『にゃむ』

『あ、ああ……』

とりあえず返事を返してしまった。

『おおい、ケリー、どこいったと?』

遠くから若い男の声が近づいてくる。

『にゃっ!』

猫は草むらから飛びだし、素早く元彦の胸ポケットから組のバッジを奪った。

『あ、おい!』

猫はそのまま男の方へと走って行く。

『それを失くすとマズイんだ! 返せ!』

元彦も走って後を追う。

『お？　なんで親父ん組のバッジがここんあつとけ？』

元彦よりも若干年下の、それなのに妙に年寄りくさい話し方をする少年は猫からバッジを受け取り、首をかしげた。

『ケリー、この辺に鳴峰の人間がおったとけ？』

『にゃ』

『鳴峰……？　君、鳴峰組のこと知ってるのか？』

これが、後の「ボス」と光助の出会いだった。

第四十話・逆恨みの凶刃

『ここん館長と知り合いでね』

光助は図書館の廊下を歩きながら、後ろにいる元彦に説明する。

『館内を改装したら一つ部屋が余ったうちゅうかい、空き部屋を借りて出入りできるように話つけたんですわ』

『ほお……結構広いな』

重厚なドアの奥に広がる静かな空間。本棚に薄く積もったほこりの臭いが、どこか懐かしい感情さえも思い起こさせる。

『にゃー』

カーテンと窓を開けると、ケリーが室内に入ってきた。同時に日の光が閲覧席の周りを照らし、ゆるやかに暖める。

『君が、話に聞いていた光助か』

『まあ、そうですね。あん親父、一体どげな話をしよっとけ……？』

『そうだな……例えば』

『ああ、いや。別んいいスわ。それよか、まさかこげなところで同業者の息子さんに会うたあ思わなかったわ』

風三と九断。鳴峰組の柱となる二大幹部の息子たちは皮肉な笑みを浮かべあった。その表情で、お互いに相手も組の人間になることを望んでいない、ということを知っていた。

『光助は今、高校一年生か』

『ええ。入学前かい卒業後の進路が確定しちやります』

『そうか。……俺と同じ道だな』

元彦は、光助に対して悪い印象は感じなかった。胡散臭い口調でありながらも、自分が今まで見続けてきた裏の人間達にはない純朴さがその内に感じられる。

『元彦さんは、すでに組のもんとして働いちやるんすけ？』

光助も同様だった。自分が毛嫌いしている組織の中で、この人物だけは気が許せるような気がしていた。

『本格的な取り締まりや徴収はまだ未経験だが……本部で特別な仕事をやらされている』

『特別？』

言ってしまったから、元彦はハツとした。自分が人の感情を読めるという才能を持つということを、知られてもいいのだろうか、という考えが湧き出てくる。

（どうせ、いずれは明かさなければならぬことだ。しかし……今、久々に、素直な会話ができているんだ。「自分の心を見透かされて

いる」ということを知ったら、光助も嫌な気分になってしまう)

『ああ、そういやあ』

(……?)

『ずいぶん前に、親父かい聞かされたこつがありますわ。元彦さんは人ん心が読める、っちゅうて』

『あ、ああ……そうか』

意外にも、光助は少しも嫌がる素振りを見せなかった。こうして会話をしている時にも自分の感情が相手にバレているというのに、実に飄々とした態度だ。

『別ん後ろめたいところはないですかいね。ハナっから本音で接すりゃあ、何も問題はねえって、ウチん家政婦の受け売りやけんね』

後日、光助はそんなことを言った。二人はその後、何度か図書館で会話をした。光助はたまに帰ってくる父親と顔を合わせないために、この図書館を隠れ家として利用し、元彦は、本音で接してくれる貴重な友人に会うためにここを訪れるのであった。

しばらくの間は、平穏に時が流れて行った。それが破られたのは、二人が出会ってから一か月ほど後のことであった。

『見つ、けたぜ……お坊ちゃんよお』

元彦は図書館に向かう途中、道端で男に声を掛けられた。ボロボロに擦り切れたスーツをまとい、アルコールの匂いをまき散らすそ

の人物に元彦は見覚えがあった。

『あなたは……』

『忘れやしねえぞ、こっちはよ。お前のおかげで、オレア組を追放されたんだ』

以前、元彦の「裁き」により、処分を受けた男である。

『組を追放されて、オレア真つ当な職につくことすら出来やしねえ。筋モンを雇ってくれる人間なんざいねえからな』

『あれは……アナタが最初に犯罪を起こして、しかも反省をしなかったから追放になったんでしょ。それに、本当ならもっと重い罰になっていたところをこれまでの貢献度から判断して軽く……』

『ああそうだっ！ 俺は組に散々尽くしてきたんだよ！』

男は元彦の胸倉を掴み、顔の目の前で怒鳴りつける。

（マズイ……こいつ、本気で怒っている声だ。ほとんど狂気が支配している……ッ！）

『お前の親父と同じぐらいの年月、俺は組で働いてたんだ。なのに
お前の親父や九断の野郎ばかりが出世していきやがって、俺はいつまでも下っ端のまんまってのが納得いかねえんだよ！』

『それは、アナタの酒癖が悪いから……』

『ガキが文句垂れてんじゃねえ！』

口から吐き出される酒気が元彦の顔にかかる。思わず目を背けてしまう。

『俺にだってガキがいるんだ。それも二人もな。上の子はお前と同じ年で、本当なら大学に行かせる予定だったんだ。なのに台無しになっちまった。字一は大学をあきらめて自分で働くようになったんだ』

(字一……?)

男の息子の名前らしい。

『親として情けねーじゃねえか。体裁つてもんがよ！ お前があの時見逃してくれればこんなことにはならずすんだのによ』

『くっ……逆恨みを……！』

酔った男は聞く耳を持たず、右手で懷からナイフを取り出した。

第四十一話・不信

『父さん！』

『お父さん！』

若い二人の声が男のナイフを止めた。

『字一……みどり……なんでここに居やがんだ』

明石字一と明石みどりの兄妹が駆けてくる。当時の兄・字一は高卒、妹・みどりは中学二年生だった。

『家にあったナイフがなくなっていたから、もしかしてと思って来たんだよ』

『ちっ……』

男は元彦の胸倉から手を離す。しかし、ナイフを収めようとはしない。

『父さん！　ここで組の人間に手を出したら、余計マズイことになるよ！』

『黙ってる字一！　コイツがあの時見逃してくれりゃあこんなことにはならなかったんだよ！　悪いのはコイツだ！』

『お父さん！』

子ども二人の必死な抗議で、男はようやくナイフを懷にしまう。その目つきにはまだ憎悪の色が浮かんでいるものの、先ほどの酔いに任せた狂気は薄れていた。

『お父さん。さあ、帰ろう？』

『ああ……わかったよ。クソッ』

みどりが男を連れて立ち去って行く。その後ろ姿を見送りつつ、字一は元彦に向き合った。

『アンタ……確か同じ高校にいたな。まさか鳴峰組の人間だったとは』

『こっちこそ……。明石さんに息子がいることは知らなかった』

『俺は組の人間になるつもりはないからな。アンタ達と違って、幹部の御曹司なんて身分じゃないんだ』

そう言う字一のメガネの奥の目に、男とよく似た憎悪の光が宿った。

（恨んでいるな……俺のことを）

自然に、元彦は字一の感情を読み取ってしまう。

（そういえば、組の中でも下っ端はかなり生活が苦しいと聞いている。それで、明石さんの家族は幹部の息子である俺を憎んでいるのか……）

『今更、文句を言ったって何も変わらないのはわかっている』

極力表情を隠した様子で、字一は言葉が続ける。

『親父が酒がらみで問題を起こしやすく、身分が低いのもわかってる。組を追放されたのは親父が一方的に悪いんだってこともわかってる。だから……』

怒りと悲しみ、そして屈辱の混じりあった声に変わった。

『今、ここで起こったことは誰にも言わないでくれ。このことが組に知られたら、今度こそ親父はタダじゃ済まされなくなる』

『……しかし』

鳴峰組に対して恨みを持った人物が、幹部の息子に向けてナイフを突き付けてきたのだ。当然ながら、元彦には報告の「義務」がある。

『親父は俺たちが押さえつける。もう二度とアンタたちに刃向かわないように説得するから、絶対に報告しないでくれ！』

（……コイツの言葉は本物だ。決してただのデマカセなんかじゃない。本気である男の怒りを鎮めようという覚悟も感じられる）

しかし――。

（でも、それで本当にあの男の怒りが消えるのか！？ アイツは酒に酔うと何をするかわからないって理由で、組から重要な役割を与えられなかったんだ。もしもまた、酒に酔った勢いで襲ってきたら

……)

不安は拭いきれない。さらに、自分や光助の父親たちの言葉が元彦の脳を強く揺さぶりだしていた。

(ああいった手合いには厳しく接してもらわないとね)

(お前はもっと器を磨かねばならん)

『……頼んだぞ。今回のことは誰にも言わないでくれ』

それだけを言い残して、字一も去って行った。

元彦の下した決断は――。

『信用、できない……』

それから数週間の間、誰にとってもつらい日々が続いた。元彦から報告を受けた鳴峰組は男を確保し、厳格な処分を果たした。明石家は父を失い、字一は入ったばかりの大学を中退して就職し、妹のみどりと母親を支えなければならなかった。しかし、明石家の事情を知る大人たちは、誰もが字一の存在を忌み嫌った。

『そげなこつがねえ……。けん、悔やんでんしゃあねえでしょ』

光助はそう言って元彦を励ました。しかし、それでも元彦の罪悪感は消えなかった。外を出歩いたたびに、字一やみどりと出会いやしないかという思いが巡り、足がすくんだ。

『怖いんだ。自分がこんな才能を持っていたばかりに、一人の人間が消されたというその事実が。それに、直接「処分」に関わった組員達の血なまぐさい感情までもが、ストレートに伝わってくるんだ』

皮肉なことに、この一連の出来事がきっかけとなって元彦の才能はさらに研ぎ澄まされた。相手と顔を合わせなくとも、少し声を聞いただけで相手の感情を感じ取れるようになったのだ。

町中を歩いている時、すれ違う人々の生の感情が元彦に伝わって行く。時には嬉しい、楽しいといった感情も存在するが、裏稼業の人間として接する社会には、圧倒的な負の感情があふれていた。

『もう、誰にも会いたくない』

そんな思いがこみあげてくるのに時間はかからなかった。

『……そんげやったら、出来んこつもないですけん』

光助はそう言って、（ケリーの見つけた）誰も立ち入ることのないスペースを提供した。父親たちに知られないように準備を進め、二人が初めて出会ってから三か月後に、元彦は「鉄の部屋」に入ったのであった。

第四十二話・迫る再会の時

「相当のさん仕事やったっちゃけんな。そんげして、今ん組織の前身が出来たっつよ」

語り終えて、光助はフーッと長く息をついた。

「ボス……さんって、鳴峰組の人だったんですか」

「おう。組の人間が総出で探しよるけん、おりゃが協力して何とか隠しおおせちよる」

「それじゃあ、光助はボスの居場所を知っているんだな？」

丈二が真面目な顔つきで問う。丈二と結子は、今まで自分たちに仕事を廻していた人物の詳細を何も聞かされていないのだ。光助が「ボス」と関わっているということさえ、今初めて知った。

「今んところ、あの場所を知っちゃっとはおりゃとケリーとボス。それに、何の事情も知らない食料の運送係ぐらいやな」

「……そこに、連れて行け」

そう言ったのは和仁だ。

「ようするに、俺はそいつのもめ事に巻き込まれたんだろ？　これ以上とばっちりを受けてたまるか。本人と話をつけてやる」

「別に、お前自身は被害を受けてねえだろうか」

「二度と巻き込まれねえって保障がどこにある！俺はちゃんと納得して安心したいんだよ！」

「どっちみち、そんつもりや」

光助は和仁の意見を受け入れた。

「遅かれ早かれ、敵……明石兄妹と犬野朗は、いずれボスん居場所を突き止めるやろ。坊主ん携帯から番号を掴み、そこから電話会社のデータを利用すりゃいいっちゃかいな。少なくとも、連中がボスのところに行く前に、おりゃらがボスに会っとくんは悪くない」

しかし、外はもうかなり暗くなってきている。一人暮らしの直人はともかく、結子たちはあまり遅くなると家族から何か言われるかもしれない、ということで「ボス」のもとへ向かうのは明日となった。

「みどりの親が……鳴峰組……？」

ポツリと結子がつぶやいた。今の話によると、明石家の父親が処分されたのは、みどりはまだソフト部のキャッチャーとして活躍していた時だ。中学時代のみどりは、結子に対してそんな素振りを少しも見せなかった。

「みどり……」

光助達が帰り支度を済ませ、部屋を出て行こうとしても、結子はイスに座ったまま動かなかった。

「平崎さん？」

直人がそれに気付き、再び部屋の中に戻ってくる。氣を利かした光助と丈二が和仁を無理やり引っ張って外へ連れ出したため、部屋の中には結子と直人の二人きりになった。

「平崎さん、大丈夫？」

「うん……」

そう返事はするものの、結子の目には光がない。

「あたし、なんで気付かなかったんだろ……。みどりが、本当はスゴく無理してたってことに……」

「えっ」

「お父さんがいなくなって、本当はスゴくつらいのに、学校や部活ではいつも明るく振舞って、あたしのこと励ましてくれて、いつも頼りにできて……」

みどりとの最後の試合。一度の敗北が全てを終わらせた瞬間を、結子は思い出していた。

「きっと、みどりはソフトだけが希望だったんだと思う。ソフトの試合で勝つことだけが、心の支えになっていたはずなのに……。あたしが、あたしが打たれたから、それで」

しゃべっている間に、結子の目がしらに熱いものが溜まって行く。全身の震えを止めるようにスカートの端を強く握り、齒を食いしば

る。

「あたしが打たれて負けたから、みどりはストレスが爆発して、あんなこと言っちゃったんだ。それなのにあたしはちゃんと謝りきれなくて、そのままにしちゃった……」

「平崎さん」

直人は、結子とみどりの間の出来事を詳しくは知らない。しかし、一言だけ、一言だけ結子に言いたいことがあった。

「平崎さん。その……」

「何？」

「み……明石さんは、きっと、試合に勝つことじゃなくて、平崎さんと一緒にソフトが出来ることが、支えになっていたんだと思う」

「……」

何の根拠もない、ただの気休めであることは明らかだ。しかし、それが直人に出来る精一杯だった。

（私と、一緒に……）

その気持ちだが、嬉しかった。

「そう、だったらいいね」

結子の目に溜まった熱は流れず、震えも止まっていた。

「うん。ありがとう、積里君」

勢いよく立ちあがってカバンを掴み、直人に笑顔を向ける。

「さ、行こうよ。早く出ないと光助達に色々言われちゃう」

「あ、うん！」

色々言われてもいいな、と直人は密かに思いながら部屋を出て行った。

「お兄ちゃん、ちょっといい？」

「何だ。みどり」

みどりがドアを開けると、字一は相変わらず、闇の中でパソコンに向き合っていた。パソコンに電気を使う分、他の電力を節約しているのだ。

「見つけた？ 風三元彦の居場所」

「いや……もう少しだ。だが、もう数日も必要としないだろう。電
話会社へのハッキングは何度もやっているからな」

「そう。よかった」

「だがみどり。お前や俊は連れて行かない。お前達は学校にちゃんと行くんだ」

字一は冷たい声でハッキリと言い張った。

「俺と違って、お前はまだまだチャンスがあるんだ。これ以上は関わるな」

「でも……」

みどりはそれ以上の言葉を発さず、ただじっと兄の目を見続けた。そして、数分の後にとうとう字一が折れた。

「わかった。ただし、学校には行けよ。奴のところに向かうのは放課後になってからだ」

それを聞いて、みどりは部屋を出て行った。

第四十三話・開かれた扉

チク、チク……と、時計の針が自分の働きを主張している。必要最低限の家庭用品しか置かれていない鉄の部屋に、その音が響く。

（あと、三十分か）

「ボス」こと風三元彦は、さつきから何度も時計に目をやっていた。
る。

（光助、丈二、結子。それに栄和仁と積里直人、か）

光助以外は、今日初めて出会う人間ばかりである。電話越しに会話をしたことはあるが、顔はまだ知らない。

（明石……字一と、みどり。あの兄妹が私を憎むのは当然だろうな。
私は……私のやったことは、少なくとも彼らにとっては悪行だ）

ソファに深く腰掛け、二年前の事件について想いを巡らせる。考えれば考えるほど後悔の念が募り、いつしか元彦は寝転がり、動かなくなっていた。

三十分後。インターフォンの音で、元彦は目を覚ました。

（来たか）

身をおこし、鉄のドアへ歩いて行く。

鍵を開け、ドアを引き、廊下の奥のドアに進み、また鍵を開ける。

それらの動作を、元彦はゆっくりと、一つ一つ心に刻みつけるように行った。引き返そう、という思いが途中で何度も込み上げてきたが、それらを強引に抑えつけながら歩を進め、ついに最後のドアの前に立った。

「こんな所があったなんて……」

「今、足音がしなかった？」

鉄のドア越しに若い声が聞こえてくる。生きた人間の肉声を聞き、元彦の額に汗が流れた。

（この向こうに……）

ポケットから鍵を取り出す。そして、ドアにある二つの鍵穴のうち、上の鍵穴にそれを差し込んだ。

二年間ほど一度も使用されなかったにも関わらず、それはちゃんと機能した。ガチャリという重い音をたて、ついにその扉が開かれた。

「ボス、久しぶりやね」

「光助……。背が伸びたな」

いた。光助と、その後ろに四人の男女。そして猫のケリーが。

「は、初めまして」

丈二が進み出てあいさつをする。その目には、静かな驚きの色が

浮かんでいた。他の者たちも同じだ。

「ボス。そんな格好はなんね」

「ああ、これか」

元彦は黒いコートで全身を覆い、フードとサングラスで顔を隠していたのだ。丈二たちはその格好に驚いていた。

「久々に人と会うのでな。いきなり素顔をさらすのは気がひける」

「そりゃあ別んいいけん、グラサンはやめちくり。親父を思い出すわ」

「ああ、すまない」

元彦はサングラスを外し、その眼を一同に向けた。

「あの、初めまして」

「君が、立国丈二か」

「えっ？　そうですけど……」

元彦はコートの中から手を伸ばし、後ろのメンバーたちを一人一人指さしていく。

「結子、直人。そして、まだ一度も声を聞いたことがない、君が和仁だな」

「わかるんですか!？」

思わず結子が声をあげる。光助の話によると、「ボス」は自分たちの顔を知らないはずである。

「ますますカンが鋭くなったっちゃねえですけど？」

「そのようだな。一度声を聞いた人間は、気配だけで見分けられる」
そう言いながら、元彦は自分の生活スペースへ一同を案内して行く。

「はあ……本当に、こんな所に人が住んでるんだ」

「食べ物とかどうしてるんですか？」

「デパートに配達してもらっている。当然、本当の素性は明かしていないがな」

丈二や和仁はこの部屋に興味津々らしく、しばらくそんなやりとりを元彦と繰り返していた。しかし、結子はそれどころではない、というように本題を切り出した。

「それで、みどり達のことなんですけど」

この一言で、緊迫した空気が室内に満ちた。

「明石みどり……か。結子。君から相談を受けた時に、もう少し詳しく聞いておけばよかったな。そうしたら別の道があったかもしれない」

「ボス。そんげなこつ言うてん今更どんげもならんど」

「ああ……そうだな」

（そういえば）

ふと、直人は思った。

（ボスさんは、平崎さんにどんなアドバイスをしたんだろう？ 今の組織に入るように勧めたのはボスさんらしいけど、それだけなのかな）

「私の行ってきたことが正しいのかどうか、それをずっと迷っていた。この部屋に籠ってからも、少し時間があるとそのことばかり考えてきた。だが、どうやら……」

元彦は和仁に視線を送る。

「少なくとも、君にとっては迷惑だったようだな」

「あ……いや、そんな」

面と向かってそう言われると、和仁もあまり強く出られないようだ。

「無関係の人間を巻き込んでしまった以上、私もいつまでも逃げ回っているわけにもいかないな」

「お？」

「明石字一と、一度話をつける必要がある。光助の話によるといずれ向こうの方からやって来るそうだが、こちらから出向こうかと思っている」

ハッキリと、そう言いきった。この部屋を出るつもりらしい。

「けん、大丈夫ですか？　こん部屋を出っと、そん……」

「鳴峰組に見つかる、か。しかし、そんなことも言っていられない状況だろう」

「……」

そんな方向に話がまとまってきたとき、遠くでドアの動く音がした。

「？　配達の人ですか？」

丈二が間の抜けた声を出した時、部屋のドアが勢いよく開かれた。

「見つけたぞ。風三元彦」

「明石……字一」

「みどり！」

しかし、それだけではなかった。明石兄妹と俊。その後ろには多くの人影が控えていた。

第四十四話・強制連行

「どうぞ、こちらです」

字一はそう言い、後ろに控えていた男たちを室内へ招いた。その男たちは、直人も一度会ったことのある人物だった。

「親父！」

「光助。お前……」

光助の父親だ。それだけでない。元彦の父も含めた鳴峰組の組員達、合計十名ほどが字一と共に室内へ踏み入ってきたのだ。

「元彦。こんな所にいたのか」

「父、さん？」

元彦にとっても予想外だった。まさか、字一が鳴峰組を引っ張ってくるとは想像していなかったのだ。

「組の人間に居場所がバレる。お前の一番嫌なことだろう？」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、字一は元彦を指さす。

「俺は、俺たち兄妹はお前の嫌がることなら何でもしてやる。危険を承知で組に連絡することもな。そして、俺はこの功績を認められて正式にここの組員になったよ」

「くっ……」

「この状況では、お前はもう逃げられない。いや、お前に関わった人間すべてだ」

いかにも屈強そうな組員達が、元彦を取り囲もうと進み出てくる。

「まっ、待っちくりや!」

「光助!？」

素早く、光助が組員達の前に立ちふさがった。

「もう少し、待っちくり。今かい、そいつらと話ばつけっかい、せめてそれが終わるまでは……」

「光助」

光助の父が、威圧感のある声をあげる。

「お前、元彦君の居場所を知っていて、それを隠していたな？」

「ぐっ……そ、そりゃあ」

「隠していたんだな？」

口調が強くなった。おそらく、サングラスの奥の瞳は怒りに燃えているだろう。

「元彦。二年前、お前のやったことが正か非か、問題はそれだけで

はないのだ」

元彦の父もまた同様だった。

「己の葛藤を解決することだけでなく、組員としての役割までも放棄してこんな所に逃げ込んでいたという事実。この方がよほど問題だ」

「……」

「すぐに本部へ連れて行く。当然、二人ともそれ相応の罰を受けることになる」

「待てよ！」

言葉を遮ったのは、丈二だった。

「君は……光助の友達か。だが所詮は一般人。黙っていれば君たちは解放してやる」

「そうはいかない。俺たちの知らないところで勝手に話がまとまるなんて、納得できない」

「ジョー！」

結子の止める声も聞かず、丈二はキツパリと言いきった。

「連れて行かないでくれ……ください。そんな、罰だなんて……」

あまりに無謀な要求だった。しかし、このままでは鳴峰組は二人

にどのような「処分」を下すかわからない。身内と言えど、礼儀と戒律の前では加減がない。

「無理だな。一般人は何も口出しをするな。これは我々の組織の問題だ」

組員の一人がそう言った時、丈二に加勢が現れた。

「あなた達だけの問題じゃありません」

結子だった。その視線は、真っすぐにみどりへ向けられている。

「私だって、この事件には無関係じゃないんです！」

「うるさいぞ！」

その怒号と同時に、鉄の塊が結子に突きつけられた。引き金を引けば、アッサリと命を奪うことのできる道具――拳銃だった。

ガチャツという音が幾重にも重なって室内に響く。男たちが一斉に銃を抜いて構えたのだ。中にはドスと呼ばれる短い刀を持った者もいる。

「悪いが、こういう時に実力行使ができなきゃ筋モンと言えないんでな」

この建物の周辺は人通りが少ない。鉄の扉も相まって、銃声が人の耳に届くことはないだろう。

「連れて行け」

「はっ！」

光助と元彦が男たちに囲まれる。

「光助！」

「やめい、ジョー。こんげなったら、逆らわん方がええ」

「でも、このままじゃお前……」

「構うな。抗えば抗うだけ、状況は不利になる」

珍しく光助の額に汗が浮いている。いつもの飄々とした雰囲気は感じられない。

「光助さん……」

「坊主」

光助が部屋を出て行く直前、直人と視線がぶつかった。

「坊主。結子んこつ、頼んだぞ」

「えっ……」

一方、元彦も連れて行かれる際に、結子へ言葉を送っていた。

「君の問題は、君の手で解決してほしい。我々の方も出来るだけ努力はするが……」

「……ええ。みどりと、話をつけてみます」

そのみどりは、すでに字一と共に部屋を出て行っている。その代り、ドアの前に俊が残って立っていた。

「よお、トランプ少年」

「なんスか？ 犬コロ先輩」

「何ウジウジ悲しんじやってんの？ お前らは解放されてんだからよ、今連れて行かれた奴らのことなんか忘れて、ごく普通の学校生活送ってりゃいいだけじゃん？」

丈二は精一杯に言い返すが、俊は優越感にあふれた笑顔で応えた。

「アイツらだって別に殺されるわけじゃあねえしよお。……あ、もしかしたらそれもアリ、かもな」

「黙れ」

直人は一瞬耳を疑った。丈二の口から、冷徹な声が飛び出したのだ。

「二度とそんな口をきいてみろ。この間程度のキズじゃ済ませねえぞ」

「ッ……」

俊も圧倒され、思わず後ずさりする。そして、逃げるように背を

向けた。

「へっ、今は犬を連れて来てねえからな。無駄なケンカはやめとくぜ」

これらの出来事が、わずか十分の間に行われていた。

第四十五話・過去を向く者、未来を向く者

鳴峰組本部の一室にて、幹部二人と字一が会話をしている。その隣の部屋では光助と元彦が待機させられており、人払いをしているため他の組員達はいない。

「御苦労だったな、字一君。君の希望通り、最初に元彦と話をする権利は君に譲ろう」

「ありがとうございます」

字一は無表情で頭を下げる。

「しかし、君も思い切ったことをしたものだな」

「……」

「君の父を処分したのは我々だ。君は、我々を憎んではないのか？」

「父のやったことは……父に責任がありますので」

庭に面した障子を開け放した室内に、静かな風が流れ込んでいく。初夏にふさわしい、爽やかな風だった。

「父のやったことを考えれば、あのような処分も仕方ないと思います。ですが……元彦の態度が気に入りません」

「ほう」

「間接的とはいえ人の生涯を破壊したにも関わらず、あの者は勝手に世間を捨てました。人の人生を狂わせたからには、その責任を背負って生きるべきです。それを放棄して逃げたという行為は、許容できません」

「うむ。その点は我々と同じ意見だ」

元彦の父は大きく頷いた。元彦達の行動に最も怒りを覚えているのは、間違いなくこの父親二人である。

「それにしても、だ。この組に頼ることに抵抗はなかったのか？事件の発端はここにあるのだぞ？」

「……正直、最初は組に頼るつもりはありませんでした」

字一の表情が少しだけ曇る。

「私達の手で、元彦に復讐をしようと考えていました。しかし、みどり……妹の提案で、ここへ連絡をさせていただきました」

「みどり？ あの子が提案したのか」

「ええ。鳴峰組、特にあなた方に所在が知られてしまう、ということが奴に最も大きなダメージになる、というのが妹の考えでした」

「それは、おそらく正解だろうな。元彦の様子からすると」

少しの間をおいて、字一は打ち明けた。

「妹にはそう言った偏才があります。あいつは……子どもの頃から、相手の弱点を見抜くことに長けていました」

「ほう。それは興味深いな」

「偏才……か。光助もそんなことを言っていたな」

そう言う男の口元に、苦い笑みが浮かんでいる。

「まったく、妙な遊びを思いついたものだな」

「遊びではありません。少なくとも、社会的な能力の低い我々学生が元彦を探すためには、こういった才能を持つ者の集団が必要かと……逆に元彦達は、このような事態に対処するために仲間を集めていたのだと思います」

「……ふっ。そういうことか」

小さな笑い声だけを残し、幹部二人は部屋を出て行った。そしてようやく、元彦の待ちわびた「面会」の時間が訪れたのだった。

「入るぞ。風三元彦」

座敷の奥に声をかけ、字一はふすまを開いた。

「本当にいいの？ 私のわがままを聞いてもらって」

「わがままも何も、俺たちには他に出来ることがねえしな」

図書館の秘密部屋。結子と丈二、直人の三人が今後の計画を話し合っている。鳴峰組の登場によって、「これ以上巻き込まれるとマズい」と判断した和仁は手を引いたようだ。

「まず、明石さんと話をつけるんだよね」

「うん。一度、みどりと話し合いたい。少なくとも今のままで済ませたくないの」

結子は完全に覚悟を決めていた。

「あの女の子が、連中と渡り合う唯一のカードだしな」

「でも、明石さんの住所、わかるの？」

それが問題だった。

「汐春高校だとは言ってたけどな」

「それも本当だとは限らないでしょう？ あの時だけ違う高校の制服を着てたのかも」

「何のために？」

「今まさに、私たちに住所がバレて邪魔されないために」

「あ、そうか」

どことなく、丈二は落ち着きすぎているように見える。光助がい

ないためか、その代理を務めようとしているのかもしれない。

「それじゃあ結局、ヒントはねえのかよ」

「そうね……」

「あるよ」

最初に閃いたのは直人だった。

「あの……刻同俊って人。あの人はウチの学校の人はず」

「犬野朗が？ 本当かよ」

「そういえば、アイツと最初に会った時はウチの制服着てたわね。アイツ、あの時点ではまだ私たちやボスのことを知らなかったから、変装じゃないと思う」

記憶の中から、その時の様子を引き出す。ほんの数週間前の出来事なのに、もう何か月も前のように感じられた。

「でも、あんな奴今まで学校で見たことねえぞ？ 上級生のクラスにはあんまし行かねえけど、あれだけ目立つ金髪がいたらすぐわかると思うけどな」

「あんな奴が真面目に学校行ってると思う？」

「それもそうだな」

しかし、他に方法はない。ともかく学校の二年生や教師に尋ねる

しかない、ということになってその日は解散とした。

「あの犬野朗をとっちめるのは俺に任せてくれ」

そう言う丈二の目に強い光が灯っていたのを、直人は確かに見た。

第四十六話・一步前進

「くっああああ……。久々に学校にでも行くかねえ」

俊は大きくあくびをし、玄関を出た。しかし、その足は学校へは向かわず、近所の空き地へと向かっていた。

「おーい、ハツ、ナカ！」

土管のあたりに向かって声をかけると、二匹の犬が土管の中から現れた。そのうちの一匹は、直人の携帯電話を奪った犬だ。

「お前のおかげで、あざー先輩にまた誉めてもらえたぜ。いやまったく、大したお手柄だってよ」

まるで子どものような笑みを浮かべつつ、俊は二匹の頭をなでる。

「途中、色々ムカつくこともあったけど、今となっちゃ全部解決だよな。敵方のボスは拉致されて残った連中はもう何もできやしねえ。そしてあざー先輩は正式に組員になって、万々歳だ。あの女に仕返しできなかったのは残念だけどな」

「ワン！」

犬たちも祝福するように一声をあげた。

「……あ、そういやあハツ。お前、このあいだ俺とじゃなくてみどりちゃんと一緒に逃げたろ」

「グ」

「お前のご主人さまは誰なのか、ちゃんとわかってんのか？」

「ワウ……」

俊は真剣な顔つきになってハツを睨みつける。頭をなでている手に、わずかながら力がこめられた。

「ウ……ワウッ！」

必死にわびるような鳴き声。

「ツハハハハハ！ 冗談だって、じょーだん。今の俺はメチャクチャ機嫌がいいからなく。見逃してやる」

「ワン！」

かたじけない、とでも言うようにハツは頭を地面にこすりつける。それに満足した俊は空き地を出るが、やはりその足は学校へと向かわない。

「さあゝて、今日はどこで遊ぼうかな……」

俊はここ一週間ほど連続して学校をサボっていた。前々からサボり癖はあったが、最近の出来事と比べるとますます勉強が下らない行為に思えてくる。それに、俊はもう高校へ行く理由がなくなっていた。

「先輩が鳴峰組の一員になったってことはあ……そのきっかけをつ

くった俺も、いずれは組に入れてもらえるかもしれねえじゃん。それ考えたら大学行って就職活動なんてバカバカしいっての」

制服姿のまま街中を徘徊する。通勤するサラリーマン達や、自分と同じ高校に通う生徒達があちこちを歩いているのを見ながら、俊は口元に歪んだ笑みを浮かべた。

「俺もいずれは部下を連れて……人間の、部下を連れて……ククク。肩で風切って夜の町を歩き、一般人どもを震えさせてえなあああ」

空を見上げると、初夏の太陽がまぶしく輝いている。今日も暑くなりそうだな、などと思いつつ、俊は自分の明るい未来を空に思い描くのであった。

同時刻、早めに登校した丈二、結子、直人は、俊を探すべく二年生の教室がある棟に来ていた。

「ちよいと早く来たけどよく……。どう考えてもアイツがこんな時間に来るわけねえよな。そもそもちゃんと学校に来るのかもわからねえんだぞ」

「遅く来たって同じでしょ。私、この学校の二年生に仲が良い知り合いとかいないんだけど、どうやって聞き出すの？」

「僕も、上級生とはあんまり……」

「俺は三年ならいるけどな。光助とツルんでた奴らとか」

部活や委員会をやっていないと、こんなことが起こる。仕方なく生徒の方はあきらめ、二年生を担当している教師に頼ろうかと歩き出した時――。

「ん？ 教師……」

丈二が突然立ち止まった。

「どうしたの？」

「そういや、不良生徒に詳しい教師がいたような……」

記憶の中から、情報を引き出してくる。それはすぐに見つかった。

「生活指導の根岸！ サボり癖のある不良生徒について詳しいはず！」

「じゃ、ジョーが話してね。私あの先生苦手だから」

「はあっ！？ 俺だって嫌いだよ、あんな堅物は！ そもそも職員室の空気が苦手だし！」

そういうことになり……。

「す、すいません……。一年二組の積里直人です……」

「うん？ 何の用だ」

ということになった。

「ね、根岸先生に尋ねたいことがあぁあって、その、ま、参りました」

「入口に立っていないで、早く入りなさい」

教師・根岸の口調は柔らかいものの、その低い声は威圧感にあふれている。

「ああ、あのー、二年生、の、えと」

「……君、もう少し落ち着きなさい」

何もやましいところはなくとも、頑固な生活指導教師と会話をするのは緊張するものだ。しかも、職員室という環境が更に拍車をかける。

「そんなに私は怖いかな？」

（はい……。なんて言えないよ）

「怖いか……。そうか。やっぱりな」

「根岸先生？」

そして数分後。

「お、直人。どうだった？」

「ゴメンね積里君。嫌な役押し付けちゃって」

廊下で待ち受けていた二人が直人を迎える。

「あの先生、怖かったろ」

「まあ、最初は……。なぜか途中から妙に気さくだったけど。大体の住所も教えてもらたよ」

「本当！？ やるじゃん積里君！」

結子にそう言ってもらえたのが嬉しかった。実際には、根岸が生徒に怖がられすぎていることを気にしていたためにかえって甘く接してくれただけなのだ。

「それじゃあ、放課後に早速だな！」

一つ目の関門をクリアし、丈二は勢いよく声を張り上げたのであった。

第四十七話・執行される復讐

一日中制服姿のまま街で遊んでいた俊は、夕方になってようやく家へと足を向けた。

「結局、今日も学校サボっちゃったな。ま、俺にはもう学校なんて必要ないけど」

そう言いながら空き地を通りかかる。それを待っていたかのように犬達が土管の中から顔を出した。

「お、お前たちも帰ってきてたのか。楽しかったか？ 今日一日」

「ワン！」

「そーか、そりゃよかった」

俊の扱っている犬達は、夕方から朝にかけて空き地で寝泊まりし、昼間は野良犬として自由に街中を徘徊するようにしていた。

「あざー先輩の復讐もほぼ完成したし、毎日が楽しくってしょうがねえよな」

「ワウ……？」

ハツが妙な鳴き声をあげ、鼻先を少し持ち上げてあたりの臭いをかぎ始めた。

「どうした？ ハツ」

「ワン！」

一声吠えると同時に、俊は悟った。素早く合図を送り、犬達を急いで土管の中に隠れさせる。

「この辺、だったよな」

「たぶん。前に会った時も確かこの近く……」

会話しながら空き地へ近付いてくる。三つの人影。その一つが、俊の存在に気付いて声をあげた。

「いたよ！」

「あっ！」

紛れもない。結子、直人、丈二だ。

「おいおいおい。お前ら、なんの用だ？　今更よォ」

土管の方に後ずさりしながら、俊は三人を睨みつける。

「みどり達の居場所、知ってるでしょ？」

結子がボールを持ったまま先頭に立ち、空き地へ踏み入る。

「教えて。あの兄妹がどこに住んでいるのか。あるいは、いつもどこにいるのか」

「はあ？ 何で俺がそんなこと教えなきゃなんねえんだ？」

俊や明石兄妹にとって、目の前の三人はすでに「用済み」であった。風三元彦の居場所を突き止めるきっかけにはなってくれたが、これ以上は何の関心もない。俊にとっても、すでに結子に対する執念は薄れていた。

「断るに決まってるだろうが」

「教えなさい！」

結子が声を強くした。結子は二度、直人に至っては三度も俊の操る犬によって苦しめられたのだ。相手の軽い態度が気に入らない。

「お？ じゃあなに？ 力づくで……てコト？」

俊はパチツと指をならし、ハツを呼んだ。

「なあんかさあ……。こんな状況になっちまうと、また復讐心が湧きあがっちゃうよなあ。あざー先輩の作戦が上手くいった喜びで忘れかけてたのによお」

「……私たちも、ここで余計な争いはしたくない。でも、どうしてもアンタが断るっていうんなら別よ」

「そうだ！ さっさと教えやがれ！」

丈二が進み出る。先手必勝だと言わんばかりの闘気を発しながら。

（ふん……）

俊はしばらくの間、結子たちを無視して考え込んだ。この状況と、再び燃え上がってきた復讐心を照らし合わせて、どう行動するのが最も効率がいいのか、真剣に考えていた。

「なあ。それじゃあこんなのはどうだ？ アンタ……」

と、結子を指さす。

「アンタ一人だけになら、教えてやってもいい。俺も三対二で闘うなんて面倒だし、住所を教えたところですぐにお前らのボスが助かるわけでもねえしな」

「私、一人？」

「そう。そっちの男二人はここで俺のハツを見張って、別の場所であつた俺とアンタの二人だけで会話する。そうしたら教えてやるよ」

（……どういうつもり？）

俊の狙いがわからず、結子は戸惑う。犬がいないのなら自分一人でも対抗できる。自分達にとっては決して悪い条件ではない。

（でも、それが逆に怪しい。コイツが、何も考えずにこつちを有利にしてくれるっていうの？ 何か他の目的があるんじゃない……）

しかし、いくら考えてもその目的がわからない。残した犬に丈二たちを襲わせるつもりなのだろうか？ その可能性は低い。俊は丈二がトランプを武器に出来ることを知っているのだ。

「なあ、どうするんだ」

「平崎さん……」

そして結子は決断した。

「ここなら、誰にも邪魔されないだろ」

俊が結子を連れて来たのは、あの図書館の秘密部屋だった。

「まさか、ここまで突き止められてたなんて……」

「あざー先輩は情報収集が得意だからな。お前らのアジトを突き止めるぐらい余裕だぜ」

結子は、いつも自分たちがたむろしている部屋が異質なものに感じられた。

「それじゃあ、早く教えなさいよ」

丈二と直人は先ほどの空き地で待機している。ハツを見張るためだ。

「その前に、ちよいと蒸し暑いから窓開けるぞ」

俊は窓のカーテンを開け放し、鍵を外す。そして、窓を勢いよく開いて叫んだ。

「来いッ！ ナカ！」

「えっ！？」

窓から飛び込んだきたのは、体が小さく赤毛の犬だった。可愛らしい外見とは裏腹に、その顔つきはハクやハツと同じく凶暴である。

「犬は連れてこないって……」

「ハツを連れてこないって言ったんだ！」

「ガアウ！」

「アツツ……！」

ナカは、突然の展開に反応が遅れた結子を襲う。右手が振り上げられるよりも一瞬早く飛びかかり、その手からボールを弾き飛ばした。

（しまった！）

「よしよし。上出来だぞナカ」

俊の視線が、結子の脚や胸元に向けられる。

「ちゃんと住所は教えてやるから安心しな。たっぷり楽しんだ後に、だけどな」

結子が俊の狙いを理解した時、全ては手遅れだった。

第四十八話・意地 対 狂気

「おっと、まだボール持ってたよな」

ナカの奇襲で床に落とされた結子のバッグに、俊はゆっくりと近づく。

「やつ、やめろ！」

体勢を立て直した結子が急いでバッグに手を伸ばすが、俊の手が早かった。

「ハハハ、残念。……あったあった、小汚いボールがあと二つ」

結子のバッグの中を俊の手が乱暴にまさぐる。その行為に結子は嫌悪感を覚えつつも、それ以上動けなかった。すぐ後ろにナカの気配を感じたからだ。

「ブアウツ！」

「ハハッよしよしよろし、いいぞ、ナカ！」

振り向かなくともハッキリと存在がわかるほど、ナカは結子に接近していた。

（マズい……どうする？）

これまでの犬——ハクやハツと比べると、ナカの体格はかなり小さい。しかし、机やイスといった障害物の設置された室内では、そ

の体の小ささが逆に有利となる。

「おっ、アンタも一応リップクリームぐらひは学校に持って行っ
んのな」

「触るな！」

「……ハイハイ」

俊は無造作にバッグを放り投げる。そして、視線は再び結子に向
いた。

「さて、どうする？ 頑張ってここから逃げ出すか？」

出口は二つ。扉と、先ほどナカが飛び込んできた窓だ。しかし、
どちらに向かって走っても、すぐに追いつかれるだろう。

（さっき落とされたボールを拾うか……素手で犬を倒すか）

ボールは結子の手から落ちた後数メートル転がり、貸出カウンタ
ーの下で止まっていた。閲覧席にいる結子からは二メートルほど離
れている。

「そうだ、いいこと思いついた。アンタ、こっち側に来な」

俊は本棚の間へと入って行く。照明をつけていないため、本棚の
周りは暗い。

（ダメ。狭いところで挟み撃ちされたら逃げ場がない！）

「ナカツ！」

「ヴァウ！」

ナカが飛びあがって机の上に乗る、さらに結子へ飛びかかる。

「くっ……」

やむを得ず結子は本棚の間に逃げる。だが、俊のいるところではなく、その一つ隣のスペースに逃げ込んだ。

「おいおい、面倒な手間をかけさせるなつての。どっちみち追い詰められるだけだしよお」

俊が本棚の後ろに回り込んで近づいてくる。さらに、出口のある方向にはナカが立ちふさがっており、想定していた最悪の状況となった。

（一か八か、犬に向かって突撃するしかない）

いかに凶暴とはいえ、まったく歯が立たないわけではない。多少の怪我を覚悟して走れば突破は可能だろう。しかし、ナカを突破しても、そこから逃げられる保証はない。ボールを拾うにしても距離がありすぎる。

（それとも、素手であの男を倒すか……。ダメだ。その隙に後ろから犬が来る）

「観念しな。大人しくしてりゃあこっちも乱暴はしねえからよ」

その声に、下卑た笑いが込められている。結子は足の先から全身に悪寒が走るのを感じた。

「さあて、そんなじゃあ楽しませてもらうかな」

「ふざけるなっ！」

出来るだけ重そうな本を掴み、ナカに向かって投げつけた。

「ギャツ！」

ナカはページの隙間から埃をまき散らす本をかわし、逆に結子へ飛びかかる。しかし、結子はすでに走り出していた。

「このっ！」

「ギャウオ！」

ナカを跳ねのけ、急いでボールを拾いに走る。

「あっ、待て！」

（間に会った！）

カウンターの下にあるボールに手をかけ、拾い上げようとした瞬間――。

「ツアアッ……！」

鋭い痛みが足を襲う。以前、学校でハクにつけられたものとは比

較にならないほどの痛みと血が、結子の左ふくらはぎから吹き出した。

「グルルルルウ……」

ナカの口、牙の間から血が滴る。全身の赤い毛に血の色が混じり、まるで血染めの狂犬のようだ。少なくとも結子にはそう見えた。

（痛……ッ！）

「ハアハツハツハ！ いいぞ、いいぞおナカ！」

俊が高らかに笑い声をあげた。ナカと同様、狂気に満ちた目を輝かせている。

「アハツ、アハ、アツハアア……。いゝい感じじゃあねえかよ。理想的な展開だぜ」

「やめ、やめて……」

結子は顔を上げることせず、懇願するようにつぶやくばかりだった。

「あ？ 聞こえねえよ」

「やめ、て……」

「聞こえねえっての！」

笑いながら俊は結子に近付く。ねずみを捕まえた猫のように、わ

ざと時間をかけて結子に迫っていく。

「……」

「なあおい、平崎サン？ さっきまでの威勢はどうした？」

うずくまる結子のそばに立ち、見下しの言葉を浴びせる。

「痛いかな？ ん？」

そう言いながら、右手をゆっくりと差し出す。その右手は大きく広げられ、結子の右太ももをつかんだ。

「ハハッ、なあ……」

その瞬間、結子の左足が動いていた。俊が近付くのを待ち、その顔を思い切り蹴りあげたのだ。

「うげあ！？」

「この……変態野郎！」

「グアウ！」

ナカが瞬時に反応する。血のついた歯が剥きだされると同時に、口の中へボールが放り込まれた。

「ブバァ……」

足をかまれながらも、結子はしっかりとボールを掴んでいた。う

ずくまっていたのはそれを隠すためだったのだ。

「ウ……ツウ」

歯をくいしばって左足の痛みをこらえつつ、結子は窓の外へ飛び出した。

第四十九話・籠城

「この、クソが！」

俊の鼻から血が流れ出す。モロに蹴りを喰らってしまったようだ。

「ナカ！ あいつを追うぞ！」

「ブハ……アウ……」

ナカは急いでボールを吐きだそうとするが、牙にひっかかって上手く取れず、もたついている。

「ちくしょう！」

俊は単身で窓から飛び出す。が、結子の姿はどこにも見当たらなかった。

「ああ？ どこ行った……？ あの女、足をケガしてるから早く走れるわけねえのに！」

以前、自分が潜伏していた場所まで行ってみるが、ターゲットは見つからない。地面を見ても血痕すら残っていなかった。

「おいおいおい、どこ行きやがったんだあ！？」

「バウッ！」

ようやくボールを吐きだしたナカも図書館の外へ飛び出てきた。

「ナカ！ アイツの臭いを探せ！ 血が出てるから探しやすいはずだ！」

だが、それも上手くいかなかった。よく見ると、ナカの鼻の頭に血がつけられている。結子がボールをぶつけると同時に、自分の血も浴びせていたのだ。

「ヤベツ、これじゃあ血の臭いが強すぎて追跡しにくいじゃねーか！」

制服のシャツをハンカチ代わりにし、ナカの鼻を拭う。

そしてそれは、結子が携帯で直人達に連絡する時間を与えることになった。

『わかった、今すぐそっちに行く！』

「うん、お願い……」

電話を切り、床に落ちていたタオルを包帯にして応急手当をする。

「助かった……。ここがバレてなくて」

そこは、直人にも見せたことのない空間だった。結子や丈二も一度しか入ったことのない、本当の秘密部屋である。俊のいる位置からほんの数メートル、建物と建物の間の狭いスペースにその扉があった。

「どうせここもすぐに見つかるだろうけど、電話する時間が出来て

よかった……」

大人が三人も入れれば窮屈になるほど狭い倉庫だ。物置というよりも、ガラクタを捨てるための場所らしい。この部屋のおかげで直人達に連絡が出来たのはいいが、問題はまだ残っている。

「ここかつ!? ナカ!」

「バウ!」

(この扉にはカギがない……!)

俊が来るよりも早く、ドアノブを押さえつける。この扉を突破されたら完全に”詰み”だ。

「いやがったな!」

外側から俊がドアノブを捻ろうとする。結子の中から押さええることに気付き、更に力を込めてくる。

「無駄だ……つってんだろ!？」

(う……くっ)

ソフト部をやめてからもトレーニングは続けていた。しかし、自分よりも年上の男の握力にはわずかに及ばない。

(うう……!)

左足に巻いた包帯に血がにじむ。痛みとしびれが下半身を襲い、

ふんばりが効かなくなってきた。

（ジョー達が来るまでどのくらい？ あの空き地からここまでだと走って十分は……いや、違う。犬がいる！ あの犬が邪魔してきたらもっと時間がかかるかもしれない！）

ノブを握る手に、皮が裂けそうな痛みが生じ始めた。

「いい加減にしやがれっ！」

ドア越しに罵声が聞こえてくる。陰湿な狂気を通り越し、もはや完全な怒りの化身となっているようだ。

（絶対開けちゃダメ！ 絶対、絶対……！）

これまで何千、何万回とボールを握ってきた腕が頼りだった。相手も負傷している。もはや根競べの勝負だ。

「クッソオオ！ 早く開けやがれ！」

だがこの勝負、やはり俊の方に分がある。怒りが疲労や痛覚をごまかしているからだ。

「おおおおっ！」

ギリギリときしむような音を立て、少しずつノブが動き始めた。結子は慌てて逆方向へ回そうとするが、それも無駄に終わった。

（あ、ああ——！）

「このヤロオ！」

古びた木の扉が壊れんばかりにきしみ、大きく開かれた。

日の光を背に、俊とナカが立っている。怒りと血で顔を真っ赤にしたその姿は、邪鬼そのものである。

「ヴアアウ！」

「うああ！」

携帯を思い切り投げつける。この近距離なら確実に命中する……と結子は確信していたが、それは俊の手によって弾かれた。

「無駄なあがきをするんじゃないやねえ！」

反動で壁に叩きつけられた携帯が、派手な音を立てて破壊される。機械の内側がむき出しになったその姿が、結子にさらなる恐怖を与えた。

「この……っ！」

俊はナカを入口に待機させたまま、部屋の中に踏み入って行く。硬く握った拳を震わせながら。

結子は後ずさりで距離を置こうとするが、この狭いスペースでは逃げ場がない（もつとも、この部屋に逃げ込まなければもつと早く捕まっていただろうが）。

「もうおしまいだ！」

「ギャバツ！」

ナカが吠えた。苦痛と驚愕の悲鳴だった。

「ナカ！？」

振り返った俊の目に、予想外の光景が映った。

「バツ……ガ」

ナカの背中に白いものが乗っていた。ナカはそれを振り落とそうと必死に暴れまわっている。

「なんだっ、おまっ……」

俊の言葉は中断された。背後から結子が体をぶつけてきたのだ。油断していた俊は足をフラつかせ、体重をかけて頭を壁に衝突させた。

「ありがと、ケリー」

「ニャー」

俊の気絶と同時にナカは逃げ出し、後には傷ついた結子とケリーだけが残っていた。

第五十話・舞台裏の寸劇

「わかった！　すぐそっちに行く！」

携帯を切ると同時に、丈二は駆け出した。無論、直人も後に続くが、それを阻む存在がいた。

「ガウ！」

ハツが素早く二人の進行方向へ回り込む。

「くそ、うざってえ！　直人！　一旦散るぞ！」

「えっ!？」

丈二は方向を変え、入ってきたのと逆の側から出て行った。それに反応したハツが丈二の後を追って行く。

「あ、そうか二手に分かれて……」

直人もすぐに空き地を飛び出し、図書館へ向けて走り出した。

（丈二君、大丈夫かな……。いや、それよりも早く平崎さんのところに行かないと……!）

「ガウッ！」

（え?）

不吉な予感がして、直人は振り返った。

「ガァァッ！」

「うわああ!?!」

一旦は丈二の方へ向かっていたハツが、なぜか直人の方に狙いを変えていたのだ。

「なんでこっち来るの?!?!」

悲痛な叫びをあげつつ、逃げるしかない直人であった。

「いっつつつ……。派手に血は出たけど、それほど深刻な傷じゃなくてよかった」

気絶した俊の手足を縛って倉庫に閉じ込め、結子は図書館の秘密部屋で怪我の手当てをしていた。

「あゝあ、もう。あの変態本当にムカつく! 気持ち悪い……」

「にゃむ」

ケリーも同意のようだ。

「ところでさ、ケリー。アンタ何でここに来てたの?」

「にゃ……」

「光助とボスは？ 元気？」

言いたくない、とでも言うようにケリーは深く目を閉じた。

「ひょっとして……監禁されてる、とか？」

「……」

凶星のようだ。

「それである二人を助けるために、私たちを探しに来たってわけね」

「にやむう……」

ケリーはそれ以上返事をせず、体を丸めて眠りの体勢をとった。

「あとはジョーや積里君が来るのを待って、あの男からみどりの住所を聞き出すだけ、か」

治療を終え、フーツと息をつく。危機を乗り越えて安心すると同時に、疲労がどっと押し寄せてきた。

（みどり。アンタ、何で言ってくれなかったの？）

軽く眼を瞑ると、まぶたの裏にみどりの顔が浮かぶ。二年前、共にソフトで汗を流していた頃の明るい表情だった。

（お父さんのこと、軽々しく人に言えないのはわかるけど……。私には、私には言っただけだったよ……。みどり。そしたら少しは力に

なれたかもしれないのに……)

閉じたまぶたの隙間から、薄く涙が漏れそうになる。しかし、結子はそれを止めようともせず、過去のみどりに向かって声をかけ続けた。

(みどり、一人で抱え込まないで……)

「結子！」

男の声が沈黙を破った。窓の外を見ると、顔中に汗をかいた丈二の姿があった。

「大丈夫か!？」

「うん。ケリーのおかげでね」

しかし、直人の姿はない。

「積里君は？　それと、犬はどうしたの？」

「直人の方は別の道を通ってきたからわかんねえけど……。犬は途中でまいた」

丈二は気がついていなかった。ハツは丈二を見失ったのではなく、直人に狙いをつけただけなのだということに。

「刻同俊は倉庫に閉じ込めてあるわ」

「倉庫？　ああ、あの物置か」

二人と一匹が倉庫に向かうと、俊はすでに目を覚ましていた。

「くそっ！ 邪魔だ、この縄！」

扉越しに俊の声と暴れる音が聞こえてくる。

「この中に、足と手を縛って入れてあるの」

「犬はもういないみたいだな」

扉を開けると、予想通り俊が縄を相手に苦戦している。

「てめえっ！ この縄ほどきやがれ！」

「その前に約束を守りなさいよ。みどりの住所を教えて」

「うるせえ！」

「教えろっての！」

丈二が俊の胸倉を掴んで怒鳴りつける。

「お前、状況がわかってんのか？」

「くっ……」

しかし、俊は口をつぐむ。

（ヤベエ、ヤッベエエよおお。この状況もだけど、あざー先輩の住

所が俺のせいでバレたとなったら……先輩に見捨てられちまう！

汗が噴き出して止まらない。俊の未来は字一の胸一つにかかっているのだ。

「おい、聞いてんのかよ！」

丈二に前髪を引っ張られ、無理やり目を合わせられる。

「なあおい……」

「うっせえよ！」

怒鳴り声をあげる。すると、どこか遠くから近付いてくる声が聞こえてきた。

「……アン！　ワン！」

「犬！？」

「あの鳴き声は……ハツ！」

まさしく、倉庫の入り口にハツが現れた。

「ワン！」

「ハ……ツ？」

ハツの表情は、いつもの凶暴な顔つきではなかった。子犬のように朗らかで、晴れた笑顔を見せていた。

「ハア……ハア、ま、待ってよ」

「積里君！」

直人が遅れてやってきた。なぜか制服がびしょぬれになっている。

「犬から逃げる、途中で、川に、落ちて……。その犬も、巻き込まれて、一緒に落ちちゃったんだ」

「なに！？ ハツは泳ぎが苦手なんだぞ！」

直人とハツの様子を見ればわかる。溺れかけたハツを直人が土手に引き上げたのだ。

「そしたら、なんか、懷かれちゃって……」

そう言うそばから、直人の足元にまとわりつくハツであった。

第五十一話・アジト到着

元々、ハツは人になつきやすい性格だったのかもしれない。濡れた体を拭く直人の周りをしきりに動き回っている。

「マジかよ。この間はメチャクチャ凶暴だったのに」

「本当に大丈夫なの？」

丈二と結子はまだ疑惑の目を向けている。直人自身も、ハツの豹変ぶりに驚くばかりであった。

しかし、もつとも驚愕しているのは俊だった。

「ハツ……お前」

目が大きく開かれ、じっとハツの顔を凝視している。

「お前、そいつに……」

「ワウ……」

怒声が飛んできると思い、ハツは直人の後ろに隠れた。

「そいつに、助けてもらったのか？」

「ワン」

「……？」

どうもおかしい。俊の表情に怒りがない。

「よかったな！ いや、お前が無事で本当によかった！」

今まで見たことのない純粹な笑顔だ。手足が縛られていることも気にせず、全身から「嬉しい」の感情を発している。

「お前は子どもの時のトラウマで水が苦手だったのに、川に落ちても無事に済んだんだな」

「ワン！」

怒られないということを理解したのか、ハツは尻尾を振りながら俊の前に出て座り込んだ。

「ああ、ホント、お前が無事でよかった……」

「ワウ」

「……」

意外な展開に、結子たちは呆然と立ち尽くすのみである。俊が自分の犬を大事に思っているのは確かなようだ。

「そうそう。あざー先輩の居場所だったな」

突然話題を変えてきた。

「教えてやるよ。つっても、縄をほどいてくれたらだけど」

「本当か!？」

「ああ。あの兄妹が住んでる家じゃなくて、アジトの方だけどな」

（やった!）

結子は心の奥で喜びの声をあげる。目的へ向け、また一歩前進出来た。

「アジト？」

「お前らにとっての、この図書館みたいな場所だ。俺はいつも、そっちのアジトであざー先輩と会ってるんだ」

明石兄妹の住居は知らないらしい。

「そこでもいいぜ。早く教えろ」

「先に縄ほどいてくんね？」

丈二は少しの間迷ったが、拒否した。

「そんなすぐに信頼できるかよ」

（――信頼）

その言葉が、結子の胸に重く押し掛かった。

「大丈夫だよ」

口を開いたのは直人だった。

「大丈夫……だと思う」

「直人、マジに言ってるのか？」

丈二が怪訝な表情をする。しかし、直人は自分の意見をそのまま述べた。

「こ、この状況なら、反撃したくても出来ないと思うよ」

「まあ、それはそうかもしれないけどよ……。結子は？」

結子にしてみれば、ついさっき、俊の要求を飲んだがために散々な目に会されたのだ。だが、この一連の事件は不信感から始まったものである、ということも事実だ。

結子の決断は早かった。

「そこの角を曲がったところだ」

俊が案内した先は、二つ隣の町にある古びた洋館だった。長い間空き家となっていたのを、字一が勝手に使い出したらしい。二階に一つだけ見える窓にカーテンは引かれていないが、中が暗くてよく見通せない。

「ここか……」

「……なあ、本当に、俺がここを教えたってこと秘密にしてくれるか？」

俊が念を押す。

「ああ。俺たちはお前と違って約束は守るからな」

「……いや、俺も約束は守ってるよ。ちゃんと」

「約束の仕方に問題がある」

「いやあ……それは、まあ……しょうがない。とにかく、俺の役目はここまでだからな！ 行くぞ、ハツ」

ハツを伴い、俊は逃げるように去って行った。

「さて、それじゃあ行くか。鍵はかかってないって言ってたよな」

丈二が壊れた門扉をこじ開けて言う。しかし、結子は用心深くあたりをうかがっている。

「今、みどりがここにいるとは限らないんじゃない？ もうアイツらが集合する必要はないみたいだし」

もっともな意見だ。ただでさえ陰気で不気味な洋館に、すっかり日が暮れて暗くなった今も、少女が一人だけにいるとは考えにくい。あくまでも常識では、だ。

「でも、お兄さんがいるかもしれないよ？」

「アイツは鳴峰の組員になったんでしょ？　だったらむしろ夜になつてからが仕事時じゃない」

「それじゃあ……」

丈二が二階の窓を見上げる。

「あそこにいるのは、みどりちゃん一人ってことだな」

いつの間にか、窓にカーテンが引かれていた。確かにさっきまでは見えなかった、緑色のカーテンが。

「いる……ってこと、だよな？」

「時間が来たら自動でカーテンが閉まる、なんてハイテクな造りには見えねえしな」

「あそこに、みどりが……。でも、開いていたカーテンを閉めたってことは、もう帰ろうとしているってことかな」

「たぶんな。それと、閉める時に俺らの姿が見えたかもしれない」

その推測はズバリ、的を射ていた。

「結子……。どうしてここに……？」

遠目に見ても、自分が最も会いたくない人物の姿はすぐにわかった。

「今更何のつもり？」

結子に会いたくない。しかし、みどりは逃げずに考えていた。結子が最も嫌がることは何なのか。

そして、みどりの卓越した直感——偏才は、すぐに答えを導き出した。

第五十二話・切り込み

「にゃー」

館の周りを見て回っていたケリーが戻ってくる。

「どうだった？ 隠れた出入口とかなかった？」

「にむ」

頭を横に振る。猫道を使うケリーが「ない」と言うのだから、館の出入り口は正面玄関と非常口の二か所だけで間違いないらしい。

「で、どうするよ。ここまで来たら踏み込むしかねえよな」

「うん。でも、みどりが私たちに気付いてるとしたら……」

おそらく、結子たちに会わないように脱出するだろう。そうなってしまうと面倒だ。

「ケリー。悪いけど、ここで見張っててくれる？ それで、みどりが出て行ったら、その後をつけて行ってほしいの」

「にゃ」

ケリーは素直にうなずいた。本来なら光助の言うことしか聞かないケリーだが、今はその光助を救い出すために協力してくれている。

「それじゃ、行こう」

「うん」

そして、三人は館の中へと足を踏み入れた。

中は外見同様、古く陰気な空気に満ちていた。

「ほこりくせえ……。マジで空き家だな」

「窓がないしね。真っ暗で何も見えない」

少し迷った後、壁についていた照明のスイッチを入れた。明かりをつけようがつけまいが、どっち道自分たちの侵入はバレているだろうと判断したのだ。

階段を見つけ、三人は二階へと向かう。誰も口をきかなかった。ただ一人の少女と話をするだけだというのに、まるで冥府にでも踏み入るような重苦しさがあたりを支配していた。

二階のいくつか部屋が並んでいる廊下にさしかかった時、カタン、と音が聞こえた。部屋の中からだ。

(ここに……)

ゴクリ、とツバを飲み、結子が近くのドアを開けた。

まさしく、そこにみどりはいた。梱包したてのダンボールがいくつも並び、様々な「モノ」が散乱した部屋の中央にみどりは座っていた。

「みどり」

結子が声をかける。それに合わせてみどりが立ち上がった。

「みどり。あなたと、二人だけで話がしたいの」

みどりは答えず、黙って結子たちに近付いてくる。うつむいているため、結子たちからは表情が見えない。

ついに、結子の目の前にみどりが立った。

「ねえ……」

「結子」

小さな声で、それでもハッキリとみどりは言い放った。

「二度と話しかけないで」

「えっ？」

「まわりつかないで」

そのまま結子の隣を通り抜け、部屋を出て行く。丈二と直人も呆気にとられ、反応ができなかった。

（――話シカケナイデ……）

かつての親友の口から出た言葉とは思えなかった。図書館でナカに咬まれたものよりも、深い傷が結子の胸に刻まれた。

「みどり……」

直人達の方を振り向くこともできず、結子は立ち尽くす。

「結子。もう、行こう」

丈二が声をかけても結子は動かない。

（拒絶……された。ハッキリと）

それがみどりの狙いだった。今の言葉を告げ、結子の心に溝をつくるために、わざとこの部屋で結子たちを待っていたのだ。

「みどり」

「行こうよ、平崎さん」

一同がその場を離れた頃には、空に星が瞬いていた。

翌日、結子は学校に来なかった。直人達が携帯に電話をかけるが、電源を切っているらしく通じない。

「平崎さん、大丈夫かな……」

「話をしようとした途端に、あんな冷たい態度を取られたんだ。そりゃあ落ち込むだろうよ」

「丈二君。僕たち、どうすればいいんだろう。どうしたら結子さんを助けられるのかなあ……」

「何もできねえよ。あの二人のわだかまりは、アイツらが解決するしかねえ。それがわかってるから、昨日みどりちゃんも俺たちのことを無視したんだ」

「でも！」

学校だということも忘れて、直人は大声をあげる。

「このまま何もしないなんて、そんな……！」

「落ち着けよ、直人。何もしないってわけじゃあないんだ」

「え？」

丈二は冷静だった。

「みどりちゃんの居場所がわかった以上、結子の問題は結子に任せて、俺たちは他にやるべきことがあるだろう」

「え、何？」

「結子のみどりちゃんと話をつけない限り、明石兄妹を足掛かりにして光助達を助けだすことは不可能だ。それも難しいとなったら、もう、直接的な集団を取るしかない」

「直接的な手段？」

真剣な顔つきで、丈二は言った。

「鳴峰組に切り込む」

「え……ええー!？」

思わず出た大声に、周りの人間が何事かと注目してくる。

「ジョ、丈二君、本気なの!? そんな、組の本部に行ったって門前払いに……」

「デカイ声出すなって。いいか、切り込むといっても、暴力で殴りこむわけじゃあないぞ」

周りの人間に聞こえないよう、声を潜める。

「ボスの部屋に向かう直前、光助から聞いたことがある。あの組の主な収入源はミカジメ料だってな」

それは、直人も聞いたことがあった。

「法の網をくぐる裏稼業から、利益の何パーセントかをもらうってことだ。裏稼業ってのは、例えば……博打、カジノだな」

「まさか……」

「カジノで大暴れして、連中に打撃を与えるんだよ。派手にやれば相手の幹部を引っ張りだせるだろ」

それがどれだけ無謀なことなのか想像もつかず、直人は反論する気力すら無くしてしまった。

第五十三話・裏カジノ潜入作戦

「俺たちみたいな一般の高校生だけじゃ、組の管理するカジノには入店できない。ああいう店は紹介状がないと入れないって聞いたことがある」

「だ、だからって、この格好は……」

直人は、どう見ても似合わないサングラスをかけたまま反論した。黒スーツにネクタイを締めたその様子は、まさにマフィア——の格好をさせられた子どもだ。

「うーん、少しサイズが大きかったかな」

「そういう問題じゃないよ！」

丈二と直人は貸衣装屋に来ていた。無論、変装してカジノに入るためだ。

「服装だけそれっぽくしてもダメじゃん！」

「大丈夫だって。他の客が店に入る時、付き人って感じでついて行けばいいんだよ。堂々とやってりゃ逆にバレねえって」

そう言う丈二もスーツ姿になっている。こちらは身長が高いため、少しはらしく見える。

「賭場が開くのは夜になってからだな。一旦図書館に行って、作戦を考えるか。……すいませーん、この服借りまーす！」

「じよ、丈二君……」

直人の抵抗もむなしく、丈二はさっさと支払いを済ませて出て行ってしまった。

「そもそも、カジノがどこにあるかわかるの？ 裏稼業って、普通の人の目につかないところでやるんでしょ？」

「人の目にはな。ケリーに頼んで探してもらうさ」

ケリーは図書館にいた。正確には秘密部屋の窓の下、芝生の上で丸くなって眠っていた。丈二達が部屋に入って窓を開けると同時に、ケリーは目を覚まして部屋に飛び込んだ。

「よう、ケリー。ちょっと頼みたいことが……ん？ なんだそれ」

ケリーは口に一枚の紙切れをくわえていた。机の上にそれを置き、前足を使って、丈二にそれを読むよう指示した。

「結子からの伝言だ」

「平崎さんからの！？」

急いで書きなぐったらしく、乱れた文字だった。

「……『みどりの所に行きます。みどりに何度拒絶されても、嫌われても、絶対にこのままで終わらせたくないから。ジョー。積里君。わがままを言ってゴメン。でも、この問題は私に任せて』……だつてよ」

丈二が声に出して読み上げた。

「明石さんの所に、一人で？」

「ま、どうやら結子も立ち直ってくれたみたいだし、俺たちは俺たちの作戦に専念するか。ケリー。ちょっと探してもらいたい場所があるんだが」

「にいい？」

またか、とでも言いたげに、ケリーは眠そうな表情をしている。おそらく、結子を明石家まで案内し、それで今日の役目は終わりだと考えていたのだろう。

「鳴峰組の仕切っている賭場——特に、ランプを使うカジノハウス。どこにあるか探してくれねえか？ あ、もしかしてすでに知っているとか？」

「にやむ……」

返事は「ノー」らしい。

「なあ頼むよ。コンピュータージュおごってやるからさ」

そう付け足すことでようやくケリーは承知し、窓から出て行った。

「さてと。それじゃあ具体的な作戦の打ち合わせをするか」

「う、うん。でも、僕に出来ることってあるの？」

それが気になっていた。これまでもそうだったが、ギャンブルとなると直人はからっきしの素人だ。果たして役に立つのか、足手まといになるのではないか……と、直人は心配していた。

「まず最初に、何とかしてカジノに潜入する」

「何とかしてって。大難関をアツサリと……」

「潜入したら、とにかく派手に金を稼ぐ。バカラやポーカーといったトランプ競技ならまず負けねえしな」

胸を張って言いきった。言葉通り、丈二は自分の偏才にゆるぎない自信を持っている。

「カジノの損害は組の損害につながる。俺たちがガンガン勝ちまくれば、そのうち鳴峰組の人間が出てくるはずだ。そこで、稼いだ金を材料にして交渉する」

「交渉して、乗ってくれるかなあ」

「乗ってくれなきゃあ、さらに稼いで組に打撃を与えるだけだ」

穴だらけで目の粗い作戦であることは丈二もわかっている。しかし、それ以外に方法はない。

「ケリーが戻って来たら出発しようぜ。その頃には夜になってるだろう」

「ぼ、僕も行かないとダメなの……?」

「ああ。組の利益に打撃を与えるためには、十万や五十万の稼ぎじゃあダメだ。出来るだけ短時間で多く儲けるには人数が多い方がいい。二人で協力できるからな」

「きよ、協力って……つまりイカサマ……」

「は、あまりしたくないな。こっちがサマを使ったら向こうは容赦なく叩きつぶしに来る。あくまでも正当な手段で勝てば、ルールを尊重する組織に対抗できるようになる」

元彦達が捕まったばかりで、下っ端の組員達も改めて規律を重んじるようになっていいるだろう。都合のいい解釈かもしれないが、そう信じるしかない。

「どっちにしろ、何かあった時のためには一人より二人の方がいい」

「そ、そうだよね」

「だから頼むよ直人。敵陣に一人で乗り込むなんて精神的にプレッシャーがデカいんだよ。一緒に来てくれ！」

大げさに頭を下げて見せる。が。

（……光助さんに『ボス』さん。二人を助けるのに少しでも力になれるなら……）

直人の心はすでに決まっていた。手を引くという選択肢はなかった。

「行くよ。僕も、また光助さんに会いたいし」

そして一時間後、ケリーが帰ってきた。

第五十四話・渴欲の部屋

夜の街。仕事帰りの人々が思い思いに道を歩き、酒や安息を求めている。しかし、ある四階建てのビルの最上階へ向かう人々は、安息ではなく刺激を求めている。或いは、己の労力に見合わない大金を得るために。

「にゃー」

一匹の黒ネコが、そのビルの裏に現れた。その後ろには一匹の白ネコ。そしてぎこちなくスーツを着こなした二人の男がっている。

「ここか……何階だ？」

「にゃー」

白ネコ――ケリーが黒ネコに「通訳」し、黒ネコが返事を返す。それを聞いてケリーは最上階を見上げた。

「一番上か。ありがとよ」

丈二はタブの開いたコーンポタージュ缶を地面に置き、ビルの表側に回った。直人もそれに続く。

「さてと……どうやって入るかな」

「普通に行ってもダメだよな」

予定では、カジノに向かう数人づれの客を見つけ、その集団の中

に紛れ込んでいくことになっている。しかし、そうそう都合よく団体の客は訪れない。全くないわけではないが、それらの大半は一階のバーに入って行く。

「どうする？　このまま待っても、カジノに入れるかどうかかわらないよ」

「そうだな……。ダメで元々、一度行ってみるか」

「えっ」

「門前払い喰らってもいいから、とりあえず行くだけ行ってみよーぜ。ここでじっと待ってても始まらねえし、もしかしたら案外、あっさり入れるかもよ？」

決断すると丈二の行動は早い。例によって直人の意見も聞かず、ビルの中へ足を踏み入れた。

エレベーターで四階へ上がり、ドアが開く。それと同時に、二人は予想通りの光景を目の当たりにした。

「いらっしやいませ。会員証か紹介状を確認させていただきます」

カジノフロア全体を担当している受付嬢が、エレベーターのすぐ前で待ち受けていたのだ。

「会員証を提示してください」

（やっぱり無理だよ、丈二君！）

（あ、ああ……。そうだな）

二人は一瞬『あっさり入れるかも』と思ったことを後悔しつつ、エレベーターの方へ戻りかける。その時だった。

「じょ……」

受付嬢が小さくつぶやいた。

「お客様。失礼ですが、『じょうじ』というお名前では？」

「え……。？　そうだけど」

「じょうじ様のご来店は許可いたすよう、上からの指示されております。どうぞ、ご入りください」

「へ？」

意外な展開となった。しかし、これは好都合だ。

（もしかしたら、じょうじっていう名前の他の客と間違えてくれたのかな）

そう解釈し、丈二と直人は受付を後にする。

二人の後ろ姿を見送った受付嬢は、すぐさま壁に掛けてある電話の受話器を取り、番号を押した。数階のコールの後に、相手が電話に出る。

「もしもし、カジノフロアの受付です。たった今、立国丈二ともう

一人……積里直人らしき人物を入店させました」

『……そうか。やっと来たな』

相手の男は、それだけを言って電話を切った。数日間放置していた網に、ようやく獲物がかかったことを喜ぶような声だった。

そんなことがあったとはつゆ知らず、丈二と直人はカジノハウスの扉を開けた。

「うわぁ……」

予想以上の人数がいた。内装はシンプルだが、丁重に整えられていて清潔な印象を受ける。しかし、この部屋に渦巻いている空気は、清潔とは真逆のものである。

「レッドに三十！ これ以上負けられるか！」

ルーレット台から一際大きな声が聞こえてくる。

「す、すごいね。やっぱり。本当にお金が動いてるんだ……」

「ああ。あのチップ、一枚千円なんてもんじゃあないだろうな」

ギャンブル経験のある丈二にとっても、大人の賭博は初めてである。

「ブラック。目はブラックの16です」

「ちくしょうっ！ まただ！ これで五百はスツたぞ！？」

悲痛な叫びが響く。もつとも、それはルーレットだけに限らない。他の種目からも似たような声が聞こえてくる。

「勝ってる奴もいるにはいるが、博打ってのは銅元（主催者）が勝つようになってんだよな」

会話によって高まる緊張を拭いつつ、丈二はチップを購入する。

「とりあえず十枚。まずは軍資金を貯めるために、少額だけ張るか」

「が、頑張って！ 丈二君」

応援を背に、ブラック・ジャックのテーブルに向かう。

「ここ、空いてるかい？」

他の客やディーラーは、どう見ても未成年である丈二の登場に驚きながらも、空いている椅子を勧めた。

「手始めにチップ2枚から行かせてもらおうよ」

ブラック・ジャックは、ポーカーと違い、参加者（子）の意志を無視して賭け金が跳ね上がることがない。いくら賭け、いくら儲ける、あるいは負けるのかは完全に子の自由である。欲張らない限り大損はしないため、所持金の少ない丈二はこの競技を選択したのだ。

「ヒット。もう一枚……。よし、スタンドだ」

見守る直人と好奇心を持った客の視線を浴びながら、ディーラー

がカードを追加する。

「……ディーラー、バースト。プレイヤーの勝ちです」

——出だしは好調だな。——まだまだ、勝負はこれからが難しいんだ。

周囲のギャラリーがヒソヒソと会話する中、丈二は、己の偏才に感謝した。

（勝てる。相手が巧妙なサマでも使わない限り、トランプ勝負なら絶対に負けねえっ！）

強い確信を持ちつつ、今度は8枚のチップを台に置いた。

第五十五話・決戦

「ショー・ダウン」

「キングのスリーカード」

「……クイーンのスリーカード。プレイヤーWIN^{ウイン}」

ブラック・ジャックで資金を増やした丈二は、更に儲けのペースを加速されるためにポーカ―の台に移っていた。

「そんじゃあ、もう一勝負」

と、丈二は言ったが、当然次の勝負で終わるつもりはない。鳴峰組の人間が出てくるまで、ひたすら稼ぎ続けるつもりだ。

「レイズ。もう二十枚」

「……コ、コールです」

このカジノでは、ブラック・ジャックには賭けられるチップ数に制限がある。しかし、ポーカ―ではいくらレイズをしてもいい、というルールになっている。

（すごい、丈二君。現金にしたら五百万近く稼いでるよ）

勝ち続けて莫大な量に増えたチップは、専用のケースに入れられている。ひと箱につき百万分のチップが入るケースが、すでに五箱目に突入している。

「坊や。君、誰の紹介だ？」

客の一人が丈二に話しかけてくる。いつの間にか、丈二の周りには大勢のギャラリイが集まっていた。

「初めて見る顔だが、誰かの知り合いなのかい？」

「ええ、まあ……」

適当に相槌を入れつつチップを張る。だが、客はなおも食いついてくる。

「誰の紹介だい？ 私はここに来るほとんどの客と親しくしているが、君の話は誰からも聞いたことがないよ」

（うるさいな。このおっさん）

と、その時だった。カジノフロアの奥、招待客が入ってくるのは逆の方向にあるドアが開き、一人の男が入ってきたのは。

「どうしてそんな事聞くんです？」

「いや、別に深い意味はないんだ。ちょっと興味を持ったただだよ」

ほとんどの客は丈二に注目しているため、男の登場には誰も気づいていない。男は無言でギャラリイの山に近付いて行く。

「個人名は出せないけど、ここの関係者だよ」

「へえ、カジノ側の？」

「……いいえ、我々です」

男がギャラリーをかき分けて丈二の後ろに立ち、言葉を挟んだ。

（？ 我々……）

「ああ！ ジョ、丈二君！」

直人が大声をあげ、丈二の肩をつかむ。何事かと振り返った丈二もまた、その男を見て目を丸めた。

「おいおい……いきなりド本命がかかっちゃまったじゃねーか」

「かかった、だと？ 俺をおびき寄せたつもりか」

男——字一はかすかに笑う。

「逆だ。お前たちをおびき寄せたのはこちらの方だ。いずれ必ず、我々の管理するカジノに現れると思っていたよ」

「あ、あんたは、この間からここの用心棒になった……」

先ほど丈二に話しかけていた男が、字一を指さす。

「鳴峰組の明石字一と申します。彼らは、私が招待させていただきました」

字一は営業スマイルをつくり、周囲の客に向けて頭を下げる。

「……ちっ、俺たちの作戦なんか、とっくに読まれていたってわけか」

「そんなところだ。が、何も心配はいらない。ゲームを続行したまえ」

「あ？」

「お前達の要求はわかっている。それを無下に突っぱねることは容易いが……そうしたら、お前達は何度でも我々に挑んでくるだろう。迷惑なことだ」

「……」

「だから、ここで決着をつけようと思ってな。二度と鳴峰組に逆らわないよう、思い知らせてやるんだ。もちろんギャンブルでな」

いつの間にか、字一の手にランプのケースが握られていた。

「ある程度……そうだな、五百万貯まったら、奥の接客室に来い。当然だが、このまま逃げることは不可能だからな」

部屋の入口に組員らしい男が待機している。

「これは幹部の方々と話し合って決めたことだ。お前達が勝てば……要求をのんでやる」

「本当か!？」

「ああ。勝てば……な」

交渉するまでもなく、相手が自ら勝負を挑んできた。しかもトランプで、だ。この上ないほど都合のいい展開――。しかし、あまりにも都合がよすぎる。

（こいつ、俺の偏才を知らねえのか？　ポーカーやバカラなら、俺に負けはないぞ）

「丈二君、何か……何か企んでるよ、絶対」

小声で直人がささやく。自分達が来ることを予想していたとなると、どんな罠が仕掛けられているかわからない。

だが、逃げ道はないのだ。

「俺は奥の部屋で待っているぞ。それじゃあな」

不敵な笑みを浮かべつつ字一は引き上げて行った。周りのギャラリ―達は話についていけず、立ち尽くすのみである。

「……勝負再開だ」

「え？」

「再開だっつってんだ！　ディーラー！　一枚チェンジ！」

「は、はい」

腹をくくった。どのみち、途中で逃げることは最初から考えてい

なかったのだ。

「レイズ、二十五！」

覚悟を決めた丈二が目標金額に達するまで、十分の時間も必要としなかった。あっという間に五つ目のケースを満たし、勢いよく席を立った。

「直人、行くぞ」

「う、うん」

勝つ。相手がどんな勝負を挑んでこようが、勝てばいいだけのことだ。接客室の扉を開け、勝負の場へと踏み込む。

「……ほう。思ったより早かったな」

「うるせえ。一体、何のゲームをするつもりだ？」

小さなテーブルのを挟んで、二つのイスが置かれている。奥側のイスには字一が座っており、テーブルの上には数枚トランプカードが並べられていた。スペードのエースからキングまでの、十三枚だ。

「これからやるゲームはこのカジノのオリジナルギャンブルだ。名を……『サートイーン』と言う」

未知のギャンブル……。それが、一つ目の誤算だった。

第五十六話・『サーティーン』

「『サーティーン』？」

「ルールそのものは単純、運試しさ。ただ単に、順番にカードをめぐっていくだけだ」

字一はテーブルの上に並んでいる十三枚のカードを裏返し、神経衰弱をやる時のようにかきまぜる。

「まず初めに先攻、後攻を決める。この方法はジャンケンでも何でもいい。とりあえず、俺が先攻になったとしよう」

裏向きになったカードを一枚選び、表に返す。6のカードだった。

「まず先攻が一枚選んで表に返し、次に後攻も同じことをする」

そう言ってまた一枚めくる。今度は4だ。

「そしてめくったカードの数字で競う。今回の場合は先攻が6、後攻が4だから先攻の勝ちだ。6+4の合計、10ポイントを得ることが出来る」

表向きにした二枚のカードを自分の手元に引き寄せ、理解したか？
とでも言うように丈二の顔を見る。

「なるほど。確かにシンプルだな」

「一度使ったカードは勝者の手元に移し、残った十一枚で再び同じ

ことを繰り返す」

字一は次々とカードをめくり、勝敗に合わせてカードを移動させる。そして、最後の一枚だけが中央に残された。

「六回同じ動作を繰り返したら、その時点での合計点数の多い方が勝者となる。先攻が46、後攻が38だから先攻が8ポイント上回ったことになる」

「残った一枚はどうするんだ？」

丈二が最後の一枚を指さす。その質問を待ち受けていたのか、字一はニヤリと笑って見せた。

「その一枚が、このゲームを盛り上げるスパイスだ」

手を伸ばし、最後のカードを表にする。数字は7だった。

「勝者と敗者の差――この場合は8ポイントだが、それにこの7をかけた数が、勝者の得る最終金額となる」

「この場合は、8かける7で56か」

「その通り。今回は比較的小さな数字になったが、最後に残ったカードがキングなら一気に13倍になる。一回の勝負で最終ポイントが100を超えることも少なくない」

「……なるほど。だから『サートイーン』か」

「そう。実に単純なゲームだろう。特別な知識や経験を必要としな

いぶん、常に公平な勝負が出来るというわけだ」

ただ、運の強い方が勝つだけのゲーム——通常ならば、そうだった。

（ゴチャゴチャ言ってつけどよろ。自分でトランプに触れるゲームなら絶対に俺は負けねえっての。もし、向こうが確実に勝つつもりなら……）

丈二はカードを裏返し、描かれている模様をじっと見つめだした。それに気付いた字一は、声をわずかに不機嫌な色に変えた。

「ガンカードは使っていない。イカサマなんかで勝利したら、組の威信に係わるからな」

ガンとは、カードの裏に印をつけ、その印で表の絵柄がわかるように仕組むことである。

「そうかな。……念のために一つ約束してもらうぜ。カードをめくるときは、必ず腕まくりすること。袖の中に別のカードが仕組まれるかもしれないからねえからな」

「フン。疑り深い男だな。……まあ、当然の用心なのかもしれないが」

「丈二君……」

直人は不安な表情を浮かべたままだ。しかし、丈二にとっては、仲間がいてくれるだけでも心強い。

「大丈夫だって。こんな下らねえゲームはさっさと片付けて、二人を助けようぜ」

「フッ……。ずいぶんと大口を叩くもんだな」

「で、どれだけ勝てば二人を解放してくれるんだ？」

本題に切り込んだ。これだけは、絶対に確認しておかなければならない。

「……本来なら、組からの逃亡やその援助をした罪は決して消えない。二人はまだ若く、また偏才によって組に貢献できる点を考慮した上で今のところは謹慎という処分になっている。いずれは二人とも万年下っ端の組員になるのだがな」

「うるせえ！ 早く答えやがれ！」

「……一人につき一千万。それがアイツらの値だ。二人を救いたければ二千万勝て」

「二千万!？」

直人が大声をあげる。

「まだ安い方だ。罪に汚れた人間をカタギに戻す相場としては……。な。それともう一つ、先に言っておかなければならないことがある」

「……何だ？」

丈二の額に、玉のような汗が浮いて流れた。

「今、お前の所持金は五百万だが……。このゲームでは、金の動きがかなり不規則だ。バカラやブラック・ジャックのように賭けた分だけ損する、というタイプのものではない。つまり、お前が二千万を稼ぐ前に、逆に五百万以上の損害を受ける可能性もあるわけだ。それこそ場合によっては、百万、二百万のな」

「……」

「もしもお前の負けが五百万を上回り、支払が不可能となった場合……」

字一は突然立ち上がり、部屋の奥へと引っ込んでいく。そして、奥の机に置いてあったファイルのようなものを手に取り、再びテーブルにつく。

「ここに、組の追い込みがかかるってわけだ」

ファイルを開き、数枚の写真を丈二に見せる。

「……ッ！」

ここまで気丈に振舞っていた丈二の背に、ゾクリと悪寒が走った。写真は、丈二の家屋、そして家族を写したものだっただ。

「って、てめえ……！」

「なに、ごく普通の家庭なら百万程度はどうにかなるさ。もつとも、組に睨まれた、という事実は社会的な打撃となるがな」

プレッシャー。それが字一の策の一つであった。

「レートは1ポイントを一万としたいが、どうかな？ 二千万勝つためにはもっと上げた方がいいか？」

「……い、いや、一万でいい」

丈二の声から覇気が消えていた。恐怖。それが、ゆっくりと気迫を侵食していた。

第五十七話・致命的な現象

わかっていたはずだ。自分がやっていることは、鳴峰組に勝負を挑むということは、本来なら決してやってはいけないことだ、と。何かあれば自分だけの問題では済まされなくなる、というのもわかっているつもりだった。

「どうした？　ずいぶんと静かなになったな」

ゆるりと、空を切るような声を字一が発した。声の中に嘲笑が含まれていることに気付き、丈二はへその力を込めて反論する。

「そっちこそ、妙に饒舌じゃあねーかよ」

「フフ。俺は、元彦のように人の感情を正確に読み取ることは出来ないが……。お前はわかりやすいな。実にストレートだ。ギャンプル向けじゃない」

「うるせえ！」

精一杯声を張り上げるが、字一だけでなく、直人も感じていた。丈二は怒りで恐怖をごまかしていることに。

「さっさと始めるぞ！　先攻を決めるんだったな！　ジャンケンか！？」

「俺はどっちでも構わない。お前が好きな方を選んでいい」

「なら……先攻だ！」

改めて並べ直したカードの一枚を選び、表にする。

「ほう。いきなりキングか」

「よしっ、最強だ！」

字一はしばらくテーブル上のカードを眺めた後、一枚を選択する。

「ここか……」

低くつぶやき、表返す。それは二番目に弱いカードである2だった。

「これで15ポイント先制ってことだよな？」

「ああ」

「よしっ！ 幸先いいぜ！」

そう思っていたのは、丈二だけであった。直人も、当然字一も、今の結果が『幸先いい』と言えるようなものではないと理解していた。

プレッシャーを振り払おうとする丈二だけが、気付いていなかった。

一方、明石兄妹のアジトではもう一つの戦いが行われていた。沈

黙の戦いが。

「……」

夜九時近くになっても、みどりはアジトの部屋から出ようとしな
い。ただ黙々と周囲の物品をダンボールにしまう作業をしている。
アジトを引き払う準備をしているようだった。

ガシャガシャと物を動かす音が室内に響き、それは部屋の外まで
届く。その音を聞きながら、結子はドアにもたれて黙り込んでいた。

「……みどり」

時折、ポツリと中に向かって声をかける。返事は当然ない。

昨日この場所でみどりに拒絶されて以来、結子の心はふさがち
だった。夕方近くになってようやく気を取り直し、ケリーに明石兄
妹の家まで案内してもらった。直人たちへの伝言をケリーに託し、
学校から帰ってくるみどりを見つけたのが午後四時半である。

『みどり』

思い切って声をかけた。何と言われようが、決して折れない。そ
う決めたのだ。

『聞いて。私……』

みどりの反応は――なかった。目の前に立つ結子が視界に入らな
いかのように、平然と通り過ぎて玄関を開け、入って行った。

数分後、カバンを置いて身軽になったみどりが出てきた。結子は再度声をかけるが、やはり反応はなく、徹底して結子を見殺し続けながらアジトへ向かう。結子も負けじと後を追いつつながら意志の疎通を図るが、視線を合わせることもすら出来なかった。

『私、待ってる。みどりが答えてくれるまで、絶対にここから離れないからね!』

アジトに到着し、素早く部屋に入ってから鍵をかけたみどりに対して結子は叫んだ。それからずっと、結子は部屋の前でみどりを待ち続けている。

(ストーリーだと思われてもいい。でも、ずっとバッテリーを組んできたんだもん。感じるよ……。みどりも、このままじゃいけないって思ってること……)

悔いていた。二年前、みどりの悲しみを見通せず、唯一の希望であったソフトの試合で負けてしまったことを。

(あの時……あの、最後の一球。私は勝利を確信していて……ほんの少し、球がゆるんだ……。気を抜いたつもりはなかったのに、最後の最後で……!)

本当に結子の球が甘かったのか、それは定かではない。しかし、結子はそう思いこみ、激しい自責の念に駆られていた。

(謝りたい……。でも、ちゃんとみどりと向き合ってからじゃないと、この想いは伝えきれない。言葉だけじゃ、届かない)

時計の短針が、九時を示した。

（おかしい……。何か、何かおかしいッ！）

カジノハウスの接客室では丈二が全身に汗をかいていた。薄暗く寒々とした部屋の中で、丈二の体は内側から燃焼するように火照っている。

「どうした？ そっちの番だぞ」

「わかってる！」

プレッシャーによる緊張の次に丈二を襲ったのは、正体不明の不気味な感覚だった。ゲームの流れが異様な空気を発し、丈二の呼吸を苦しめている。

負けているわけではない。しかし、心は敗北に近い状態になっていた。

「11だ！」

「次は俺だな。……残念、12だ」

11+12、合計は23。

「これで終了。俺の合計ポイントは36だ」

「……54」

ポイントは丈二の方が18多い。だが、最後の一枚で儲けは決定されるのだ。

「最後の一枚は……1。変化なしだな」

その通り。最後のカードが1では、18かける1で18の儲けにしかない。二千万が目標だと言うのにたったの十八万しか稼げないのだ。

（おかしい。今までならもっと一気に稼げたのに……）

時間ばかりが過ぎていき、一時間たって百万も稼げていない。勝っているのに儲けがない。それが、ギャンブラーにとって致命的な現象を呼ぶことを字一は知っていた。

第五十八話・崩壊する強運

丈二と字一の勝負は、ほんのわずかながら、丈二の方が勝っている。しかし、傍で見ている直人でさえ理解できる程、圧倒されているのは丈二の方だ。

「……6だ！」

「8」

初めのうちは、一回で30、40近く稼げていた。だが、回を重ねるごとに点数の差は縮まり、今では一回の勝負で20を超えることも少なくなった。

「それじゃあ精算だ。俺は41」

「クソッ！ 48だよ！」

勝ったはずの丈二が腹立たしげにテーブルを殴りつけ、最後の一枚を乱暴にめくる。

「……最後は2、か。7の2倍は14だな」

「た、たったの14万……」

交互にカードをめくりあうだけの単純なゲームが、すでに十回繰返されていた。しかし、この時点で、丈二の儲けはまだ300万にも達していない。

「さあ、十一回戦を始めようか」

トランプを全て裏返し、かきまぜる。字一もカードの扱いには長けているらしく、目で追うだけだはそのカードがどこにあるのか、看破するのは難しい。

「キング」

「……2、だ」

このゲームは、自分と相手のめくったカードの合計が自分の得点となる。せっかく自分が強いカードを引いても、相手が1や2といった小さな数字を引いては合計点数が少なくなってしまう。それが、丈二の儲けを少なくしている原因だった。

このゲームでの理想的な勝ち方は、相手のカードより一つだけ強いカードを引くことである。

「ジャック」

「……フフ、クイーンだ」

これで23ポイント、字一の得点となる。最終的には丈二の方が上回るものの、極わずかな差にしかない。

結局、十一回戦でも、丈二の得た金額は24万だった。

（ちくしょう、ちくしょう……）

（丈二君の、あんなに苦しそうな顔、初めて見た……）

「フフ。相当イラついているな、立国丈二」

一旦手を休め、字一が語りかけてくる。

「『サーティーン』に限らず、あらゆるギャンブルには『流れ』というものが存在する。今、お前は急速に流れを失いつつあるんだ」

「あ……？」

「お前がこの店でやったギャンブルの様子を見ると、大体、お前の偏才の正体がわかってきた」

声に低い笑いを忍ばせつつ、字一は淡々と話す。

「お前の偏才は、いわゆる一種の強運だろう」

「……」

「例えば、車を運転していて、赤信号に引っかかることの少ない奴。あるいは、大して勉強していなくとも、山カンだけで試験を乗り切れる奴。そういった強運の持ち主もまた、ある意味では才能だと言えるだろう。お前の偏才はそういうタイプだ」

冷静に話す字一に対し、丈二の体温は高まるばかりである。生まれて初めて体験する、『支配』の恐怖が鼓動を激しくさせていた。

「強運ゆえに、勝負には勝つ。素人相手ならまず負けはないだろう。しかしだ」

字一は、わざとゆっくり時間をかけてしゃべる。

「どんなに強運の持ち主だろうと、百パーセントの勝利など不可能だ。ただ、勝利する確立が凡夫より高いというだけなのだ」

正論と言えば正論だ。事実、丈二は全てのギャンブルに勝っているわけではない、時には負けることもあるからこそ、先ほどのカジノでも最初から大勝負をしなかったのだ。

「そして、強運は時間がたてばたつほど弱まって行く。勝負する回数が増えるほど敗北も増える。ゲームを左右する『流れ』とは、常に移動しているものだ」

「うる……せえ」

「初めはお前の方に傾いていた『流れ』も、中々勝てずに時間が過ぎて行けば徐々に俺の方へ傾いてくる。非科学的かもしれないが、ギャンブルとはそういうものだ」

「うるせえんだよ！」

丈二が叫び、強引に言葉を遮る。

「流れがなんだってんだ！ 小額でも、俺は勝ってるんだ！」

カードを裏返してまぜ、十二回戦を開始した。まず一枚選び表に返す。すると、自分の表返したカードを見てショックを受けた。

「あ……？」

「フフ。9だな」

これまで、丈二は先攻で必ずジャック以上のカードを引いていた。それが、今回は9である。

「次は俺だな……」

字一がめくる。12だ。

「これで21、先制したぞ」

先制――。字一に先に点をとられたのも、今回が初めてである。

（ウソだろ……？）

汗まみれの手でカードをめくる。が、またしてもカードは丈二を裏切った。

「さ、3だ」

「……4。合計7だ」

（ウソだ、何かの間違いだろ？）

どんなに頭の中で否定しても、現実是非情であった。

そして十二回戦が終了した。

「に、20……」

「悪いな。俺は58だ」

その差は38。さらに、その倍数を決める最後のカードが――。

「……思い知れ、立国丈二。これが……『流れ』だ」

字一の白く長い指が最後の一枚をめくる。カードが表に返った瞬間、丈二は悲鳴をあげた。

「あぁッ！」

キング。13を意味する、最強のカードだ。

「13かける38。……494ポイントだ」

「よッ……!？」

直人もひきつった声をあげる。

今までの儲けがたった一回で消し飛んだ。消えたところではない。

「お前の最初の持ち金が500。今までの勝負で稼いだのがおよそ300だったな。これで残りは300ってわけだ」

「バカな……ありえない」

丈二が半ば無意識につぶやいたのを、字一は聞き逃さない。

「ありえるのさ。ギャンブルという世界では。……ところで、忘れちゃいないだろうな？ その300が溶けてマイナスになったら…

∴
└

容赦はしない。さらなる追い打ちをかけ、徹底的に丈二を追いつめる字一であった。

第五十九話・分析

虫の鳴く声がする。体が宙に浮いているような、地に伏せているような、奇妙な感覚の中で丈二は目を覚ました。

「ん……」

「あ、起きた？ 丈二君」

目の前に直人の顔があった。その後ろに、満天の星空が見える。

「あれ？ 俺、どうしたんだ……？」

確か、さっきまで字一と勝負をしていたはずである。思い通りに進まぬ展開、そして突然の逆転——そこから先は覚えていない。

「気絶したんだよ。それで、ここまで運んで来たんだ」

二人がいるのは、カジノハウスのあるビルの裏手だった。

「気絶……？ うっ!？」

のどの奥から、酸味と苦味の混じったものが込み上げてくる。同時に、自分の口元に異様な臭いが漂っていることに気付いた。

「落ち着いて！ まだ吐き気が……」

「吐き気……」

その言葉で、唐突に思い出した。数分前、自分の身に起こったことを。

『さて、続行するか。お前の番だぞ』

一気に逆転を成し遂げた字一は、笑みを浮かべながら言った。

『早くしろよ。十三回戦の始まりだぞ』

『ま、待って!』

たまらず、直人が叫んだ。

『せつ、先攻と後攻を入れ替えよう……入れ替えてください!』

『……ほう?』

このままではいけない。少しでも『流れ』を変えようとする精一杯の努力だった。しかし……。

『もう遅いな』

楽しむように字一は言った。その視線を追ってテーブルを見ると、丈二はすでにカードを表にしていた。6、だった。

『丈二君!』

『フフ。ずいぶんと強運が細ってきたようだな』

『……』

丈二は言い返さない。いや、何も言い返せない状態だった。

『フフ。さあて、ここでもう一度デカイ勝ちを出せば、お前の所持金はマイナスに喰い込むな』

『ッ……！』

『おっと、8だ』

もはや義務的に丈二はカードをめくり、負け続けた。一枚めくるごとに絶望が吐き気を伴って込み上げてくる。坂を転げ落ちるように近づいてくる破滅の時。結局、十三回戦の結果は丈二のマイナス280となった。

『フッ。残り20、正確には26万だな』

『26……』

500の資金が、一瞬にして溶けた。

『忘れてはないだろうな。ここでのマイナスは、そのままお前の家族の負債額となることを。もっとも、重大なのはカタギとしての生命だろうがな。組に睨まれたとなるとカタギの世界では満足に生きられない』

『う……うう……』

不快な汗が全身から吹き出す。目の前の現実を否定したいがためか、徐々に視界が薄れていく。

『さて、十四回戦を始めようか!』

自分には負いきれない責任と重圧。思い通りにならぬ展開。圧倒的な『負』の感覚は丈二の肉体を内側から攻め、ついに『覚悟』を上回った。

『丈二君!』

直人が叫ぶと同時に、丈二の体はイスごと後ろへ倒れた。口の端から、胃液がゆるやかに流れ出ている。

『……おやおや。たった二人で組に勝負を挑んできたからもんだから、もっと骨のある奴だと思っていたが……。やはり、ただのガキだったな』

衝撃で散らばったカードを拾いつつ、字一は隠そうともせずに笑った。強圧なプレッシャーで気絶した丈二を見下ろし、高らかに勝利を宣言する。

『立国丈二、陥落。ま、最終的に負債を抱えずに済んだだけマシだったな』

(丈二君が……こんなに……)

直人は慌てて丈二に駆け寄り、白目をむいた頭を抱き上げた。

『これだけやっておけば十分だろう。積里直人。そいつを連れてさっさと出て行くんだな』

背中側だけ北極の海に濡らされたような寒気が直人を襲う。しかし、それと同時に、熱いものが胸の内に湧き上がってきていた。

（許さない）

直人は字一の顔を睨みつける。これまで丈二や結子の後について行くだけだった直人が、はっきりと敵意と怒りをむき出しにしていた。

（……虚勢だ。コイツには何もできない）

字一の目には嘲りが浮かんでいる。

『それじゃあな』

二人に背を向け、奥の部屋へと去って行く。その後ろ姿を、直人はじっと睨み続けていた。

「……カッコ悪いとこ見せたな」

ようやく吐き気の収まった丈二が力なく笑う。

「負けた。完全に、翻弄されちゃった……」

ガツクリと頭を落とし、うなだれる。そんな丈二とは逆に直人の目には光が宿り始めていた。

「丈二君。ちょっと、思ったんだけど」

「あ？」

「字一さんは、どうやって丈二君から流れを奪ったんだろう」

真剣な顔つきで、脳を回転させる。

「勝っているのに儲けがない。そういった状況が流れを失くすってことはわかる。でも、どうやって儲けを少なくさせたのか……」

「直人？」

「たぶん、それが字一さんの偏才に関係あるんだと思う」

「なに……!？」

「あのサーティーンっていうゲームを選んだ理由も、偏才に関係していると思う。他のゲームにはないサーティーン独特のルールが、字一さんの偏才を活かすのに適しているんだ」

人の心は不思議なもので、今まで冷静だった人間が取り乱すと代わりに他の人間が冷静になる傾向がある。光助から丈二へ、丈二から直人へと、それが行われたらしい。

「考えるんだ。サーティーンの特徴と、さっきのゲームの内容から字一さんの偏才を看破しよう!」

「直人……」

夜の街中で、丈二の目には、直人の背中がほんの少しだけ大きく見えた。

第六十話・その正体

「ジョーが？ ……うん。わかった」

直人からの電話を切り、結子は自分の動悸が早まっていることに気付いた。

（ジョーがトランプで負けた……。まさか、それほどの相手だったの？ 明石字一……）

電話を受けても、結子はすぐにはその場を動かなかった。

（みどり……）

室内からは相変わらず物音が響いてくる。みどりはまだ部屋の中にいるようだ。

「……聞いて。みどり。あなたのお兄さんが、うちのメンバーを退けたわ」

中からの反応はない。しかし、一瞬物音がやんだことから察すると、一応聞いてはいるようだ。あくまでも結子の解釈だが。

「私は、今からメンバーのところに戻らなきゃいけない。だから……今日は、これで帰るわ」

鍵のしまった扉に向かい、のどの奥から搾りあげるような声を発する。

「でも、明日も来るから！ その次の日も、その次も……！ ちゃんと、みどりが私の方を向いてくれるまで、何度でも来るからね……！」

「……」

「それじゃ……帰るね」

部屋の中ではみどりが黙って座り込んでいた。結子の言葉を聞き、やがて足音が遠ざかって行くのも聞いた。完全に足音が聞こえなくなって、ようやく立ち上がり、部屋を出て行く。

「結子」

さっきまで結子が立っていた場所に向かい、そっと話しかける。

「……結子」

それ以上、言葉は出せなかった。のどに言葉が張り付き、口から出ることはなかった。

「もう大丈夫？ 丈二君」

「あ、ああ。もう吐き気はない」

カジノから敗走した二人は、そのまま図書館へと来ていた。少しでも記憶が鮮明なうちに字一の偏才を見破るためだ。

「吐くもん吐いて楽になったら、色々と思いだしたことがある」

テーブルの上に13枚のカードを並べ、ゲームの再現をする。

「まず、最初に先攻と後攻を決めるときだ。アイツはわざと俺に選択権を譲った」

「それで丈二君は先攻を選んだ」

「俺の性格なら先攻を選ぶってわかってやがったんだ。自分から後攻になるって言いだしたんじゃあ怪しまれるからな」

「じゃあ、字一さんは最初から後攻になりたかったってコト？」

直人も一度「先攻と後攻を入れ替えてくれ」と字一に頼んだが、そこまでは考えていなかった。ただ単に少しでも変化をつけたかっただけだったのだ。

「あのゲームは、先攻が強いカードを取ったからといって必ずしも大敗するわけじゃあない。わざと弱いカードを引いて合計値を少なくすれば被害を最小に抑えられる」

「でも、そんなに都合よく弱いカードを引ける？」

「それが、アイツの偏才に関わってるんだと思う。とにかく守りに徹していれば、時間が経つと同時に俺の強運は削がれていく」

悔しげに机を叩き、歯をきしませる。その様子は、考えなしに飛び込んだ自分を呪っているようにも見える。

「相手は俺の家まで知ってた。カジノでの様子から、俺の偏才の正体もバレていた。もっと警戒するべきだったのに……ちくしょう」

「どっちみちあの状況じゃ逃げられなかったよ。……あっそういえば」

「どうした、直人」

「字一さんは何で丈二君の家族の写真を持っていたんだろう」

「そりゃ……組の人間に調べさせたんだろ。俺にプレッシャーかけるためによ」

忌々しく応える。が、直人は冷静だ。

「前にさ、光助さんが言ってなかったっけ。確か……僕の携帯が奪われた時に。相手は僕たちのことをある程度知っているって。あの時点では字一さんたちは鳴峰組と接触してないよ」

「そーいやあ、確かな……」

「僕の携帯からボスさんの居場所を調べたことを考えても、字一さんは情報収集に関する偏才だと思ってたんだ」

「情報収集ねえ……犬野朗にはムリだろうし、みどりちゃんも違ってみてえだしな。けど、それじゃあサーティーンでの勝ち方が説明できねえぜ」

情報収集とギャンブル。材料はこれだけだ。

「何だろうな。カードになにか情報があるってか？ いや、ガンはなかったしな……。はあ、俺がもっと用心してりゃあ、こんなことにならなかったのになあ……」

丈二はまたも落ち込みだしている。

「それを言ったら、ボスさんの居場所がバレたのは僕の携帯のせいだし」

「携帯か……。あれ一つで多くの情報が入ってるって光助が言ってたな」

「多くの情報がなんだった？」

直人の言葉ではない。やや沈みがちながらも、伸びのある声だ。

「平崎さん！」

「結子。……どうだった？」

「ん」

結子は首を横に振る。が、その目には消沈していない。

「何の話してたの？」

「字一さんの偏才について、ちょっと……」

直人が手短に説明すると、結子もまた腕を組んで考えだした。

「うーん、確かに短期間であれだけの情報を集めるってのも何かしらの才能が必要っぽいしねえ……。でも、具体的に情報収集の才能ってどんなんだろう？」

「あ？」

「パソコンのハッキングが上手いとか？　でも今の情報化社会じゃあ、特別珍しいってわけでもなさそうねえ。ただ闇雲に情報を集めるだけなら誰でも……」

「闇雲に集める……」

そして、的確に目的のカードを見抜く才能。直人の中で何かがあった。

「情報の中から……見つける。見つけ出す才能、だとしたら」

「見つけ出す？」

「多くの物や情報の中から、自分に有益なものだけを選んで取れる。そう言った『選択』の偏才」

時計が、十時を回った。

第六十一話・懷刀の重み

「すでにお聞き及びでしょうが……昨晚、立国丈二を退けました。これで奴らは我々に刃向かって来れないはずです」

「うむ。上出来だ」

サーティーンの勝負があつた翌日の夕方。鳴峰組幹部の風三は満足げにうなずいた。

「例え一般人だろうと、捨て身でかかってこられたら厄介だからな。戦意を喪失させたのは大きな功績だ」

「ありがとうございます」

表情には出さないが、字一も心の中で笑っていた。——これでも、鳴峰組の幹部に近付ける。

「相手の最も得意とする分野で勝負し、返り討ちにする。それが最も効果的だ。これも、妹君の意見かね？」

「いえ、この件に関して、妹はノータッチです。妹には……カタギであって欲しいので」

そう言ったものの、みどり自身はそう望んでいるのか、字一もよくわかっていない。むしろ積極的に裏の世界へ踏み入ろうとしているようにも見受けられた。

「ところで、ウチのバカ息子達はどうしてるかな」

「さつき様子を見に行きました。大人しく謹慎しているようです」

「ほう。あの光助がね……」

九断が少し意外そうにつぶやく。

「後で我々も説教しに行くかな。では、字一君。今日は休みを与えるから早めに帰りたまえ。毎晩遅いと妹君も心配だろう」

「はあ……」

確かにここ数日、みどりとともに会話をしていない。カタギの道を行くのかどうか、一度確認すべきだと字一は判断した。

その時だった。閑静な屋敷の廊下を慌ただしく走る足音が響いたのは。

「明石字一さん、おられますか！」

部屋の前に到着した組員が、閉じた障子に向かって声をかける。

「何か御用ですか？」

「一番街のカジノから連絡がありまして……立国丈二と積里直人が再び訪れたそうです」

「なに!？」

字一だけでなく、九断、風三も同時に顔を見合わせた。

「アイツらが？」

「ええ。今のところ、受付のところで待機させておりますが……。いかが致しましょうか」

予想外の出来事だった。あえて丈二の得意分野で敗北させ、心を折ったつもりだったのだ。

「アイツは学習能力がないのか？ なぜリベンジなど……」

「我々が彼らに与えたチャンスは一度きりだ」

考え込む字一に代わり、風三が応対する。

「そのチャンスはもう終わった。彼らの要求を飲むことは二度とない。追い返せ」

「はっ。ではそのように伝えます」

報告をしに来た男が頭を下げ、立ち去ろうとした時――。

「まっ、待ってください！」

字一は叫んだ。

「風三さん、九断さん。もう一度、チャンスをやれませんか？」

「なに？」

「昨日アイツらをカジノに入れたのは、奴らの戦意を失くすためです。それなのに再び現れたということは、まだ奴らに戦意があるということ、私の働きが不十分だったということです」

「……」

幹部二人に向かって頭を下げる。

「今奴らを追い払っても、何度でもしつこく食い下がってくるでしょう。今度こそ、私が完全に立国丈二の心を折ってみせます」

「……今の言葉をそのまま受け取ると、昨晚、君は仕事をしくじったということになるが……」

「結果としてそうになりました。だからこそ、もう一度勝負を受けたと思います」

多少のマイナス評価はこの際仕方ない。しかし、あれだけ叩きのめした丈二に再戦を挑まれるのは、字一自身のプライドに関わる。

「お願いします」

「……」

幹部二人は、しばし無言で目を合わせる。が、最後は字一の意見をかった。

「いいだろう。彼らについては、君が一番よく知っている」

「ありがとうございます」

「ただし……」

風三がそう言うと同時に、九断が懷から棒状のものを取り出した。
「写真や金での威しで失敗したのなら、今度はこれを使って追い込むしかないだろう」

九断が字一に手渡したのは、九寸五分の短い日本刀——いわゆる、『ドス』であった。

「一度ならず二度までも我々に勝負を挑んできたのだ。もはや完全に……敵と見なすべきだろう」

「……ッ」

鳴峰組の代紋である二条滝が彫られた鞘。その中に収められているのは紛れもなく本物の刃である。

「連中が負けたら、そいつで制裁を加えなさい」

「制裁……」

「命を奪う必要はない。指の一本でも落とせば十分だ」

ゾクリと、字一は寒気を感じた。指一本。一昔前の映画のような断罪を、自分の手で行わなければならない。刃物だ。扱いを間違えれば何が起こるかわからない。

「どうした？　震えているぞ」

字一の心を見透かしたように風三が声をかけてくる。

「い、いえ。大丈夫です。……必ず、やり遂げて見せます」

流れる汗を悟られぬように拭い、ドスをスーツにしまう。重い。刃物の重みだけでなく、自分のやるべき行動の重みまでもが、字一の胸に押し付けられた。

「丈二と直人をカジノに入れてください。他のギャンブルを一切させず、すぐに接客室へ通して」

「承知いたしました」

廊下にいた男が引きさがって行くのを待ち、字一も部屋を出て行った。

（……アイツらが悪いんだ。組の人間に手を出してきたからには、覚悟を決めているはずだ）

そう思い込んだ。それが、字一自身の覚悟が定まっていない証拠だと気付かずに。

第六十二話・バー『トラルク』

字一は車から降り、関係者用の出入り口からビルに入った。裏稼業特有の薄暗い雰囲気漂う中、エレベーターで4階へ上がる。

「待たせたな」

接客室に入り、待機させられていた二人に声をかける。二人とも学生服のままだが、立国丈二は野球帽を被っている。

「意外だったよ。あれほどの醜態をさらしておきながら、よくもまあノコノコと挑んで来れたな」

すでに勝負は始まっている。丈二がプレッシャーに弱いことは昨晚の勝負で実証済みだ。

しかし、丈二は少しも怯まなかった。むしろ逆に笑みさえ浮かべている。

「早とちりするなよ。今回勝負を挑むのは直人だ」

「な……ッ!？」

予想外だ。見ると、積里直人も力強くうなずいている。本当にそのつもりらしい。

（バカな……。トチ狂ったのか?）

字一は当然、直人に対しても調査を行っている。その結果、多少

生活力が高い程度で、特別な偏才はないように思われた。

（丈二ですら俺には敵わなかったんだぞ？　今更一般人に何が出来るというのだ）

もしや自分が見落しているだけで、直人には偏才があるのか？
そう考えていると、当の直人が口を開いた。

「今日は……僕が勝負します。勝負種目は昨日と同じサーティーンですね」

（何だ？　この余裕は。ただヤケになっているのか、それとも何か勝算があるのか……）

その時、ふと字一は思いついた。勝負の前に確認すべきことを。

「勝負自体は構わない。が、タネはあるんだろうな」

タネとは、勝負にかける金のことである。昨日丈二がカジノで儲けた500万はほとんどが消え、今日はカジノフロアでの勝負をさせていない。金は残っていないはずである。

「……昨日の残り、26万と僕たちがそれぞれ下した預金。合わせて100万はあります」

「100万？　正気か……」

あまりにも少なすぎる。『サーティーン』では一回の勝負で200、300もの金が動くのだ。100万では一回負けただけでマイナスになってしまう。

「それでどうにかなると思っているのか。話にならん」

「なります」

直人は自信あり気に言いきった。

「ただ、僕たちには保障がないんです」

「保障？」

「もし仮に2000万分勝ったとして、その後、ちゃんと要求を受けてもらえるのかわからないじゃないですか。最悪の場合、無事に帰してくれないということも……」

「我々が……決まりを破るというのか！」

字一は思わず声を張り上げる。

「ふざけるな！ 負けたからといって暴力に訴えるようなことをするわけがない！」

組としての威信もさることながら、字一個人のプライドも相まってつい大声になってしまう。

「我々がそんな血なまぐさい『力』を使うのは……敗者に対してだ。相手に負ければ間違いなく要求は飲む。ただし、勝ったら……」

スーツの内側から、木製の鞘に収められたドスを取り出す。

「指一本を落とせ、と命令されている」

「……ッ！」

刃物の登場で、直人と丈二にも緊張の色が走る。しかし、直人は懸命にそれを隠しつつ、字一に交渉する。

「それは、わかっています。でも念のため、場所を変えてください」

「場所？」

「この部屋でなく、もっと人の多いところ。多くの人が見ている場所
所で勝負をしましょう」

「……」

この要求に対し、字一は思考を巡らせる。

（人が多ければイカサマや暴力を封じられる、とでも考えているのか？ 浅はかな。元々イカサマなど使っていないし、負けを暴力で
ごまかすつもりもない。無意味だ）

自分にデメリットはないと判断し、字一は受け入れた。そして勝負の場はこのビルの一階にあるバーに決まった。

「あの店は客同士がカードで遊んでいることも珍しくない。気兼ねなく勝負できるだろう」

勝負の場選ばれたバー『トラルク』は、中世ヨーロッパをモチーフにした渋い内装が特徴的である。落ち着いた大人のムードある

店として会社帰りのサラリーマン達には好まれているが、未成年者の丈二と直人は少し緊張気味である。

「ここも一応組の管轄だが……それほど深く干渉しているわけじゃない。安心して勝負するがいい」

店の最も奥のテーブルに二人を案内し、近くに座っていた中年の男に声をかける。

「すみませんが、ディーラーをお願いしてよろしいですか？」

「ん？ ……ああ、構わないよ」

第三者にカードの配列を任せる。これも直人の提案だ。

「しかし、君たちみたいな子どもがなんで……」

そう言う中年男に、字一は名刺を見せる。それ以上の説明は必要なかった。

「もたもたと時間をかける必要もない。さっさと始めようか」

「ええ。それじゃあ先攻と後攻を……」

「それは俺が決める」

「え？」

直人が驚いて目を丸くする。昨日は丈二に選ばせたはずである。

「前はそっちに選択させたからな。今日は俺が決める」

字一がそう主張したのも、一つの理由があった。

（なぜ俺にリベンジを挑むのか。何か勝算があるはずだ。……おそらく、俺の偏才に気付いたのだろう）

明石字一の偏才――それは直人の予想通り、『当たり』を引くことであった。後攻の方が偏才を発揮できる。直人は字一に先攻をさせるつもりだったのだ。

「俺が後攻だ。さあ、早く始めよう」

中年男にゲームの説明をし、カードを並べさせる。かくして、二度目の勝負が始まったのであった。

第六十三話・明石字一攻略作戦

「先公とかに見つかると面倒だな」

そう言って丈二はサングラスをかけた。野球帽をかぶっていることから考えると変装しているつもりらしいが、学生服のままでは意味がないと思われる。

しかし、字一はそこまで気が回っていない。目の前に座っている直人の策を読むことに集中していた。

(……俺を先攻にさせるのは失敗したぞ。さあ、これからどうするつもりだ？ もっとも、もし仮に俺が先攻になったとしてもそれなりに別の戦法があったんだがな)

もしかしたら、勝負の取り消しを頼んでくるかもしれない。字一はそう思った。同時に、その頼みは絶対に受け入れないことも心の中で決めていた。

だが、直人は言った。

「わかりました。僕が先攻ですね」

何事もなかったかのような、ごく普通の声色だ。

「念のためにレートを確認してもいいですか？ 1ポイントが一万円。二千万分勝てば僕たちの要求を聞いてくれる、ですよね」

「あ、ああ……」

逆に字一の方が困惑してしまっている。

（本当に策があるのか？ それともただヤケになっているだけなのか？ わからない……）

こんな時、元彦ならすぐに見破れるだろう――。

一瞬、脳裏に浮かんだ考えを否定する為か、字一は語気を強める。

「……一回戦を開始する。カードを並べてください」

「ああ」

ディーラー役をかってくれた中年男がカードを並べ始める。ゲームの性質上きれいに並べる必要はないのだが、この男は几帳面な性格らしく、6枚、7枚の二列に並べた。先攻の直人の方が7枚だ。

「それじゃあ……始めます」

「頑張れよ、直人。俺はちょっとトイレ行ってくるから」

サングラスをかけたまま、丈二が席を立った。その行為がますます字一を惑わせる。

（いったいどういうことだ？ 少し負けただけで資金が尽きるんだぞ。金がなくなったらどうなるかもわかってるんだろうな！？ まさか、本当に指を落とすはずがないとタカをくくってやがるのかッ！？）

あまりにも敵の行動が不審過ぎる。当の直人は、並べられたカードをじっと見つめていた。

「何をしている。さっさと一枚めくれ」

「ええ、わかってます。でもここは慎重に行かないと……大事な勝負ですから」

目を凝らし、カードの絵柄を観察している。

（ガンを探しているのか。何回無駄だと言わせるつもりなんだ）

このカードはカジノから持ってきたものである。当然、字一はこのカードに印などつけていない。あくまでも己の偏才のみで勝っていたのだ。

そのまま五分も経っただろうか。ようやく直人は一枚を選択した。

「これにします」

めくったカードは……7だった。特別強くもなく、弱くもない。長い時間をかけた割には特徴の無い数字である。

（最初からこれを引きたかったのか？　だが、なぜこんな半端な数字を……）

いくら考えても、直人の狙いがわからない。圧倒的に優位なのは自分のはずなのに、なぜだが追い込まれている。

（……いや、もう考えるな。とりあえずは様子見だ）

字一はほとんど時間をかけず、ランダムに一枚をめくる。相手の正確な狙いがわからない以上、自分の偏才を披露することは避けたかったのだ。

「5だ。そっちの12ポイント先制だな」

まずは静かな出だしとなった。

二枚目の選択。直人は、さらに時間をかけてカードを見つめ続けた。

一方その頃、結子もまたリベンジを果たそうとしていた。闘いの場は明石兄妹と俊のアジトだ。昨日と全く同じ状況で、結子は立ち尽くしている。

（積里君、大丈夫かな）

直人の『作戦』は結子も知っている。目の粗く不完全な作戦だと知っているばかりに、かえって心配になってしまう。

だが、その心配ばかりしているわけにもいかない。自分自身も難解な事態に面しているのだ。

相変わらず部屋の中ではみどりが物音を立てている。どちらも無言のまま、静かに時間が流れて行った。

「10です」

「……キングだ」

直人の合計点は39、字一は50だった。差は11。

「一回戦は俺の勝ちだが……」

字一の長い指が最後の一枚をめくる。2だった。

「金額は22万。これでお前の所持金の5分の一が飛んだぞ」

このゲームにしては小さな額になったが、直人の軍資金は100万しかないのだ。十分な痛手である。しかし――。

「そうですね。それじゃあ二回戦にいきましょうか」

直人はまだ落ち着き払っている。初めは見せていた緊張の色も、ほとんど消えかけている。

（一回戦では特に何も不審な点は見つからなかった。ただ、妙に時間がかかったが……それだけだ）

直人がカードにガンをつけていた様子もなかった。

「では、二回戦のカードを並べます」

中年男がカードをシャッフルし、テーブルに並べ出す。いつの間にか、直人の周りには数人のギャラリイが集まっていた。この店でのギャンブル自体は珍しくないが、直人の学生服が目立っているの

だろう。

「……ああ、二回戦を始めよう」

字一は額の汗をさりげなく拭いつつ、グラスを傾けた。グラス越しに、野球帽にサングラスをかけた男がやってくるのが見える。

（立国丈二。昨日、もっとアイツを追い込んでいればよかった……）

丈二が、ギャラリーをかきわけてテーブルに近付いた。

第六十四話・惑わせの魔物

二回戦、ここでも字一は様子見に徹した。しかし、やはり直人の狙いは読めず、ただ無作為にカードをめくるだけの勝負となった。

結果は8ポイント、字一の得点となった。

(……潰そうと思ったらいつでも潰せる。だが、コイツの策を看破できないまま終わるのは癪だ)

三回戦を始める前に、ディーラー役の男がテーブルからカードを回収する。そしてカードをシャッフルしようとした時、男の背後から手が伸びてきた。

「こっちを使っは？」

やや小柄で、髭を生やしたサラリーマン風の男だ。その手に、トランプのカード―エースからキングまでの十三枚があった。どうやらゲームに使用せず、隣のテーブルに置いていたあまりのカード束から持って来たらしい。

「ゲームが終わるたびにシャッフルしては時間のロスでしょう。二組を交互に使ってはどうです」

やけに陰気な声でそう言い、中年男にカードを渡す。

それらの出来事は、字一の視界に入っはいた。が、字一の意識はそんなところには向いていなかった。

「それでは、三回戦のカードを配ります」

中年男が、手渡されたカードを並べ始める。先ほどと同じく、几帳面に二列に並べている。

「僕が先攻ですね」

直人は座ったまま腕を組み、またもや長い時間をかけてカードを睨みつける。

（……奴がカードに触れるのは、自分の番が来て一枚表返すときだけだ。今までの二回戦を見る限り、コイツが新たにガンをつけたり袖の下から別のカードを出したりはしていない）

「10です」

直人の選択したカードは10。やや強い方の数字だ。

（少し、試してみるか）

字一は、この三回戦でようやく己の偏才を発揮することに決めた。深く呼吸をし、カードの絵柄をじっと見つめる。ちょうど、直人がやっていたのと同じような格好だ。

（10よりも強いのは……このあたりか）

二列に並んだカードのうち、字一から見て奥の側にある列の一番壁際を選択する。

「……ジャックだ。合計21ポイント」

まずは字一の先制となった。21は比較的大きな勝ち方である。

「二枚目。……エースです」

（エース？ 最弱のカードじゃないか。わざとこれを選んだのか、それともただの偶然なのか……）

字一も二枚目をめくる。3だった。これでさらに4ポイント追加。字一の累計得点は25となった。

「三枚目です」

相変わらず直人は時間をかけて選択する。その様子を見て、ふと、字一は思いついた。

（コイツ……時間稼ぎが目的か？ 何かを待っているのか？ 誰か……誰かがここに来ることで、自分が有利になるのか……。待てよ、もしかして！）

冷たい汗が字一の背中を流れる。

（本部から直接、元彦と光助を奪還するつもりかもしれない。平崎結子、あの女がいる。……だが、そんなことが出来るのならとっくにやっている。直接本部に乗りこめないからこそ、コイツらは俺に勝負を挑んでいるんだ。そう、そうに決まっている……）

少しでも疑いの心を持つと、どんなに理屈をつけても心の底で納得できない。疑心暗鬼はギャンブルに巣食う魔物だ。

「2、です」

　　「またも弱い数字だ。」

（クソ、疑うのは一時中断だ。まずは目の前の敵……直人を完全に潰す）

　　「もはや気に入くわないなどと言ってられない。出来るだけ早く直人の資金を奪うことにした。」

（相手が2だと、キングを引いてもポイントが少なすぎる。ここは小さな数で勝つのがいいだろう）

　　「字一の引いたカードは4。これで累計は31。」

（向こうがクイーンを引いたらキングで潰す。いや、それともキングは倍数に使った方がいいか……）

　　「が、その思考がそもそも間違いであることに字一は気付いていなかった。」

　　「四枚目、直人が引いたのは8。」

（8か。仕方ない、クイーンかキングを……待てよ。上手く勝ちすぎている）

　　「一度は覆い隠した疑心が、再び湧き上がってくる。なぜか。直人がかすかに笑みを浮かべているからだ。」

（何だ、その笑いは……）

と、その時。ギャラリー達の話し合う声が字一の耳に飛び込んできた。

——さっきから、こっちばかり勝つな。——イカサマでもしてるんじゃないか？

(……なるほど、そういうことか)

わざわざ人の多い所で勝負をした理由。例え本当にイカサマをしていなくても、一方的な勝負展開になってしまっただけは疑われてしまう。

(イカサマの確証がなくても、疑いを持たれるだけで組の威信に関わってしまう。俺の圧勝を封じるための作戦、と言ったところだろう)

心の中で失笑する。その程度か——と。

(ま、確かにあまり圧勝しすぎるのはマズいようだな。ここは……)

カードを見つめ、一枚を選択する。

「7、だ。そっちの15ポイントだな」

わざと負け、イカサマの疑いを薄くする策に出た。

続く五枚目。直人は6、字一は5を引いて直人の11ポイントとなった。

（この程度負けてやれば、次は大きく勝っても………………。あ？）

ようやく気付いた。

（しまった……！ コイツ、低いカードばかり出すから失念していた！）

6枚目、直人が引いたカードは……13。キングであった。

（そうだ。コイツがキングを引くこともある……。こんな当たり前なことすら気付いていなかった……。クソッ、完全に空回りしている）

残ったカードはクイーンか8。どちらを引いても負けが確定する。

静かに、反撃は開始していた。

第六十五話・幹部出陣

第三回戦、残ったカードはあと二枚。字一がどちらかを選択すれば終了となる。

（……この時点でまだ出ていないカードは、9とクイーン。相手がキングならどっちを出しても負けてしまう）

字一が9を引けば22、クイーンを引けば25ポイントが直人に加算されてしまう。

（そして残った方の数字で倍数が決まる。12倍になることだけは避けなくてはならない）

カードを見、やがて片方を選択する。字一の偏才は的確に目的のカードを引き当てた。

「クイーンだ。三回戦、勝者はお前だな」

——おお、結構大きいぞ。ギャラリーの誰かが感想をもらした。どうやら、観戦しているうちにルールを理解してきたらしい。

「……俺の合計は31」

「僕は50です」

その差は19。最後のカードは当然9だ。

「19かける9は171。これで二回戦までのマイナスを帳消し、

さらに141の儲けを取ったことになったな」

出来るだけ冷静になろうと、声の調子を落としつつ、字一は計算した。だが、額に浮いた汗は隠しきれない。

（なんてことだ……。たかが100や200程度の負けなどということはないが、この俺があんなイージミスを犯すとは……。正常に頭が働いていない）

スーツの男がシャッフル済みのカードをディーラーに手渡し、四回戦のカードが並べられた。

（勝ちすぎるわけにもいかない。かといって、このままコケにされ続けるわけにもいかない。……。どうすればいいんだ）

もっとも字一の頭を悩ませているのは、直人がイカサマをしているのか、していないのか、ハッキリとわからないことだ。

（この場所を選んだのも、ディーラー役の男を選んだのも俺だ。そしてカードにガンもついていない。イカサマはどこにもないように見える……。が、何も考えずに勝負しているようにも見えない。何か勝算があるからこそ俺に挑んできているはずだ）

さっきから同じような思考ばかりが字一の脳内を巡る。まるで自分一人だけが周囲の世界から隔絶され、深い霧のなかにいるかのよう。

「……何か、起こっているようだな」

「ん？」

暗く、狭い離れ座敷の中で、元彦はつぶやいた。

「見張りの組員達がなにか話し合っている。少し緊張した様子だ」

「聞こえつとすけ？」

光助と元彦は、鳴峰組の離れ座敷にて謹慎の処分を受けていた。いや、幽閉と表現した方がいいのかもしれない。四畳半の部屋に昼夜閉じ込められ、トイレ以外では外に出ることが出来ない。食事も、朝と晩に運ばれてくるのみだ。数か月の謹慎を終えたら、本格的に組の下っ端構成員として働くことが義務付けられている。

「世に蔓延る引きこもり連中なら、かえって喜ぶ環境かしらん」

最初は軽口を叩いていた光助も、三日を過ぎると気分が陰鬱になってきていた。

元彦の方は孤独に慣れている。皮肉なことだが、二年間の隠居生活が元彦の精神を強くしていたのだ。そして、鉄の部屋の恩恵はそれだけではなかった。

「電話でしか人との交流がなかったせいか、聴力が鍛えられたらしい。この座敷から3メートルほど離れたところで、二人の男が会話している」

そう言われて耳を澄ますと、確かに人の声が聞こえる。しかし、会話の内容は光助には聞き取れない。

「何て言うちよりますか」

「俺も完全には把握できないが……緊急事態というか、何か不審な出来事が起こっているらしいな」

「緊急事態？　まさか、ジョー達やねえですかね……」

昨晚、二人の解放を賭けて丈二が字一に挑んだことは、二人も聞かされていた。当然その勝敗も。

「別ん殺されるわけやねっちゃし、アイツらが無理せんでんいいっちゃけんなあ……」

「ああ。彼らが俺たちのために傷つくのは、耐えられないな」

そう言うものの、昨晚の勝負が始まったという報せを聞いたとき、二人は淡い期待を抱いていた。組の力は決して甘くはないと知りつつ、心のどこかで勝利を祈っていたのだ。

「まこつ（本当に）、いいダチを持ったわ」

結果的に力は及ばなかったが、助けようという気持ち嬉しかった。

「待て、光助。少し静かにしてくれ……」

元彦が耳を澄まして集中すると、少しだけハッキリと声が聞こえるようになった。

『――が、なに――』

『字一さん――はず』

「字一……？ 奴に何かあったのか？」

さらに、会話している組員へと近付く足音が聞こえた。二人分だ。

『連れていくぞ』

聞き慣れている声のためか、その一言は確実に聞きとれた。

「ッ！ 父さんだ！」

「じゃあ、もう一人の足音はおりゃん親父け……？」

まさしくその通り、座敷に近付いて来たのは、鳴峰組の二大幹部・風三と九断であった。閉じた雨戸に向かい、声をかける。

「二人とも、出て来い！ 話がある」

「また説教け……」

明らかに嫌そうな表情で光助が立ち上がり、元彦も続いた。雨戸をあけ放すと、二人の父親が手にスーツケースを持って立っていた。

「なんね」

「今すぐ着替えろ。出かけるぞ」

スーツケースを座敷内へ投げ込み、そう言い放った。

「出かける？　どこへ連れていくつもりですか」

「行けば分かる」

それだけ言って風三は雨戸を閉める。

「……従うしかないな」

五分後、スーツ姿に着替えた元彦と光助、そして二大幹部を乗せた車が、鳴峰組の本部から夜の街へと出て行った。

第六十六話・流れの支配者

一般に、ギャンブルには『流れ』があると言われている。単純な計算や理屈だけでは説明しきれない、奇妙な現象のことをそう呼んでいるのだ。

例えば、ルーレットで赤が出る確率は二分の一。黒の出る確率も二分の一だ。単純に考えれば、赤と黒の目は同じ確率で出る。十回やれば五回は赤が出る、と考えてよい。しかし、時には十回中8回、赤が出ることもある。逆に黒ばかりが連続で出ることもある。百回、千回と繰り返せば最終的にほぼ五割になるのだが、十回程度では必ずどちらかに偏りが出る。

その偏り——赤が出やすい、といった状況を『赤の流れ』と言う。プロのギャンブラーはこの『流れ』を読み、次に出る目を予想するのだ。『流れが来る』とは、自分に都合のいいように偏りが生じること——『運がいい』『ツイている』などと同じ意味合いである。丈二の偏才は、トランプ・ゲームに関する『流れ』を自分に引き寄せることだった。

そして以前字一が述べたように、『流れ』は変わる。強気に出るべき場面で弱腰になったり、つまらないミスで大損してしまったりすると、この『流れ』は自分の元を離れて敵の方へ行ってしまう。

『流れ』を失ったものは大敗する。昨晚は丈二がそうだった。現在、字一がその状態に……なりつつあった。

(あんな……あんな下らない見落としを……この俺が……)

字一は、三回戦での失態を心の中で引きずっていた。思考を目の前の勝負に切り替えようとしても、苦渋がつきまとって離れない。まるで呪いのように、思考は同じところをぐるぐると回るだけであった。

「僕の合計は50です」

直人がそう言うのを聞いて、字一は四回戦が終了していることに気付いた。ほとんど惰性でカードをめくっていたらしい。

「……36だ」

最後のカードは5。14かける5、で70万が直人のものになった。現時点での直人の資金は最初の100万も合わせて311万となった。

「これで、残りのノルマは1689万ですね」

直人が確認してくるが、字一は答えない。

（コケにされている……この俺が、何の偏才も持たない小僧に負けている……。こんな、こんな屈辱は初めて……。ではない。あの時以来だ）

字一の脳裏に浮かんだのは、二年前のあの事件だった。下っ端としての不満から酒に溺れ、凶行に及んだ父。その父を容赦なく裁き、重圧から逃げて雲隠れした元彦。せめて妹のみどりだけは健やかなカタギの人間として生きてほしかったが、そのみどりもソフトをやめた。何もできない無力さを嘆き、復讐を誓ったあの感情が、再び字一によみがえりつつあった。

（許さん。俺達の人生を地に落とした元彦、そして元彦の手先となった奴ら。今度はお前たちが苦渋を味わう番だ）

怒りが、字一を支配し始めた。

（鳴峰の組員となることには成功した。ここから幹部へと這い上がり、組の実権を握る。そして奴らは俺の下で働くことになるのだ！）

そのつもりだった。そのためにハッキングの技術を身に付け、荒っぽい戦いの出来る俊を仲間にした。俊の犬をきっかけにして元彦の居場所を突き止めた時などはまさに有頂天だった。順調に回っているはずだった。このバーに来るまでは。

「五回戦だ！ さっさと始めるぞ！」

ここで負けては全てを失う。勝たねばならない。しかし、あまりに勝ちすぎでは、かえって組への不信感を募らせてしまう。今はまだ新入りにすぎない字一は、少しでも組からの評価を落とすわけにはいかないのだ。

「じゃあ、いきます」

直人が一枚目をめくる。いきなり最強のキングだ。

（キングだと？ ならば、最小のエースで合計を少なくするだけだ）

まさに狙い通り、字一はエースを引いた。

二枚目。直人が引いたのはクイーン。

（チッ……また、残りの中では最強のカードか……ならば、2を引いて……）

が、一旦伸びかけた手が止まった。この時点で直人のポイントは14。今引いた12を合わせれば26、字一が2を引けば28ポイントになる。

（キングとクイーンがなくなった状況で、28の先制点をひっくり返すのは難しい。残りの勝負を全勝するぐらいでなければならぬが、今の流れではそう上手くいかない）

事実、最強のカードを連続で奪われているのだ。

（仕方あるまい。この勝負も捨て、被害を最小にすることにしよう）
そうなると思数は小さい方がいい。字一は3を引いた。これで直人は合計29となった。

だが、三枚目以降はさらに字一の予想を超えていた。

「……ジャックです」

「なっ……！？」

またも、残った中で最強のカードだ。三回連続となると偶然とは考えにくい。

（どうなっているんだ！？ この異様な流れは……！？ まるで立国丈二がこいつに乗り移ったかのような……）

直人の隣に座っている、野球帽にサングラスの男を睨む。

（確かにこのゲームは、先攻が最強のカードを連続で引けば必ず勝てる。だが、そんなことは丈二のような強運がなくては不可能だ。今、丈二は全くトランプに触れていない）

昨晚丈二と勝負をした時は、先に他のギャンブルをさせることで運を消費させ、さらに頑なに守り続けることで少しずつ流れを奪ったのだ。

（今は違う。流れは奴に行ってしまったている）

流れを奪った魔物。それは疑心暗鬼だということに字一はようやく気がついた。

第六十七話・看破不可——焦燥

人生において最も酷い一日。字一はそう感じた。

（ここまで来て……こんなガキ共に邪魔されるとは……）

汗ばむ手で三枚目を返す。2を除いた中では最小のカード、4である。これでさらに15ポイントが加算され、直人のポイントは44となった。字一は0だ。

（なぜこんなことになったのか……。そうだ、最初の狂いはコイツのせいだ）

周りの人間に悟られぬよう、スーツの内側に手を入れる。なくなっているほしい、と字一は願ったが、無情にも懐刀はそこに存在していた。

（こいつを手渡された時から、俺は動揺し始めたんだ）

『指の一本でも落とせば十分だろう』

風三は平然と言い放った。幹部である風三と九断は、実際にそのような光景を目にし、時には自ら手を下してきたのだろう。だが、字一にとっては初めての経験である。

（指を落とせ、だと？ ……覚悟はしていたつもりだったが……）

字一は本来、殴る、刺す、などといった暴力は好まない性格である。だからこそ俊を仲間に入れたのだ。

（もしかしたら俺は、無意識のうちに負けを望んでいるのか？ ドスを抜かないですむよう、知らず知らずのうちに負けたがっているのか！？ バカな、ここで負けてしまっただけは全てが水泡と帰してしまふというのに……）

だが、事実負けている。この五回戦も敗北が既に決定してしまっている。

「10です」

またもだ。直人は強いカードを上から順に引いている。

（クッ……流れは完全に奴のもの……。ならば、守備に徹底するだけだ）

倍数を2にするため、字一は5を引いた。さらに15ポイント加算となる。

（仮に、2以外の全てのカードを取られたとしても89ポイントだ。二倍しても178の被害で済む）

が、そこにもまた見落としがあった。

四枚目、直人が引いたのは予想通りの9。字一は6だ。残ったのは2、7、8の三枚。字一の予想では、直人は8を引くことになっていた。もはやここまで来ると偶然では済まされない。何かしらのイカサマを用いて、必ず最強のカードを引けるようになっていたのだろうか。と確信したのだ。

それが見落とした。

「最後……2、です」

誤算。直人は、字一がわざと最後まで残していたカードを取ったのだ。

（2だと……？ バカな！ それじゃあ……）

慌てて字一もカードをめくる。8だった。10ポイントが字一のものとなる。

「僕の得点は64です。差は54ですね」

（しまった――）

最後に残された一枚。見なくともわかる。7だ。

「54かける7は378。これで僕の勝ち分は合計689です」

――おお、スゴいぞ！ ギャラリーがどっと沸いた。彼らは直人達の目的こそ知らないが、今の一回が大きな前進となったことは伝わっているようだ。

「ノルマの三分の一を越えました。このまま続行し……」

「待て！」

字一が、直人の言葉を強引に遮った。あまりの剣幕のせいで、瞬時に周りのギャラリーも凍りつく。

「おかしい、不自然すぎるぞ」

「……」

「イカサマがないか、調べさせてもらう！」

中年男が回収しかけたカードを奪い、裏返しにして絵柄を見る。
ガンが本当についていないのか、確認するためだ。

——確かに、今は強いカードばかり連続だったな。——いや、こっちの方も、下からほぼ順番に取っていたぞ、たぶん。そんな声が聞こえるのをよそに、入念にカードをチェックする。しかし、どこにもガンらしきものは見つからない。

（他には何が考えられる？ デイラーの男は俺が選んだんだ。直人に都合よく配るはずがない。……第一、シャッフルしたカードの順番を見もせずに把握し、どこにどのカードを配ったのかを密かに伝えるなど困難だ。丈二のような強運の持ち主でない限り、カードの並びをコントロールするなど不可能に近い。丈二は直人の隣に座っている）

いくら考えてもイカサマの手口がわからない。

しかも、時間をかけるほど、場の空気が悪くなってしまふ。負けを素直に認めない小心者——そんな目で字一を見るギャラリーが出てくる。そんなことはプライドが許さない。さらに都合の悪いことに、組の人間である字一がイカサマをやると組全体の威信にかかわるが、一般人である直人がイカサマで組員を倒すことは、逆に英雄視されてしまふ。

「……中断してすまなかったな。再開しよう」

だが、イカサマの疑惑を晴らしたわけではない。直人の行動に不審な点がないか、字一は監視することにした。

（さっきのようなことを繰り返されるとあつという間に負けてしまう。何とかしてイカサマを見抜かなければ……!）

残された猶予は1311万。下手をすれば4、5回程度で完全敗北となる。

（なぜだ、なぜ直人は強いカードばかり引けるんだ!）

六回戦、直人の引いたカードは……やはり、キングだった。

「このクソガキがッ！ 必ず打ち負かせてやる！」

声を張り上げて威嚇するも、動揺したのはギャラリーばかりで直人は無反応である。

字一がカードをめくろうとした頃、ビルの前に黒塗りの高級車が停まった。

第六十八話・発覚

数分前、鳴峰組から出発した車の中で次のような会話があった。

「光助……今一度確認したいことがある」

光助の父・九断は隣の座席に座っている息子に声をかけた。運転席との間には防音機能付きの仕切りがあり、風三親子はもう一台の車に乗っているため、この声は九断親子にしか聞こえない。

「お前、本当に組員になるのが嫌なのか」

「……嫌、ちゅうてん、無理やりさせつとやろう」

「無理やりさせられるとわかっていているなら、なぜ反抗する。お前さえ望めば、明日にでも謹慎を解いて働かせてやるというのに。……当然、高校は中退になるがな」

会話をしているが、二人の視線は合っていない。光助は窓の外を、九断は前方を見ながらしゃべっている。

「わかつちよってん、氣にくわん」

「何故お前がこんな状況にいるのか、それはわかっているんだろうな」

タバコを取りだし火を付ける。ゆっくりと煙を吸いつつ、なおも九断は言う。

「元彦君が逃亡するのを協力したからだ。珍しくお前が搜索を手伝ってくれると思っていたが、まさか我々の目をごまかすためのカモフラージュだったとはな。大した度胸だが……当然、それは罪だ」

「……」

「お前にはこの世界で生きていくための掟を何度も教えたはずだ。規律を守り、一度背負った責任は最後まで貫き通せ、とな。その掟を守れないただのチンピラが多い今の世代にこそ、きちんと掟を守る人材が必要だ。俺はお前をそうしたかった」

「勝手にな……」

繁華街のネオンが、光助の顔をまだらに照らす。その表情には、図書館にいた頃の飄々とした軽さがなかった。

「もう一度だけ聞かず。お前、組で働くのが嫌か？」

そう言って、初めて九断は息子の方を向いた。しかし、光助は外を見たまま答えた。

「鳴峰組が嫌いなわけやっちゃない。……アンタが嫌いやとよ」

車が、ビルの前についた。

ビルの一階では、すでに勝負が決まりかけていた。

六回戦は、五回戦とほぼ同じ展開になった。しかし、字一が1と2の二枚を最後まで温存したため、最終的には142の損失を抑え

ることが出来た。これで直人の所持金は823万。

さらにイカサマが見抜けぬまま、七回戦、八回戦が過ぎていった。全くなす術がない字一は焦りのためかミスを重ね、九回戦が終了した時点で1500万の負けになってしまった。

「あと二回か三回で終わりですね」

勝ち誇るような（少なくとも字一にはそう感じられる）口調で直人が言った。

「……バカな。次は、次こそは……！」

そう言い続けて、負け続けている。もはや誰から見ても「詰み」の状態だ。勝負の熱気だけが精神を支配し、冷静にものを考えられなくなっている。

「それじゃあ十回戦を始めます。ですが、念のためにもう一度確認です」

直人は容赦しない。絶対に負けられない状況にあるのは直人達も同じである。

「僕があと500万稼いだら、二人を解放してくれるんですね？」

「うるさい！ 早く次のカードを……」

「当然だ。我々の存在は礼儀の上に成り立っている」

低い声が字一の言葉を遮った。声のした方向を見ると、ギャラリ

―を押しつけて二人に近付いてくる四人の男たちがいた。いずれも見覚えのある顔だ。

「か、風三さんに九断さん！　なぜここへ……！？」

字一の悲鳴に近い声で、直人と丈二も気付いた。鳴峰の二大幹部と、その息子達。

「光助さん！」

「坊主……」

しかし、それ以上言葉を交わす前に、風三が場を仕切り始めた。

「明石字一君。どうやら君は、しくじったようだな。その汗まみれの顔を見ればわかる」

「し、しかし、まだ完全に敗北したわけではありません！　まだ500万残っています！」

「ほう。では、君はこの状況から逆転出来るのか？　確実に勝つ手段があるというのか？」

「それはッ……！」

言葉に詰まる。結局、字一はイカサマを見抜けなかったのだ。が、風三は瞬時にそれを見抜いていた。

「わからないのか？　この程度の安いトリックが」

「え？」

風三だけでない。九断も、あとの二人も気付いていた。混乱した字一だけが気付いていなかったのだ。

「君は確か……名はなんと言ったかな」

風三が声をかけたのは、直人の隣に座っているサングラスの少年だった。

「誰って、そいつは立国……」

そう言いかけて、ようやく字一は気付いた。

「！ 貴様！ 丈二じゃないな！？」

奇異な格好に騙された。よく見ると、顔の輪郭がわずかに違う。

「……」

観念したように、少年がサングラスを取る。紛れもなく、それは直人の親友——栄和仁だった。

「丈二は！ 丈二はどこに……」

探すまでもなくすぐに見つけられた。三回戦の前からランプのシャッフルを担当していた若いスーツの男。それが、度の入っていない伊達メガネとつけひげで変装していた、丈二だった。

「お前が……そこでシャッフルを……」

丈二の強運なら、自分の思った順番になるようにカードをシャッフルできる（さすがに52枚全ては不可能だが、13枚程度なら不可能ではない）。ディーラーの配り方も考慮してカードを並べ、狙った場所へ特定のカードを配置。直人は、ただ打ち合わせ通りにカードをめくっていただけ、だったのだ。

「俺が……俺が勝負をしていたのはお前だったのか、立国丈二……」
イカサマではない。純粹な偏才同士の闘いだった。

第六十九話・解放交渉

「貴様……こんな、こんな下らないイカサマを仕組んでいたのか！」
幹部の見ている前だということも忘れて、字一は声を荒げた。

「こんなイカサマ、認められると思うのか!？」

「イカサマじゃねえぞ」

変装を解いた丈二が反論する。

「俺はただ、カードをシャッフルしてディーラーに渡したただけだ。
カードの表を見ながら並べ替えたわけじゃあない」

「だが……」

「それにだ。仮にイカサマだったとしても、勝負の最中にそれを見
抜けないあんたが間抜けだったってことだ。イカサマは現行犯を捕
まえなきゃ意味ねえんだぜ」

「しょ、勝負はまだ続いている！ まだ500万……」

「もうよい。見苦しいぞ」

風三が議論を中断させた。

「彼の強運——偏才のことは我々も聞いている。だが、君の敗因は
それだけではないだろう？」

「う……」

「そもそもは、君の爪の甘さだ。念入りに警戒していれば問題はなかった」

ついさっき到着したばかりで勝負の過程を見ていないにも関わらず、風三は的確に字一の弱さを責めた。まるで初めから結果がわかっていたかのように。

「どっ、どっちにしろ、相手の策が割れた以上、俺に負けはありません！ 丈二がカードに触らなければ！」

「いいや、君は勝てない」

九断が冷たく言い放った。

「そんな……。か、必ず、ここから逆転してみせます！ 俺の偏才なら可能です！ 負けません！」

「負けるとは言っていない。勝てない、と言ったんだ」

「!？」

「君は、彼に勝ってその後の処分を出来るのかね？」

九断もまた見抜いていた。字一がドスを受け取る際、『力』の行使に抵抗を感じていたことを。

「あまり我々をなめないで欲しいな。字一君」

「数十年、裏の社会で生きてきた身だ。本物の覚悟と偽物を見分けることぐらい出来る」

（偽物――）

幹部二人の言葉が、次々と字一の体に突き刺さる。数時間前、本部にいた時とはまったく違う表情だ。

「組の代紋が入ったドスを受け取ったにも関わらず、君はそれを使うつもりになれなかった。覚悟がなければ拒否すればよかったのだ」

「執行からの逃避と責任の重圧が目を狂わせ、転げ落ちるように敗北した。わかるか？」

（バカな……あの状況で拒否など出来るわけが……）

唐突に、字一の脳裏に一つの考えが浮かんた。脳に弾丸を撃ち込まれたかのように、その考えは衝撃を伴って字一を襲った。

（俺は……試されていたのか。この幹部達に、テストをされていたというのか？）

「本当に残念だ、字一君」

（まさか――）

足元に、ぽっかりと穴があいたような感覚。直人達がカジノに現れたという報告を受けた時、字一は昨日と同じことをするだけだと思っていた。相手の戦意を削いでしまえばいいだけの仕事だと思っ

ていた。幹部二人は、字一への試練に利用した。

字一だけが何も知らなかった。直人達の策も、幹部の思惑も。

「まだ500万残っているな」

視線を字一から直人へと向け、風三は言った。

「約束通り、君があと500万稼げば二人は解放する。二人はそのために連れてきた」

「……ありがとうございます」

直人の表情には安堵の色があった。ハッキリと保障がついたからだ。

「さて、残りの500万を賭けた勝負だが……字一はもう使えない」
ビクリ、と字一が肩を震わせる。だが、風三は気にも留めない。

「代わりの者が勝負を引き継ぎ、続行する。構わないか？」

その質問は直人に向けられていた。しかし、それを遮る声が後ろから割って入った。

「……父さん。もう勝負は必要ありません」

元彦が、ここに来てから初めて口を開いた。

「一人分の金額は一千万でしょう。今の1500万で、光助だけを

解放してください」

感情のこもっていない、静かな声だった。いつの間にかギャラリ―たちも去っており、しばらくの間、沈黙が周囲を包んだ。

「……ほう。お前はいいのか」

「ええ」

「ボス。何を言いよつとですか」

光助が口を挟む。その額には、珍しく汗が浮かんでいる。

「今も見たやろ？　いくら綺麗事を言ってん、こいつらは信用したらいかん大人やぞ。そいつらん元で働くなんざバカげちよる」

「光助！」

九断が声をかけるが、光助はやめない。

「治安維持だのなんだと言うちよるくせに、自分の周りの人間すらまともに救えん。それがこいつらん正体や！」

「黙れ！」

「やめろ、光助。お前は逆らうな」

元彦が右手で光助を制する。

「全ての元凶は俺だ。それに、二年間も雲隠れしてしまった身分だ

しな。今更一般人には戻れない。お前はまだ間に合う」

「やけん……」

「父さん、九断さん。光助を解放してカタギにしてやってください」

元彦の目に迷いはない。かといって全てを諦めた顔でもない。穏やかな、運命を受け入れるような顔だった。

「わかった。受け入れよう」

「ほ、本当にいいんですか！？　ボス……」

丈二と直人が同時に叫んだ。が、元彦はそれも視線で制する。

字一だけが、顔を伏したまま動かなかった。

第七十話・想いの闘い

カジノビルでの闘いが終焉を迎えようとしていた頃、女の闘いにもまた変化が現れ出していた。

「みどり。ここで、何をしているの？」

「……」

「昨日……いや、一昨日から、誰も来ないその部屋で、いったい何をしているの？」

当然だが返事はない。しかし、いつも聞こえていた、あの物を引っかかり回すような音が聞こえてこない。

「ねえ、聞いて。今日はあなたに伝えなくちゃならないことがあるの」

結子は話題を切り換えた。みどりは一切返事を返さないが、それでも結子の話を聞いている、という実感はあった。

「今、私の仲間とあなたのお兄さんが闘っている」

「——ッ！」

声はないが、かすかに動揺したような空気が感じられる。

「昨日は私達の負けだったけど、今日は違う。おそらく……ううん、必ず、あなたのお兄さんは負けるわ」

(……ウソ。お兄ちゃんが負けるはずがない)

当然、みどりは字一の偏才を知っている。その偏才を十分に活かせるあのゲームで、字一が負けるはずがないと確信しているのだ。

「私達はあなたのお兄さんの偏才を見抜いて、それを越える作戦を立てた。だから勝てる」

さらに結子は話す。

「みどり。あなたのお兄さんの偏才は……自分の求めているものを選び当てること、でしょう？」

「……」

凶星だった。だが、みどりはそれ以上動揺しないよう、必死に心を落ち着けていた。

(偏才がバレたからって、お兄ちゃんが負けるはずがない。そう、絶対に負けない。だって……)

床に座ったままみどりは顔を上げる。

——脳裏に浮かぶのは、このアジトで過ごした二年間。父が「処分」され、兄は復讐を誓った。母は父の死と同時に家を捨て、みどり自身も暗い絶望を味わったが、兄の不断の努力が立ち直らせてくれた。

『汚れるのは俺だけでいい。みどり、お前は組の人間と関わらず、

普通の女の子として生きてほしい。俺はそれだけが希望なんだ』

進学をあきらめて働きだした兄にそう言われて、みどりは一度復讐心を捨てた。そして以前にも増してソフトボールに熱中するようになったのだ。

『お兄ちゃん。私、今度の試合から一軍の補欠で出してもらえらるって』

『おお、スゴいじゃないか』

二人きりの食事。みどりとの会話だけが字一の支えだった。

『お前の才能が認められたんだな』

『努力も、だよ』

『ああ、そうだな』

あの頃はまだ、笑えていた。

字一は組に睨まれた存在故にまともな職にもつけず、低賃金の労働でどうにか家計をやりくりしていた。その一方で、雲隠れした元彦を探すためにハッキングの技術を磨いた。みどりは毎晩遅くまでパソコンと向き合う兄の姿に心を痛めながらも、兄の支えとなれるよう、明るく振舞っていた。

『明日が試合だったっけ？』

『うん。私と結子がスタメン。もしこの試合で勝ったら、次からも

スタメンで出してもらってるって』

『そうか。それじゃ、何としても勝たなくちゃな』

『うん！』

ソフトがみどりを支え、みどりが字一を支える。そんな日々が続いていた。

そして――。

『――り！ みどり！ バックホームッ！』

たった一度の敗北が、みどりの中に眠っていた絶望を揺り起してしまった。

（絶対に勝つって、監督にも、チームメートにも、お兄ちゃんにも約束したのに……？）

『ごめん。私、打たれちゃった……』

結子がそう言った。決して軽い口調ではなかったが、みどりは許せなかった。

『アンタなんかには会わなければよかったッ！』

その一言が全てを終わらせた。青春、友情、ありふれた日常。希望は潰えた。もはや明石兄妹に残された希望は、復讐しかなかった。

「みどり。あなたのお兄さんは、今日敗北するわ」

結子の声が耳に届いたとき、みどりは遂に自ら課した禁を破った。

「うるさいっ！ 黙っててよ！」

「みどり……」

立ち上がり、ドア越しに思い切り”怒り”をぶちまける。

「どうして邪魔するの！？ アンタ達は何も関係ないのに、どうして首を突っ込んでくるの！？ どうして……私達を、傷つけるのよ……！」

「関係あるからだよ！」

結子もドアに手をつき、声を飛ばす。一枚のドアを隔てて、互いに想いをぶつけ合った。

「私は、みどりと無関係なんかになりたくない！ ジョーと積里君だって、光助やボスと離れ離れになりたくないの！」

「そんなの、ただの身勝手じゃない！」

「身勝手でもイヤなの！ 赤の他人になるだなんて、絶対にイヤ！」

——痛い。結子の言葉が、みどりの胸へ鋭く突き刺さって行く。

「どうして割り切ってくれないの！？ 私は、私はもう全部捨てたのに……！」

「捨ててなんかない!」

「何が……ッ!」

「捨ててないよ、みどり。だって……ボール、受け取ってくれたでしょ……」

ボール。あの、直人の携帯を奪われた時、結子が投げつけたボール。

「それが……それがどうしたって言うのよ!」

みどりは叫ぶと同時に鍵を開け、ドアを壊さんばかりに解放した。

隔てるものがなくなり、二人の視線が直にぶつかる。

「みどり!」

パアァン……。

湿るものを目に溜めた結子の頬に、みどりの平手が飛んだ。

「もう、何も言わないでって言うてるでしょ!?」

感情をせき止めていたダムが、決壊した。

第七十一話・決着、二人

外気が湿り、雨の降る気配が漂ってきた。やがてポツリ、ポツリと雨滴が落ち始め、それほどの時を待たずに激しい大雨となった。

そんな雨の音を打ち消すように、洋館の廊下に響いた音。手加減の無い全力の平手が結子の頬に打ちつけられたのだ。

「もうやめてって……言ってるでしょ……!?!?」

叩いたみどりの手にも痺れが走る。手のひらと同じぐらいに赤くなった顔で、結子の顔を思いつきり睨みつけた。

乾いた音の響いていた時間はほんのわずかだったが、二人には何時間もかかっているように感じられた。

その間に、様々な思いが脳をかけ巡る。痛み。悲しみ。苦しみ。悔い。疲労。そして……遙か昔に感じた、喜び、慈しみ。

かき消された雨音が再び戻ってくる。その雨音に隠れて、結子は小さく口を開いた。

「やめたくないよ……みどり」

左頬を打たれ、若干右の方に顔を向けたままだ。口を開いたのをきっかけにして、目の下にある筋肉が揺れ始めた。揺れは顔全体に伝わり、やがて、二つの瞳からゆるりと涙がこぼれ落ちた。

「やめないよ……絶対に。だって……」

目の前の光景がかすむほどの涙を流しつつ、結子はみどりの方向き直る。

「だって、みどりのことが好きだから！」

——雷鳴のような叫び。溢れ出る涙を隠そうともせず、真っすぐにみどりを見つめる。霞んだ視界の中でも、みどりの顔だけははっきりと見えた。

「ゆい、こ……。そんな、そんな……」

同じことがみどりにも起こりだした。もらい涙ではない。みどり自身の心の底から湧きあがってきた涙が、眼尻に溜まって流れ落ちた。

「どうして!?! 私、あんなに酷いことやって来たんだよ!?! 結子にだって、ずっと、酷いこと……」

「そんなことないよ!」

「私、あの時、結子に謝ってもいないのに……」

二年前の、試合での敗北の時だ。

「結子は、一生懸命に投げってくれたのに、私、取り乱して」

「もういいよ! みどり!」

「会わなければよかった、なんて酷いことを」

「みどり！」

無意識に、結子の左手がみどりの背中に回る。右手はみどりの後頭部に触れ、そのまま自分の体へ押し付けた。

「もう、自分を責めないでよ」

「……」

「私だって、酷いよ。ずっと一緒にいたのに、みどりが苦しんでいたことに気付けなくて……」

「それは結子のせいじゃないよ」

結子の体に顔をうずめたまま、みどりは言い返す。

「私が、ずっと隠してたんだから。私の父さんが組の人間だって結子にバレたら、嫌われるんじゃないかと思って……」

一旦は収まりかけた涙が、再び溢れる。

「結子は、私の親友だもん……。一緒にソフトして、笑って、とても、好きだったから……。嫌われたくなかったの」

「嫌わないよ」

みどりを抱きしめる力が、ますます強くなる。

「嫌いになるわけじゃないでしょ？ みどりは、何も悪くないんだから」

——何も悪くない。もしかしたら、それが最もみどりの望んでいた言葉かもしれない。

「組に復讐なんかしたら、みどり、ますます遠い存在になっちゃうじゃない……。そんなの、絶対にイヤ……」

「イヤ……?」

「絶対にイヤ! みどりと無関係になんかなりたくない!」

涙に濡れ、頬の痛みは温かく癒された。

二人の間の亀裂も、涙と共に流れて消えた――。

「フザケるな! 認められるかッ! そんな事が!」

同時刻、バーのテーブルで字一は叫んだ。それは、元彦の要求に對してであった。

「貴様……今更俺に情けをかけて、償いをしたつもりか!?」

「黙りなさい。字一君。君に決定権はない」

風三が制しようとするが、字一は聞かない。

「光助を解放して残った500万で、俺をカタギに戻せ……だど!」
「?」

「ああ。そうだ」

元彦は断言する。

「そんなに俺の苦勞を踏みにじりたいのか！ 俺は、この組でのし上がるために今まで……」

「黙れっ！」

叫ぶと同時に九断が動いた。字一の持っていたドスを取り返し、鞘にはめたまま字一のノドを突いたのだ。

「グア……ガッ」

「どっちみち、君の野望は潰えたのだ。今日、ここで敗北した瞬間にな」

ドスを突き付けたまま九断が言う。

「当然、敗者には罰が下る。それを免除するために500万を使え、というのだな」

「はい。それだけでなく、カタギとして生きていけるように就職先を……」

「もっ、元、彦おお……！」

字一はのどを押さえられながらも、必死に声を絞り出す。

「そん、なに、俺を追放したい……か！ 自分の、身を、守るために！ グウツ……！」

さらに強く、ドスが押された。

「君に選択肢はない。決めるのは彼らだ」

九断が視線を向けたのは、直人である。

「僕が……」

「そう。勝負に勝って金を稼いだのは君だ。この金の使い道は君の判断で決定する」

「直人」

元彦が静かに声をかける。

（光助の言うとおり、組の世界は決して良いものではない。俺は、彼にカタギとしての幸福を取り戻してほしいんだ）

言葉には出さず、視線で訴える。

「坊主。……お前ん任せるわ」

光助もそう言った。丈二も、和仁も、直人に決断を委ねていた。

全員の視線が募る中、直人は決断した。

最終話・少しだけ素敵な日常

チチチ……と、どこかで小鳥が鳴いている。早朝の図書館に、一人の男が踏み入った。男は真っ直ぐに秘密部屋へと向かう。

「開館前から潜り込んでいたのか」

「誰にも邪魔されたくねえかいね」

やってきたのは元彦、待ち受けていたのは光助だ。

「どんげですか？ そっちは」

「ああ……。今のところはまだ、巡回などといった本格的な仕事は回されていない。もっとも、人手不足のようだからすぐに用件を言いつけられるだろうがね」

朝日のあたる席につき、言葉を交わす。光助の膝の上にはケリーが幸せそうに眠っている。

「それで、俺を呼びだした理由はなんだ？」

本題に切り込む。

「……今回の出来事を通して、おりゃも腹アくくりましたわ」

ポリポリと頭をかきつつ、光助は宣言した。

「高校卒業したら、おりゃも組ん入るわ」

「……そうか」

意外、といえど意外だが、元彦はなんとなく予想していた。

「親父らんやり方は氣にくわん。おりやは、おりゃんやり方で、組を変えていこうて考えちよる」

薄く口を開け、かすかに微笑む。想いはどちらも同じだった。

「そうだな。……変えていこう、俺たちが」

うららかな日射しを受け、二人の若者は笑いあった。

「さて、そろそろ学校に行くかね。しばらくサボったかい取り返さ
にゃ」

「ハハ……。しっかりやれよ」

「お互いに」

ケリーを起こして移動させ、光助は立ち上がる。

「……彼らによろしくな。随分と、巻き込んでしまった」

「……」

『彼ら』。その中に、明石兄妹が含まれていることを光助は感じ取った。

「俺の罪は……重いな。何年償っても消えそうにない」

「そら、罪は消えませんわ」

去り際、もう一言だけ付け加える。

「時間は罪は消せんけど、罪を許してはくりやる」

ギィ、と重い音を立てて扉が閉まり、元彦は一人になった。心なしか部屋中に爽やかな風が流れ、心地よい香りとともに元彦を囲む。

「……夏が、来たな」

「ありがとう、かず君。この間のお願い引き受けてくれて」

「いいってば。俺もじつとしてるのは苦手な性質だしな」

学校では、半袖に衣替えした直人達が会話している。

「それに、あの根暗ランプ野郎が頭下げて頼んできたんだ。これで貸し一つになるからな」

「誰が根暗だ、こら！」

「あ、丈二君、聞いてたの？」

「ここ俺の席だし。ってか何で隣の教室のお前がここに来てんだ！ネクラってのは誰のこだ！？」

「お前のことに決まってるんだろ！」

「またもやケンカだ。もはや直人も止める気にならず、二人を放って窓から空を見上げた。」

（あれから、まだ二週間しか経ってないんだ）

本来なら全く無縁の領域に挑み、激動の渦に飲まれた日々。それは急激に戻ってきた日常とのギャップがあまりに大きく、まるで前世の出来ごとのように感じられた。

「あ……」

校門から、一人の女生徒が入ってきた。夏らしい、早朝にしては強めの日射しを受け、長い髪がキラキラと輝いて見える。

「おい直人。なにボートとしてんだよ」

いつの間にかケンカを中断していた丈二が声をかけてくる。

「ああ、なんだ。結子か」

「へー。ナオって、平崎さんのこと狙ってんの？」

「あ、いや、そんな……」

「今さら隠すっての！」

丈二が笑いながら直人の背を叩く。和仁も好奇の視線を向けてく

る。

「しっかし……なんかよお。結子、前より表情が明るくなってねえか？」

「言われてみりゃあ、何かそうだな」

男三人の視線に気付かず、結子は玄関へと入って行った。

「ナオ。お前、いつから好きになってたんだ？　もしかして中学の時から？」

「じ……実は……そう」

直人は耳の先まで真っ赤に染め、蚊の鳴くような声で答える。

「同じ中学にいたんなら気付けよ……バカ」

「あ？　何か文句でもあんのかてめえ」

再び火種が燃え上がった。

「大体、何でそんなにつつかかってくんだよ！」

「お前が余計なこと言うから——」

ケンカに巻き込まれないよう、直人はそっと教室を出て行く。あともなく廊下をぶらついていると、行き交う生徒達の中に結子を見つけた。

「おはよう、積里君」

「おはよう」

朝日よりも爽やかな笑顔が、直人の心を包む。そしてバタバタと慌ただしく追いかけてくる足音。

「おいしい、どこ行っただよ、直人〜！」

「朝っぱらからうるさいぞ、ジョー」

——日常が戻ってきた。以前よりも、ほんの少しだけ素敵な”日常”が——。

【偏才〜ヘンサイ〜】 完。

最終話・少しだけ素敵な日常（後書き）

【偏才〜ヘンサイ〜】最終話。

唐突に終わったような感じもありますが、これは初めから予定していた通りです。

大詰めまできて長々と細部を描写するのは蛇足だろうーと判断し、あえてぼかしたままの部分が多々あります。ぼかされた部分をどう解釈するか、それを醍醐味としていただければ幸いです。

最後まで読んでくださった方々へ。本当にありがとうございました。
また、どこかでお会いしましょう。

徳山ノガタより

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223e/>

偏才～ヘンサイ～

2010年10月11日17時36分発行